

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第五十一冊

川北遺跡
三殿出口遺跡

2004. 9

香川県教育委員会
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第五十一冊

川北遺跡
三殿出口遺跡

2004. 9

香川県教育委員会
日本道路公団



川北遺跡 I 区



川北遺跡出土綠釉陶器

卷頭図版 2



三殿出口遺跡以東横断道路線遠景



三殿出口遺跡 SF02

序 文

川北遺跡と三殿出口遺跡は東かがわ市に所在する遺跡で、四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が行われました。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成10～11年度に実施しました。これまでの調査・整理作業により、川北遺跡は香川県東端における7～8世紀の貴重な集落跡であることが判明しております。また、遺跡付近に所在した古代南海道の引田駅の所在地の推定にも新たな光を投げかけ、この集落が引田駅の運営に関わった駅戸集落である可能性も出てきております。一方、三殿出口遺跡では江戸時代の讃岐の特産品であった砂糖製造を示す砂糖竈が発見されたことなどから、この地域が当時の砂糖製造業の中心地であったことが裏付けられました。

このたび、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度に実施しました整理事業が終了し、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十一冊」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、日本道路公团並びに関係諸機関、地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年9月

香川県埋蔵文化財センター

所長 中村 仁

例　　言

1. 本報告書は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第五十一冊で、香川県東かがわ市（発掘調査当時大川郡引田町）小海に所在する川北遺跡（かわきたいせき）及び東かがわ市（発掘調査当時大川郡大内町）三殿に所在する三殿出口遺跡（みどのぐちいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財團法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時）が調査を担当した。
3. 発掘調査の期間及び担当者は以下のとおりである。

川北遺跡

予備調査　期間　平成10年4・5月

　　担当者　中西　昇、島田英男、西岡達哉、野崎隆亨、糸山　晋、正山泰久

本調査　期間　平成10年8月～平成11年3月

　　担当者　木下晴一、香西　亮、中山尚子

三殿出口遺跡

予備調査　期間　平成10年6・7月

　　担当者　木下晴一、香西　亮、中山尚子

本調査　期間　平成11年4月～6月、11月

　　担当者　長元茂樹、松岡宏一、中山尚子

4. 調査・整理に当たって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

　香川県土木部横断自動車道対策室（調査当時）、同長尾土木事務所横断道対策課（調査当時）、引田町横断道対策室（調査当時）、大内町横断道対策室（調査当時）、地元対策協議会、地元自治会

5. 本報告書の作成は、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。執筆・編集は古野徳久が担当した。

　なお、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末に廃止となったため、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

6. 本文中で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
　　遺構名は調査時のものを使用せず、収録した遺構のみに対し、新しく付与した。調査時の遺構名との対応は、第5・6表変更遺構番号対照表を参照されたい。また、遺構は下記の略号により表示している。

S B	……掘立柱建物	S A	……柵列	S P	……柱穴	S K	……土坑
S E	……井戸	S F	……焼成遺構	S T	……墓	S X	……性格不明遺構
S D	……溝	S R	……自然河川				

7. 石器実測図中、現代の欠損は黒で塗りつぶしている。砥石輪郭線の回りに実線がある場合は砥ぎ面とその可能性のある面を表す。須恵器杯蓋では回転ヘラ削りの範囲を実線と一点破線を用いて示している。陶磁器では釉の範囲を一点破線を用いて示している。

8. 採図の一部に国土地理院地形図「三本松」「引田」（以上1/25,000）、国土基本図「IV - FF38」

- 「IV - FF48」「IV - FG40」「IV - FG50」（以上1/5,000）を使用した。
9. 遺構断面図内に付された「L =」以下の数値は、その下（時に上）に付された横線の標高を示す。
10. 土器観察表は以下の基準で作成している。
- 「残存率」は残存する遺物が復元した場合に占める量を、復元径を8等分し表記した。完形品に対する割合ではない。図化部分の表記がないものは口縁に対する割合である。割合が1/8以下または径が割り出せないため算出不能なものは「小片」とした。
- 「胎土」は含まれる鉱物・岩石の径と量を、以下の省略形を組み合わせて示している。また特殊な鉱物・岩石は別途記した。
- 微：径0.5mm以下 細：径0.6～1.0mm 中：径1.1～3.9mm 粗：径4.0mm以上
多：非常に多く含む 普：一定量含む 少：少量含む
- 「色調・釉色調」は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年版』による。
- 「外面調整・内面調整」は認められる調整を列記した。
11. 土器の時期判断は以下の論文に依った。
- 弥生土器；真鍋昌宏 1992 「2 讀岐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社
青磁；上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究No 2』日本貿易陶磁研究会
緑釉陶器；日永伊久男 1990 「近江の緑釉陶器生産」『緑釉陶器の流れ』三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館

本文目次

序文

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過と予備調査の結果

1 調査に至る経過 1

2 予備調査の結果 1

第2節 調査の経過と体制

1 調査の経過 6

2 発掘調査及び整理作業の体制 7

第2章 川北遺跡の調査

第1節 歴史・地理的環境と立地

第2節 調査の方法

1 地区割り 10

2 記録類の作成 12

第3節 土層序

第4節 遺構・遺物

第5節 まとめ

第3章 三殿出口遺跡の調査

第1節 歴史・地理的環境と立地

第2節 調査の方法

1 地区割り 62

2 記録類の作成 62

第3節 土層序

第4節 遺構・遺物

第5節 まとめ

第4章 自然科学調査の成果

第1節 川北遺跡出土柱材の樹種同定報告

報告書抄録

挿図目次

川北遺跡

第1図 四国横断自動車道（津田～引田間） 埋蔵文化財包蔵地図	2	第30図 SK05平・断面図（1/30）	31
第2図 引田町（当時）塙屋B地区予備調査トレンチ 配置図（1/4,000）	5	第31図 SK06平・断面図（1/30）	31
第3図 川北遺跡周辺の遺跡分布（1/25,000）	10	第32図 SK07平・断面図（1/30）	31
第4図 川北遺跡周辺地形分類図	11	第33図 SK08平・断面図（1/30）	32
第5図 川北遺跡調査区割り・グリッド図（1/1,000）	12	第34図 SK09平・断面図（1/30）	32
第6図 川北遺跡土層図①（1/80）	14	第35図 SK10平・断面図（1/30）	32
第7図 川北遺跡土層図②（1/80）	15	第36図 SE01平・断面図（1/30）	33
第8図 SB01平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	16	第37図 SX01・SX02断面図（1/30）	33
第9図 川北遺跡追跡位置見取り図（1/300）	17～18	第38図 SD01・SD02断面図（1/30）	33
第10図 SB02平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	19	第39図 SD03断面図（1/30）、出土遺物実測図（1/4）	34
第11図 SB03平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	20	第40図 SD05断面図（1/30）、出土遺物実測図（1/4）	34
第12図 SB04平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	21	第41図 SD04断面図（1/30）、出土遺物実測図（1/4）	35
第13図 SB05平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	22	第42図 SD06断面図（1/30）、出土遺物実測図（1/4）	35
第14図 SB06平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	23	第43図 SD07断面図（1/30）	35
第15図 SB07平・断面図（1/80）	24	第44図 SD08・09断面図（1/30）、 SD08出土遺物実測図（1/4）	36
第16図 SB08平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	24	第45図 SD10断面図（1/30）、SD09・SD10 出土遺物実測図（1/4）	37
第17図 SB09平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	25	第46図 SD11断面図（1/30）	37
第18図 SB10平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	26	第47図 SD17出土遺物実測図（1/4）	37
第19図 SB11平・断面図（1/80）	27	第48図 SD12～16断面図（1/4）、 SD12出土遺物実測図（1/4）	37
第20図 SB12平・断面図（1/80）	28	第49図 SD18断面図（1/30）、出土遺物実測図（1/4）	38
第21図 SA01平・断面図（1/80）、 出土遺物実測図（1/4）	28	第50図 SR01杭列①平・横断面図（1/50）	39
第22図 SP06平・断面図（1/30）	29	第51図 SR01杭列①根断面図（1/50）	40
第23図 SP01出土遺物実測図（1/4）	29	第52図 SR01杭列②平・断面図（1/50）	40
第24図 SP07平・断面図（1/30）	29	第53図 SR01出土遺物実測図（1/4）	40
第25図 SK01平・断面図（1/30）	29	第54図 包含層出土遺物実測図①（1/2, 1/4）	41
第26図 ピット（SP02～SP05）出土遺物実測図（1/4）	29	第55図 包含層出土遺物実測図②（1/4）	42
第27図 SK02平・断面図（1/30）、 出土遺物実測図（1/4）	30	第56図 包含層出土遺物実測図③（1/4）	43
第28図 SK03平・断面図（1/30）、 出土遺物実測図（1/4）	30	第57図 包含層出土遺物実測図④（1/4）	44
第29図 SK04平・断面図（1/30）	31	第58図 包含層出土遺物実測図⑤（1/4）	45
		第59図 包含層出土遺物実測図⑥（1/4）	46
		第60図 包含層出土遺物実測図⑦（1/4）	47
		第61図 包含層出土遺物実測図⑧（1/4）	48
		第62図 包含層出土遺物実測図⑨（1/4）	49
		第63図 包含層出土遺物実測図⑩（1/4）	50
		第64図 包含層出土遺物実測図⑪（1/4）	51
		第65図 川北遺跡の位置と条里地割の復元（1/10,000）	56

三段出口遺跡

第66図 三段出口遺跡周辺の遺跡分布（1/25,000）	60
第67図 三段出口遺跡位置図（1/5,000）	61
第68図 三段出口遺跡調査区割り図（1/1,000）	63

第69図 三殿出口遺跡土層図① (1/80)	64
第70図 三殿出口遺跡土層図② (1/80)	65
第71図 SB01平・断面図 (1/80)	66
第72図 SP01平・断面図 (1/30)	66
第73図 三殿出口遺跡遺構位置見取り図 (1/400)	67～68
第74図 SP02平・断面図 (1/30)	69
第75図 SP04出土遺物実測図 (1/4)	69
第76図 SP03出土遺物実測図 (1/4)	69
第77図 SK01平・断面図 (1/30)	69
第78図 SK02～04平・断面図 (1/30)	70
第79図 SK05平・断面図 (1/30)、 出土遺物実測図 (1/4)	70
第80図 SK06平・断面図 (1/30)、 出土遺物実測図 (1/4)	71
第81図 SE01埋め立て面積出状況 (上) ・井戸幹?検出状況 (下) (1/30)	72
第82図 SE01平・断面図 (1/30)、 出土遺物実測図 (1/4)	73
付図 1 香川県川北遺跡遺構位置図 (1/200)	
付図 2 香川県三殿出口遺跡遺構位置図 (1/300)	

表 目 次

第1表 四国横断自動車道（津田～引田間）建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(1)	3
第2表 四国横断自動車道（津田～引田間）建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(2)	4
第3表 引田町（当時）塩屋B地区予備調査結果	5
第4表 川北遺跡出土木材樹種同定結果	85
第5表 川北遺跡変更遺構番号対照表	88
第6表 三殿出口遺跡変更遺構番号対照表	88
第7～25表 川北遺跡遺物観察表(1)～09	89～107
第26～29表 三殿出口遺跡遺物観察表(1)～(4)	108～111

図 版 目 次

卷頭図版 1 川北遺跡 I 区 川北遺跡出土綠釉陶器	
卷頭図版 2 三殿出口遺跡以東横断道路線遠景 三殿出口遺跡 SF02	
図版 1 川北遺跡 I 区調査終了（傍観）	
図版 2 川北遺跡 II 区調査終了（傍観）	
川北遺跡 III 区調査終了（傍観）	
図版 3 川北遺跡 IV 区調査終了（傍観）	
図版 4 川北遺跡遠景（南より） 川北遺跡 I 区調査終了（南西より）	
図版 5 川北遺跡 I 区調査終了（南より） 川北遺跡 II 区調査終了（南東より）	
図版 6 川北遺跡 SB01・02、SD01～03調査終了（西より） 川北遺跡 SB01・02・09、SD01～03 調査終了（東より）	
図版 7 川北遺跡 SB01・02・04、SD01～03 調査終了（北より）	
川北遺跡 SB03・09調査終了（南より）	
図版 8 川北遺跡 SB02柱痕検出状況（南より）	
川北遺跡 SB02調査終了（南より）	
図版 9 川北遺跡 SB05・06調査終了（東より） 川北遺跡 SB05～07・09調査終了（南より）	
図版 10 川北遺跡 SB10、SD05～09調査終了（南より） 川北遺跡 SB12調査終了（南より）	
図版 11 川北遺跡 SB01～SP8断面（西より） 川北遺跡 SB01～SP11断面（北より）	
図版 12 川北遺跡 SB04～SP6断面（西より） 川北遺跡 SD08・09調査終了（東より）	
図版 13 川北遺跡 SD18調査終了（北西より） 川北遺跡 III 区噴砂痕（シミ状のもの） 検出状況（南より）	
図版 14 川北遺跡 SR01杭列②打ち込み断面（南より） 川北遺跡 SR01杭列②打ち込み状況（南東より）	

- 図版15 三殿出口遺跡 II - ②・④区、III - ②区
調査終了（傍観）
- 図版16 三殿出口遺跡 I - ②・③区調査終了（北より）
三殿出口遺跡 I - ②・③区調査終了（南西より）
- 図版17 三殿出口道路SD01内襤群検出状況（西より）
三殿出口道路SD02内襤群検出状況（南より）
- 図版18 三殿出口遺跡 I - ④東区
第1造構面調査終了（南より、SD03他）
三殿出口遺跡 I - ④東区
第2造構面調査終了（西より）
- 図版19 三殿出口遺跡ST01検出状況（南より）
三殿出口遺跡ST01火葬骨検出（南西より）
- 図版20 三殿出口遺跡ST02土器出土状況
三殿出口遺跡ST02調査終了（東より）
- 図版21 三殿出口遺跡 I - ④西区
第1造構面調査終了（西より）
三殿出口道路 II - ②北区
第1造構面調査終了（東より）
- 図版22 三殿出口遺跡SE01埋め立て襤群検出状況（北西より）
三殿出口遺跡SE01石織み検出状況（北西より）
- 図版23 三殿出口遺跡SE01竹籠み検出状況（南より）
三殿出口遺跡SK06土器出土状況（南より）
- 図版24 三殿出口遺跡 II - ②南区
第1造構面調査終了（南西より）
三殿出口遺跡 II - ②・④区、III - ②区
調査終了（北より）
- 図版25 三殿出口遺跡 II - ②・④区、III - ②区
調査終了（南より）
三殿出口遺跡SF02調査終了（東より）
- 図版26 三殿出口遺跡SF02北側焼成室
石組み検出状況（東より）
三殿出口遺跡SF03調査終了（東より）
- 図版27 三殿出口遺跡SF01調査終了（東より）
三殿出口遺跡SB01調査終了（南西より）
- 図版28 川北遺跡出土遺物(1)
- 図版29 川北遺跡出土遺物(2)
- 図版30 川北遺跡出土遺物(3)
- 図版31 川北遺跡出土遺物(4)
- 図版32 川北遺跡出土遺物(5)
- 図版33 川北遺跡出土遺物(6)
- 図版34 川北遺跡出土遺物(7)
- 図版35 川北遺跡出土遺物(8)・三殿出口道路出土遺物(1)
- 図版36 三殿出口遺跡出土遺物(2)
- 図版37 三殿出口遺跡出土遺物(3)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過と予備調査の結果

1 調査に至る経過

四国横断自動車道のうち津田～引田間の建設については、平成5年度に建設大臣から日本道路公团總裁に対し建設の施工命令が下され、平成6年度に路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財保護に関し、平成4年度から県教育委員会と日本道路公团高松建設局とで事前協議が開始された。平成7年6・7月には県教育委員会が国庫補助事業として分布調査を行い、津田～引田間において22地区が埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公团に通知した。日本道路公团は県教育委員会の意見を踏まえ、平成7年10月文化庁と協議を行い、平成8年1月文化庁から「工事の施工に先立って発掘調査を実施すること」等的回答がなされた。これにより事前協議は終了し、平成8年4月、県教育委員会と日本道路公团との間で埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、更に県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で発掘調査の委託契約が締結された。

一方、県教育委員会は明石大橋開通に合わせた津田～引田間の高速道路の整備は香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成8・9年度に文化財専門職員を新規採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間22地区の調査対象地区のうち大川郡引田町（当時）には6地区、大川郡大内町（当時）には11地区がそれぞれあり、具体的な遺跡の内容を把握するため、用地買収の進捗にあわせて平成8年度より順次予備調査を実施し、本調査の範囲を確定していった。一方、予備調査により範囲を確定した遺跡の本調査も平成9年度より進められていった。

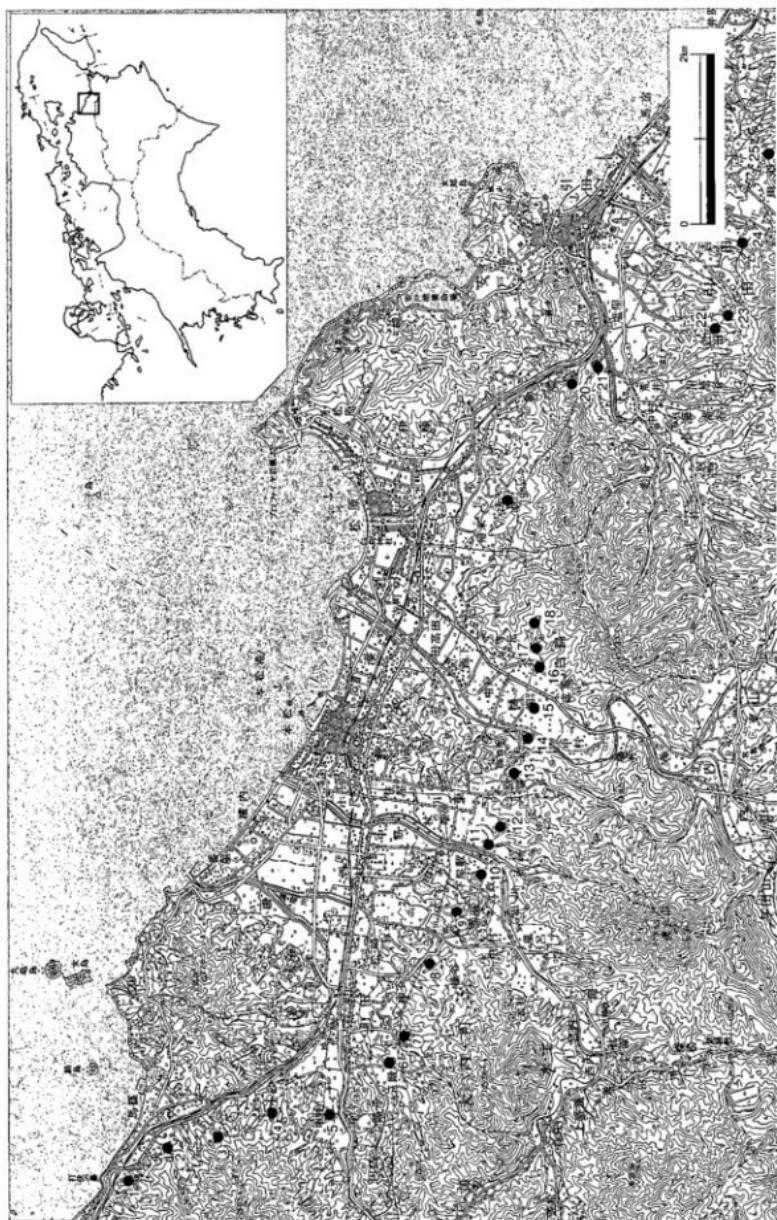
津田～引田間22地区の予備調査及び本調査の位置・調査内容・報告書刊行状況について、第1図及び第1・2表にまとめて示している。

2 予備調査の結果（第2図）

引田町（当時）内6地区のうち、「塩屋A・B地区」の予備調査は平成10年度に実施した。

4月9日に旧土地所有者を対象とした説明会を開催し、同月13日から小海川北岸の塩屋A地区で調査を開始した。24日からは南岸のB地区に調査が移り、5月1日に塩屋A・B地区の予備調査が終了した。調査の方法は、小型の機械と人力で遺構面または基盤層まで掘削した後に遺構の有無を確認し、存在した場合は遺構配置図の作成と写真撮影で記録を残した。最後に埋め戻しを行い、旧状に復した。

調査の結果、A地区の遺構が密集して検出された範囲を「川北遺跡」と命名し、改めて7,158m²の全面発掘調査を行うことになった。一方B地区は後に詳細地図で検討した結果条里地割が認められ、川北遺跡の調査結果と強い関連が指摘されることになったが、この時点ではその可能性は念頭になかった。トレチ調査で検出された遺構はわずかにピット2と旧河川1のみであり、遺構の希薄さから全面調査に至らなかった。トレチ配置と各トレチの概要は第2図と第3表で示す。遺物の出土量はいずれもごく少量で、時期の明瞭に判る遺物も少ない。その中で、13トレチ出土の須恵器杯は細片ながら身上に立ち上りが付き口径の小さいもので、6世紀末から7世紀前半ごろと推測できる。また、24トレ



第1図 四国横断自動車道（津田～引田間）埋蔵文化財包藏地図

備 考						
遺跡名	地区名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間		
1 中谷遺跡	中谷	さぬき市津田町鶴羽	518	8.10.1~9.1.31	平成15年度報告書刊行。第47冊	
2 大山遺跡	大山	さぬき市津田町鶴羽	2,113	8.10.1~9.1.31	平成15年度報告書刊行。第47冊	
(3) 馬籠		東かがわ市馬籠	620	9.7.1~9.8.31	平成9年度概報で報告完了	
(4) 小砂		東かがわ市小砂	100	9.6.1~9.6.30	平成9年度概報で報告完了	
5 坪井遺跡	中山	東かがわ市中山	6,566	10.9.1~11.3.31	平成13年度報告書刊行。第40冊	
6 三般出口遺跡	三般	東かがわ市三般	135	11.7.1~11.7.31		
(7)	町田	東かがわ市町田	6,370	11.11.1~11.11.30		
			69	10.9.1~10.9.30	平成10年度概報で報告完了	
			1,000	11.3.1~11.3.31		
8 楠谷遺跡	楠谷	東かがわ市水主	1,578	9.7.1~10.3.31	平成15年度報告書刊行。第47冊	
(9)	高原	東かがわ市水主	460	8.12.1~8.12.31		
			11	9.9.1~9.9.30	平成9年度概報で報告完了	
			446	8.11.1~8.11.30	平成12年度報告書(1)刊行。第36冊	
10 金毘羅山遺跡	下屋敷	東かがわ市水主	100	10.3.1~10.3.31	平成15年度報告書(II)刊行。第46冊	
			3,600	10.4.1~10.8.31		
			1,300	11.12.1~12.3.31		
			15	9.9.1~9.9.30	平成12年度報告書刊行。第36冊	
11 塔の山南遺跡	別所	東かがわ市川東	1,300	11.1.1~11.3.26		
12 西谷遺跡	枝の端	東かがわ市川東	2,092	9.6.1~10.3.31	平成9年度概報で報告完了	
			500	9.2.1~9.2.28	平成13年度報告書(1)刊行。第39冊	
13 原間遺跡	原間	東かがわ市川東	19,254	9.4.1~10.3.31	平成14年度報告書(II)刊行。第42冊	
			24,243	10.4.1~11.3.31		
14 橋端遺跡	橋端	東かがわ市藤井	3,590	10.12.1~11.3.31	平成14年度報告書刊行。第43冊	
			1,647	11.9.1~11.10.31		

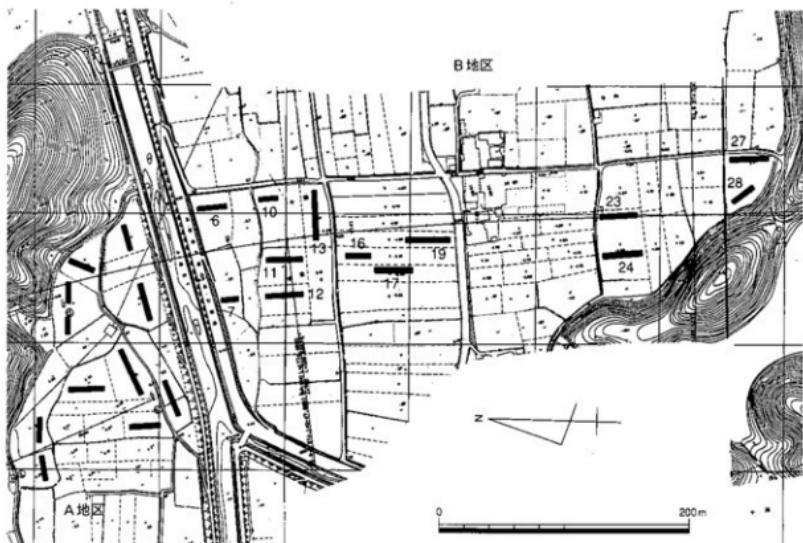
第1表 四国横断自動車道(津田~引田間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(1)

第2表 四国横断自動車道(津田～引田間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(2)

遺跡名	地区名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	備考
15 成重遺跡	成重	東かがわ市白鳥	1,500 14,650	9.2.1～9.2.28 9.4.1～10.3.31	平成15年度報告書(1)刊行。第47冊
16 谷遺跡	谷	東かがわ市白鳥	6,543 4,192	10.4.1～11.3.31 11.6.1～12.3.31	平成16年度報告書(II)刊行予定。第54冊
17 善門池西遺跡	池の奥	東かがわ市白鳥	111	10.7.1～10.7.31	平成16年度報告書刊行予定。第52冊
18 池の奥遺跡	法月	東かがわ市白鳥	2,741 900	11.9.1～12.3.31 12.4.1～12.8.31	平成16年度報告書刊行予定。第53冊
19		東かがわ市白鳥	3,566	9.11.17～10.3.31	平成15年度報告書刊行。第50冊
20 天王谷遺跡	塩屋	東かがわ市引田	1,050	11.7.1～11.8.31	平成15年度報告書刊行。第46冊
21 川北遺跡		東かがわ市小海	8,700	10.6.1～11.3.26	平成15年度報告書刊行。第46冊
22 逃田石垣遺跡	逃田	東かがわ市引田	510	10.1.1～10.1.31	平成9年度概報で報告完了
23 逃田谷川下池遺跡		東かがわ市引田	1,200	11.1.22～11.3.24	平成14年度報告書刊行。第45冊
24 鹿庭遺跡	鹿庭	東かがわ市吉田	1,475	11.7.1～11.8.31	平成14年度報告書刊行。第45冊
25 鹿の谷遺跡	黒羽	東かがわ市黒羽	6,038	10.8.1～11.3.31	本書
	合計		554	10.4.1～10.5.31	平成14年度報告書刊行。第44冊
			2,300	11.4.1～11.6.30	
			1,450	10.12.1～10.1.29	平成14年度報告書刊行。第44冊
			310	9.7.1～9.10.31	平成14年度報告書刊行。第44冊
			3,800	10.4.6～10.8.31	
			3,978	9.10.1～10.3.31	平成12年度報告書刊行。第36冊
			145,724		

※ 遺跡名の数字は第1回の数字と対応する。

※ 遺跡名の数字のうち○で囲んだものは、予備調査のみで調査が終したものと示す。



第2図 引田町（当時）塩屋B地区予備調査トレンチ配置図（1/4,000）

トレンチ番号	検出遺構	出土遺物
6・7・10・16・17	なし	なし
11	なし	磨滅弥生土器？
12	ピット1	磨滅土師器
13	なし	須恵器杯
19	なし	磨滅土師器
23	ピット1	土師器・須恵器
24	旧河川1	磨滅土師器・磨滅須恵器・磨滅弥生土器？・木製品桶
27	なし	磨滅弥生土器
28	なし	磨滅土師器・磨滅弥生土器

第3表 引田町（当時）塩屋B地区予備調査結果

その旧河川は木下晴一（現香川県歴史博物館勤務）が『引田町の歴史を振りおこそう』（四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査説明会、平成10年12月12日引田町公民館開催）資料3頁で地形復元から推測した小海川旧河道に当たる可能性がある。木製品の桶底は第64図の最後に実測図を示した。一緒に出土した土師器杯は口径が大きく底外面にヘラ切り痕と思われる渦巻状の痕跡が残る。時期は中世と考える。遺構の希薄さ・遺物の古代以前への偏りなど検討材料は幾つかある。条里地割の部分に旧河川が認められない点も考えると、この地割が古い可能性はある。水田の有無については、削られた可能性もあり、予備調査の意図がその点に及んでいなかったことも考えられ、判断できない。

更に川北遺跡北の丘陵上でも、尾根続きの西に川北1号墳があることから、墳墓の所在の有無を確認するために予備調査を行っている。同じ「塩屋地区」とし、川北遺跡調査中の平成10年10月13日と12

月7～9日に、尾根上に沿ってトレーナーを設定し掘削を行った。厚さ10cmの腐植土・花崗岩風化土の下に花崗岩盤が現れたのみで、遺構・遺物は存在しなかったため、これで調査を終えた。

次に大内町11地区のうちの「三殿地区」の予備調査は平成11年4月に開始した。調査の方法は、同様に小型の機械と人力で遺構面または基盤層まで掘削した後に遺構の有無を確認し、存在した場合は遺構配置図の作成と写真撮影で記録を残した。最後に埋め戻しを行い、旧状に復した。

三殿地区は地区全体を「三殿出口遺跡」と命名し、予備調査の結果により必要があると判断した範囲6,370m²の全面発掘調査を同時平行で行っていった。

第2節 調査の経過と体制

1 調査の経過

川北遺跡では、平成10年4・5月の予備調査の結果を受けて、本調査対象範囲を決定した後の平成10年8月より本調査を開始した。調査はI～IV区の計6,038m²を対象に、発掘作業のうち掘削作業を土木業者に委託する工事請負方式で行った。なお、川北遺跡は引田ICにあたり、ここへ進入する県道部分も同じ川北遺跡V区1,120m²として同時期の平成10年9～11月に調査を行った。

調査の経過を発掘調査時の月毎資料で追うと、仮設工の準備の後、8月19日より調査を開始した。予備調査で遺構密度が最も高かった北東山裾のI区から機械掘削に入った。9月にはこの南側で本体橋脚工事に入る予定であり、工事との調整の結果でもあった。8月31日には包含層の人力掘削を開始した。10月6日にはIV区の機械掘削に入った。この間9月22日の台風7号、10月17日の台風10号により、2度遺跡が水没する事態に見舞われ、掘削中の遺構に大きな被害を与えた。10月13日には、北の丘陵上で予備調査を行った。10月末で漸くI区の調査を終了し、11月17日にII区、1月11日に残るIII区の機械掘削に入った。2月22日にIII区の下層確認調査を行い、全調査を終了した。

また平成10年12月12日には、「引田町の歴史を掘りおこそう」と題し、四国横断自動車道建設に伴い引田町（当時）内で既に発掘調査が終了した3遺跡の説明会を開催した。

三殿出口遺跡では、区分けされた各調査区でまず予備調査のトレーナーを設定し、遺構・遺物状況を判断した後、必要と判断した調査区で全面本調査を行うという手法をとった。月毎資料によると、4月6日にI-④東区の機械掘削を行うことから調査に着手した。I-④東区は遺構面を2面確認し、更に第2遺構面の下には弥生時代の遺物包含層が広がることが明らかになった。続いて4月9日にII-②北区の機械掘削に入った。こちらもI-④東区からの続きであろう弥生時代の遺物包含層を確認し、これは遺跡の東を流れる風呂川の古い流路に削られていた。包含層上には古い流路が氾濫した際の土砂が堆積し、この上では遺構は確認できなかったため遺構面と認定せず、包含層上面を第1遺構面とした。なおI-④東区では第2遺構面の下（弥生時代の遺物包含層の下）で第3遺構面を想定したが、遺構は確認できなかった。4月下旬にはI-④西区、続いてII-②北区第2遺構面の機械掘削に入った。II-②北区第2遺構面では、SK02～06などの弥生時代の遺構を検出している。しかし弥生時代の包含層が薄いため、2つの遺構面に分かれるはずのところが、恐らく機械掘削や遺構面の微妙な凹凸により部分的に1つの遺構面として調査されるなどして、第1遺構面で検出すべきピットを第2遺構面で検出しているものもある。遺構面間が薄い場合よく起こる調査ミスであるが、この報告で一つの目標としたかった中近世の掘立柱建物を復元することがいっそう困難になったことは否めない。5月6日に調査

を開始したⅡ-②南区では弥生時代の土器包含層が薄く一部は存在しなかったようである。基盤層上でピット多数を検出している。これを第1遺構面とし、更に下に第2遺構面が存在するとされるが、基盤層下に存在することになり矛盾する。ここでも薄い包含層の存在にミスが誘発されているようである。遺構面の調査区内また調査区同士の整合については第3章第1節土層序でも検討している。Ⅲ-②区・Ⅱ-④区は5月中旬に調査を開始した。Ⅱ-②南北区・Ⅲ-②区の東からⅡ-④区全体にかけて広がる旧風呂川上面でも、希薄ながら遺構が検出されている。この範囲では遺構面は1面である。Ⅱ区大部分とⅢ-②区は5月中に調査を終了し、直後から道路本体工事に入っていた。6月に入って、Ⅰ-①南区・Ⅱ-①南区・Ⅱ-③西区・Ⅲ-①南北区の調査を行った。いずれも遺構面は1面のみで、遺構も極めて希薄であり調査は順調に進んだ。このほか、Ⅰ-①北区・Ⅰ-②区・Ⅱ-①北区・Ⅲ-①中区・Ⅲ-③区は遺構を確認しなかったため、トレンチ調査で終了した。また、Ⅱ-③東区は隣接調査区の状況から掘削を行わなかった。

2 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査

		平成10年度			平成11年度		
香川県教育委員会文化行政課							
総括	課長 課長補佐	小原 克己 北原 和利			課長 課長補佐	小原 克己 小国 史郎	
総務	副主幹兼係長 係長 主査 主査	西村 隆史 中村 植伸 三宅 陽子 松村 崇史			係長 主査 主査	中村 植伸 三宅 陽子 松村 崇史	
埋蔵文化財	副主幹 係長 主任技師	渡部 明夫 西村 尋文 塙崎 誠司			副主幹 係長 文化財専門員 主任技師	廣瀬 常雄 西村 尋文 森 格也 塙崎 誠司	
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
総括	所長 次長	菅原 良弘 小野 善範			所長 次長	菅原 良弘 川原 裕章	
総務	参考事務 副主幹兼係長 主査 主査	別枝 義昭 田中 秀文 西川 大(～5.31) 新一郎(6.1～)			副主幹兼係長 副主幹兼係長 係長	六車 正憲 田中 秀文 新一郎	
調査	参考事務 主任文化財専門員 文化財専門員 主任技師 調査技術員	長尾 重盛 大山 眞充 木下 晴一 香西 亮 中山 尚子			参考事務 主任文化財専門員 主任文化財専門員 主任技師 調査技術員	長尾 重盛 大山 真充 長元 茂樹 松岡 宏一 中山 尚子	

整理作業

平成15年度	
	香川県教育委員会文化行政課
総括	課長 北原 和利 課長補佐 森岡 修
	所長 中村 仁 次長 渡部 明夫
総務	主任 香川 浩章 主査 須崎 陽子 主事 八木 秀憲
	副幹係 主査 主任主事 野保 昌弘 多田 敏弘 塩崎かおり 田中 千晶
埋蔵文化財	副主任 大山 真充 文化財専門員 片桐 孝浩 主任技師 佐藤 竜馬 松本 和彦
	調査 主任文化財専門員 真鍋 昌宏 文化財専門員 古野 徳久

整理作業は整理員1名、整理補助員1名、整理作業員3名の体制で、平成15年10月～平成16年3月の6ヶ月間で実施した。川北遺跡ではコンテナ37箱、三殿出口遺跡では20箱の遺物が出土しており、その中から遺構の時期を示す遺物を中心に実測を行う遺物を抽出した。抽出率は、単純に川北遺跡で1箱あたり16点、三殿出口遺跡で4点の計算となる。三殿出口遺跡は遺構出土の遺物が少ない、出土遺物が細片で磨滅している、近世以降の遺物が多いなどの点で、実測点数が少ない結果となった。実測の主体を占めた川北遺跡では須恵器が多かったため、実測作業は順調に進んだ。またちょうど開催されていた古代官衙・集落研究会「駅家と在地社会」(2003年12月12・13日、奈良文化財研究所)に出席し、川北遺跡の古代掘立柱建物群の性格を考えていく上で重要な示唆を得た。第3章第4節まとめはこれを基礎に組み立てている。

第2章 川北遺跡の調査

第1節 歴史・地理的環境と立地（第3図）

四国横断自動車道建設以前の引田町（当時）の遺跡については、これまで刊行された本シリーズの第36冊庵の谷遺跡と、引田町史で解説が行われている。また、四国横断自動車道建設に伴い調査された引田町（当時）内の6つの遺跡のうち5つの遺跡の成果については本シリーズの第36冊庵の谷遺跡、第44冊遼田石垣遺跡・遼田谷川下池遺跡・鹿庭遺跡、第45冊天王谷遺跡として既にまとめられている。また、近年も周辺の圃場整備で弥生時代の集落が発見されるなどしており、弥生時代及び中世の遺跡の発見が目覚しい。繩文時代についてもその遺物の分布が広いことが明らかになってきた。逆に古墳時代については、古墳の数が示すとおりに遺跡が少ないことが裏付けられている。

川北遺跡は現時点で引田町（当時）内で最も重要な古代の遺跡であり、それ故この報告書では引田町（当時）の古代についてまとめる事にもなる。ここでは古墳時代後半～古代の遺跡の概要を上記資料より抽出しまとめておく。

古墳時代

墳墓として、川北1号墳が知られる。出土須恵器から6世紀末から7世紀前葉の時期が考えられている。周辺では更に数基の古墳が存在したとされるが、現存していない。今回の塩屋地区の丘陵部分の予備調査も、周辺にもともと古墳がないことを示すかのようである。千尋古墳は中世の塚の可能性が高い。この他沖代赤坂と中山池西で時期不明の土器片が採集されている。川北1号墳への登り口で、7世紀後半の須恵器を出土する井戸状遺構が検出されている。沖代水田遺跡では、奈良時代の須恵器を包含する砂層に覆われた水田跡が検出されている。遼田石垣遺跡で古墳時代の流路が検出されている。平成15年度に発掘調査の行われた小海荒井遺跡では7世紀～8世紀前半の遺構・遺物が検出されている。

古代

外源蔵、刈畠、内源蔵では奈良時代の土器片が、川北、坂本大谷では平安時代の土器片が、採集されている。馬宿畠方遺跡では、奈良時代～平安時代初期の製塩土器が出土している。遼田石垣遺跡・鹿庭遺跡で古代の土器片が採集されている。

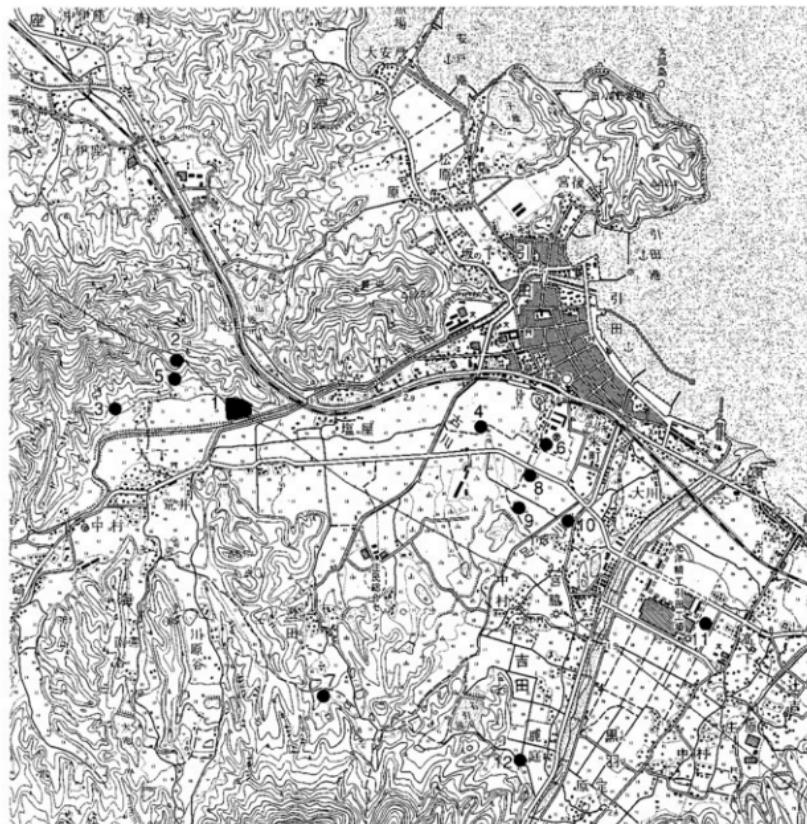
川北遺跡は北側に川北1号墳の所在する低丘陵を背にし、南側は小海川に面する沖積平野上に立地する。地理的環境については木下晴一による研究がある。それによりながら記すと引田港沿いには砂嘴が形成され、それによりその背後に潟が形成された。潟は現在埋積してしまったが、「塩屋」「小海」の地名から、古代もしくは中世の段階では海水が流入していたと推測される。この潟は後に塩田と水田となるが、水田は近世新田開発の地割りに見られるような整然としたものではない。とすれば、潟の西南方と東方に認められる条里型地割は整然としているとはいえ、潟の水田化以前と判断できる。同様に空中写真判読によって作成した微地形分類図である第4図のとおり、潟は条里型地割の認められる地点まで浸入していないことが裏付けられる。現状では条里型地割の形成時期をこれ以上に限定できない。但し、東側の条里型地割と沖代水田遺跡の位置が重なるため、この遺跡の時期まで条里型地割が遡る可能性を考えることはできるかもしれない。現在遺跡のすぐ南を小海川が流れているが、これも木下によると、詳細な等高線の復元により近世初頭に瀬替えが行われ現在の位置に固定されたと考えられる。

第2節 調査の方法

1 地区割り（第5図）

全体を現状の土地区画・事業主体・調査着手順によって5つに分け、I～V区とした。I～IV区は四国横断自動車道に伴う調査であるため日本道路公団が事業主体、V区はその引田ICへ進入する県道であるため香川県土木部が事業主体である。この報告書では、I～IV区のみ報告を行っている。V区は未報告で、今後に報告書作成を行う予定である。

また、遺跡全体に一辺10mの網目をかぶせ、それぞれの網にグリッド番号を与えている。網目は南



第3図 川北遺跡周辺の遺跡分布 (1/25,000)

1 川北遺跡	4 沖代赤坂	7 逆田石垣遺跡	10 内源蔵
2 川北1号墳	5 川北	8 外源蔵	11 馬宿畠方
3 千尋古墳	6 沖代水田遺跡	9 割畑	12 鹿庭遺跡

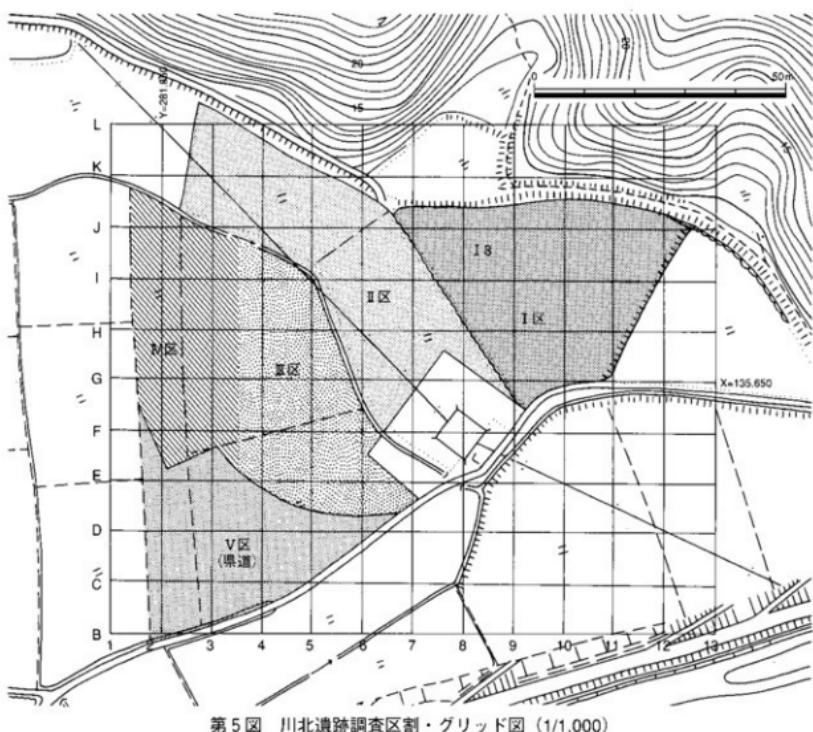


第4図 川北遺跡周辺微地形分類図（木下晴一 1999「引田城下町の歴史地理学的検討」
『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VIIより一部改変して引用）

西隅がB 1で、北東隅がK 12となる。グリッド番号は主に包含層の遺物を取り上げる際に使用している（第4節9.包含層の項参照）。

2 記録類の作成

検出した遺構については、航空写真測量による1/50の縮尺の図面または現地での手書き作業による1/20縮尺の図面を作成した。更に詳細な記録を必要とする掘立柱建物跡のような遺構については、手書き作業により適宜1/10縮尺の図面も作成した。写真は35mmサイズの白黒フィルム、リバーサルフィルム、カラーフィルム及び6×7判の白黒フィルムにより記録を残した。また、航空写真測量の際に、35mmサイズのリバーサルフィルム、6×7判のカラーネガフィルム、リバーサルフィルム、及び4×5判のカラーネガフィルムによる縮小写真も撮影した。焼付けのみであるが、航空写真測量に用いた各調査区の完全縮小写真も保管している。また塩屋地区の予備調査遺物・記録を、それぞれ合わせて保管している。



第3節 土層序

遺跡全体を東西或いは南北に横断した土層図は作成されていない。遺跡の東端と西端で作成したものを作成した。土層番号の位置は第9図に対応する。

土層①（第6図）

記録地点はI区南東部で、掘立柱建物の柱穴の掘り込み面がわかる地点である。7層が遺物包含層で、I区の包含層出土遺物はほとんどすべてこの層から出土した。この包含層の存在により、遺構面が当時のままで削平されていないことが読み取れる。この下が遺構面になる。9層はSB08-SP4である。

土層②（第6図）

記録地点は遺跡北西隅のII区西壁である。現状地割によりII区範囲は設定されているが、この地割はまさにSR01の存在に規制されたものである（第5図と第9図を比較）。従って、土層②はSR01の堆積状況を示すものである。6・12層がSR01の埋土で深さは1.5mある。遺構面は標高5.0mの高さにある。6層は上下ほぼ均質でSR01の最終的な埋没まで一定の環境下にあったことになる。9層はSD18の埋土で、砂質から流水堆積と判明する。10層はグライ化しているが、同じ土色質であるI・IV区の遺物包含層と判断する。従って、SD18の遺構面はI区の遺構面と同じである。7層はSD18より古い川跡である。この地点ではSR01の北肩は見えていない。4m北で丘陵斜面となるためこの山裾を流れが洗っていたのであろう。

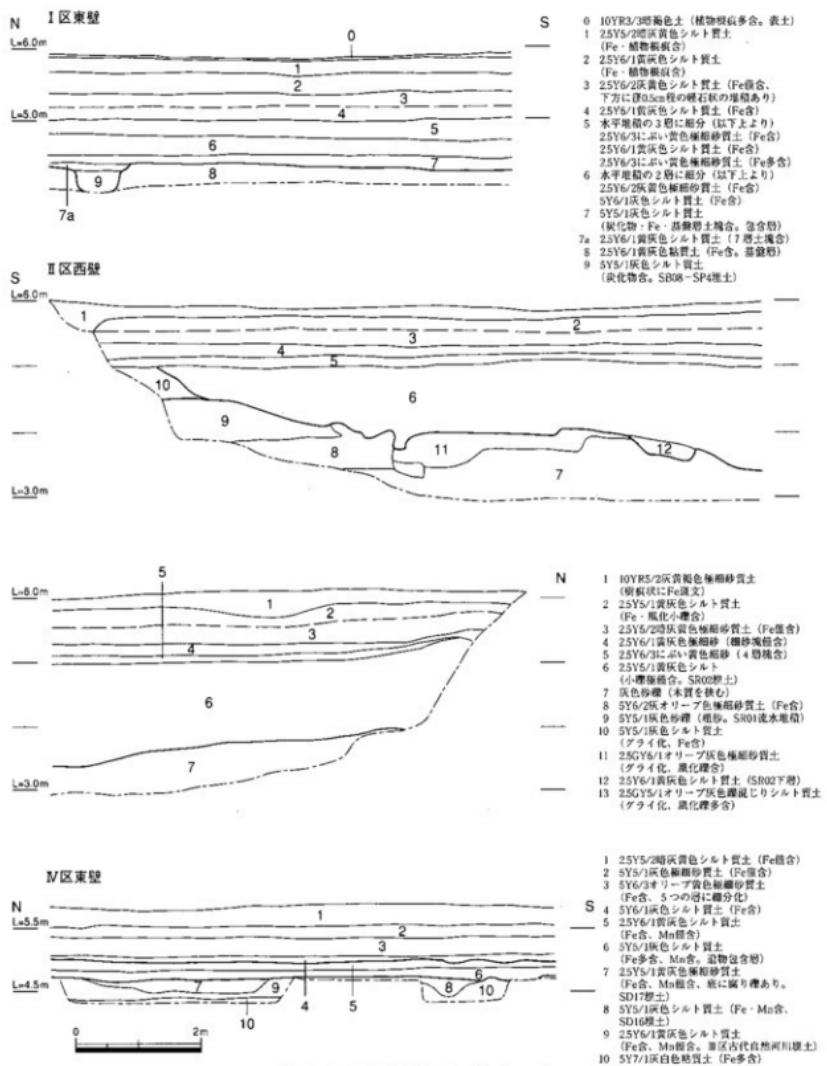
土層③（第6図）

記録地点はIV区のSD16・17あたりである。5層上が中世の遺構面である。上記SR01の遺構面の高さと合致する。6層はI区から続く遺物包含層で、この下が同様に古代の遺構面である。標高4.7mで、I区へほんのわずかづつ低くなることになる。7層はSD17の、8層はSD16の埋土である。9層は古代における低地部への堆積土である。最も深いところで標高4.1mである。遺跡西側には遺構面が2面存在するが、東側のI区ではどうであろうか。第51図で見ると、SR01の東（北）肩は標高4.9mである。土層①と第51図の土色質を比較すると、土層①5層上がSR01と同じ遺構面となることは明らかである。I区のこの面では遺構を検出していないように、SR01の時代（中世）には川の南に集落が形成され、川の東（北）にはそれが全く及んでいなかったのである。

土層④（第7図）

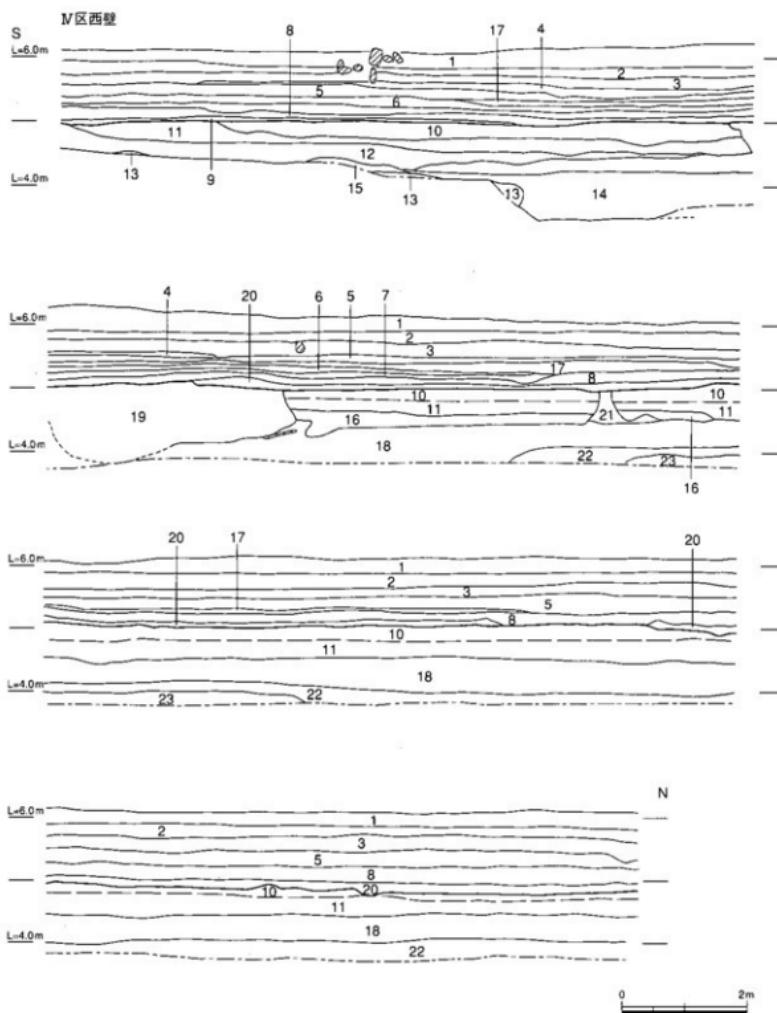
記録地点は遺跡の西端で、土層②にほぼ連続する。ここでも標高5.0m地点に遺構面が存在する。しかし、土層②でみたSR01の埋土である19層もこの遺構面から切り込んでおり、この土層では遺構面が1面のみとなる。18層は土層②7層と同じ古い川跡と考えられる。

以上より旧地形を復元すると、弥生時代から古代にかけてはIV区西が最も高く、その東に低地帯が北西から南東に向かって抜けていた。SD18はこの高い地点を切り裂いて蛇行しながら低地帯を北西に



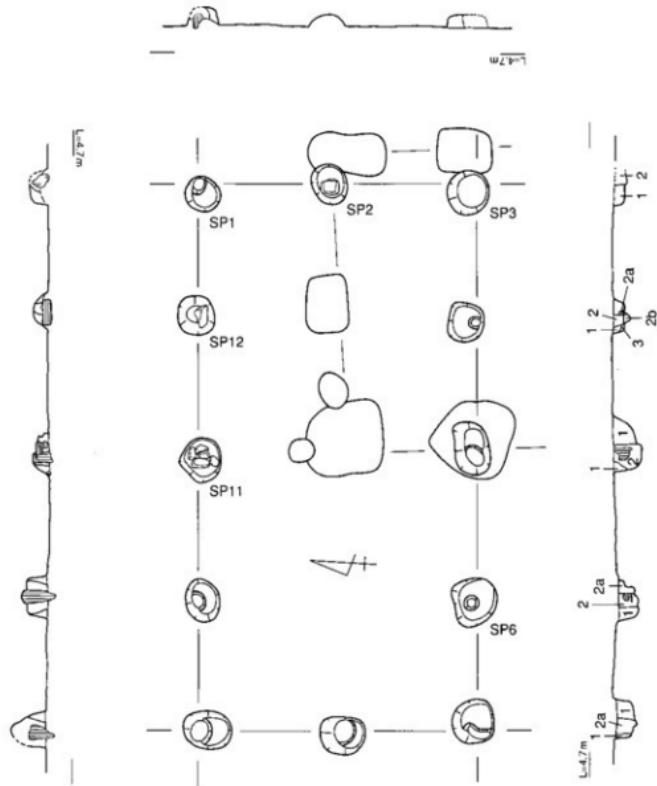
第6図 川北遺跡土層図① (1/80)

抜けている。北西延長30mの地点には大きな谷が北から落ち込んでおり、これとつながるとすれば、低地帯から標高の高いIV区西へと水を通すことになる。逆に西から流れてくる小海川本流の古い流れとすれば、これが東の海へと抜けていくことを遺跡内で確認していかなければならない。調査結果は後者を否定しており、SD18は地形の凹凸を無視して水を導くためのものであり、川でなく人為的な構造と判断した。この低地を避けてはいるが西側よりは低い地点を選んで、古代の掘立柱建物群は形成さ



- | | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|
| 1 砂質土・濾成土 | 11 2SY5/1灰白色細粒砂質土 (Fe多含) | 20 5Y5/1灰色粘土質土 (Fe含、鐵多含) |
| 2 SY5/1灰色細粒砂質土 (Fe多含) | 12 2SY5/1灰白色シルト質土 (Fe多含) | 21 5Y5/2灰オーリープ色細粒砂質土 (Fe多含) |
| 3 SY6/1灰色細粒砂質土 (Fe多含) | 13 5Y7/1灰白色シルト質土 (Fe多含) | 22 7SY6/1灰色細粒砂質土 |
| 4 SY6/2灰オーリープ色細粒砂質土 (Fe多含) | 14 2SY5/1灰白色粘土質土 | 23 5Y5/1灰色粘土質土
(黏土質土主体で、鐵多含) |
| 5 SY6/3オーリープ色細粒砂質土
(3つの間に細分化、Fe多含) | 15 2SY7/1灰白色動植物土 (Fe含) | |
| 6 SY6/4灰オーリープ色細粒砂質土 (Fe多含) | 16 5Y5/1灰オーリープ色粘土質土 (Fe含) | |
| 7 SY6/5灰白色細粒砂質土 (Fe多含) | 17 5Y5/2灰オーリープ色細粒砂質土 (Fe含) | |
| 8 SY5/1灰白色細粒砂質土 (Fe多含) | 18 5Y5/1粘土質土
(鐵・鐵分・シルトがラミナ状に堆積) | |
| 9 SY5/1灰白色粘土質土 (Fe多含) | 19 5Y5/1灰白色砂質土
(鐵・鐵分・シルトがラミナ状に堆積) | |
| 10 SY5/3灰白色細粒砂質土 (上方でFe・Mn多) | | |

第7図 川北遺跡土層図② (1/80)



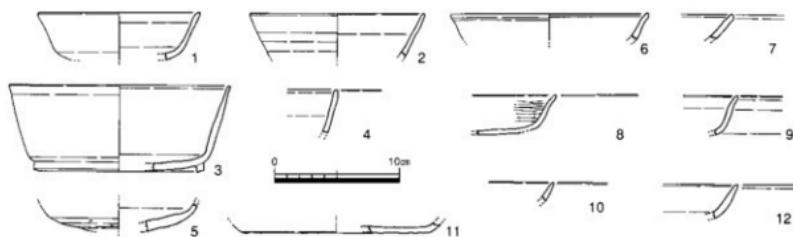
1 5YG/1灰褐色小漂泥リシルト質土 L=4.7m
(Fe含)

2 2SY5/1黄灰色粘質土(柱板)

2a 2SY5/1黄灰色粘質土(Fe・Mn含)

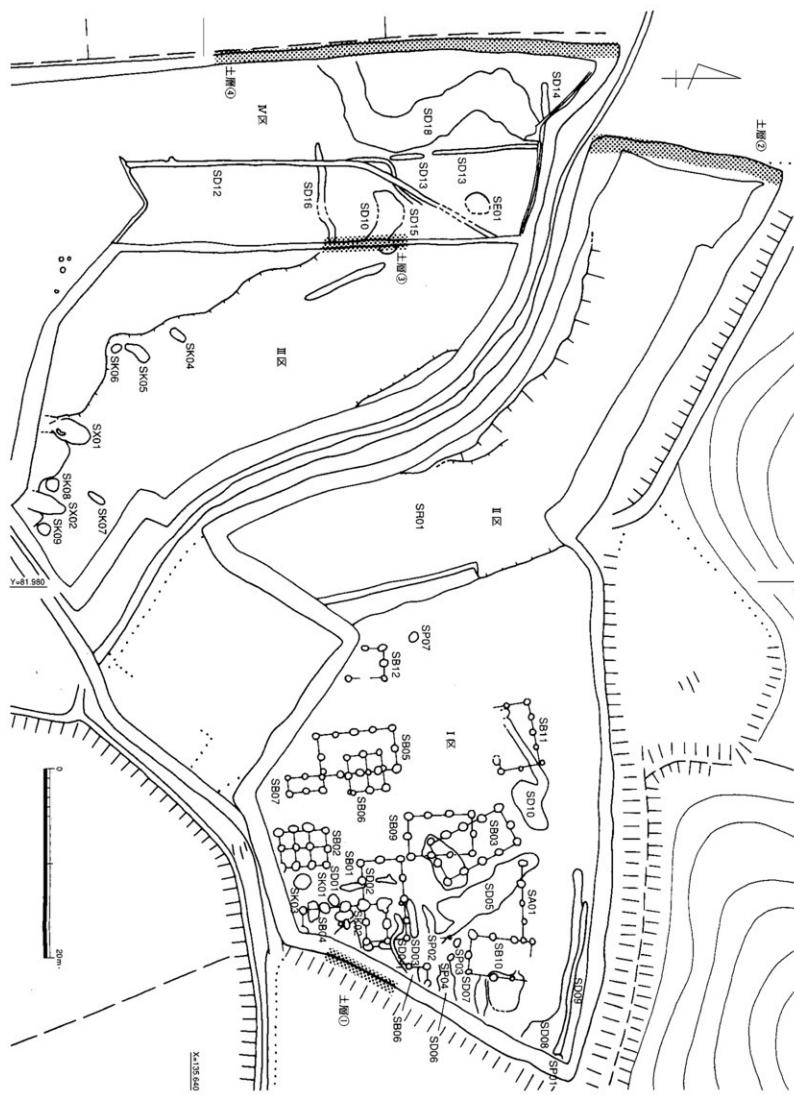
2b 10YR7/1灰白色粘質土

3 25Y6/1黄灰色粘土(Fe含、高鹽化)

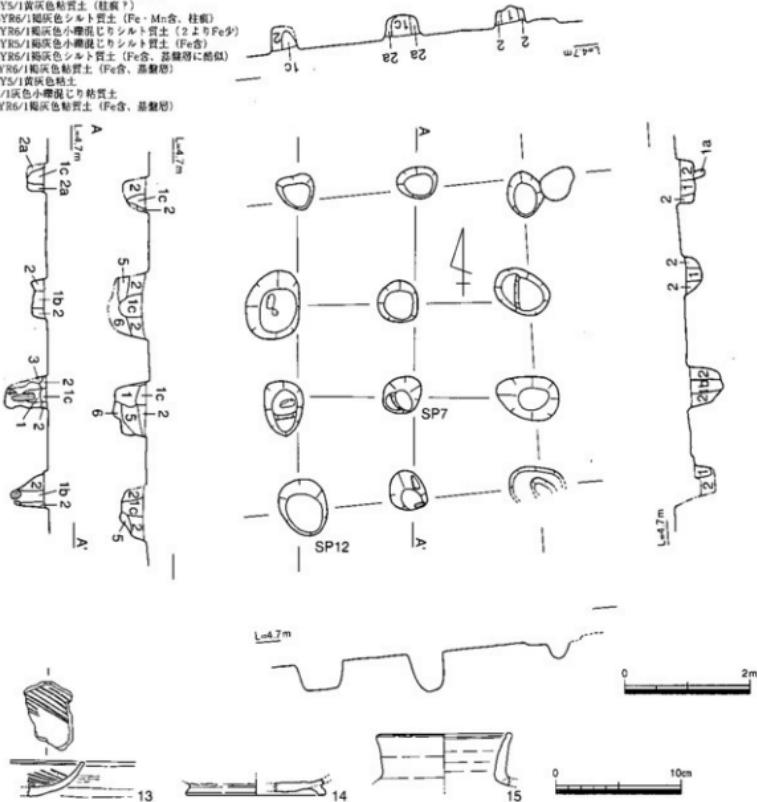


第8図 SB01平・断面図(1/80)、出土遺物実測図(1/4)

第9図 川北道路構位置見取り図 (1/300)



- 1 SY5/1灰色シルト質土 (Fe含、柱痕)
- 1b 2SYR6/1褐色泥質粘土質土 (柱痕?)
- 1b 7SYR6/1褐色色付シルト質土 (Fe・Mn含、柱痕)
- 1c 7SYR6/1褐色色付シルト質土 (2よりFe少)
- 2 7SYR6/1褐色色付シルト質土 (Fe含)
- 3 10YR6/1褐色色付シルト質土 (Fe含、基盤切)
- 4 2SY5/1黄色粘土質土
- 5 SY5/1灰色小標混じり粘質土
- 6 10YR6/1褐色色付粘土 (Fe含、基盤切)



第10図 SB02平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)

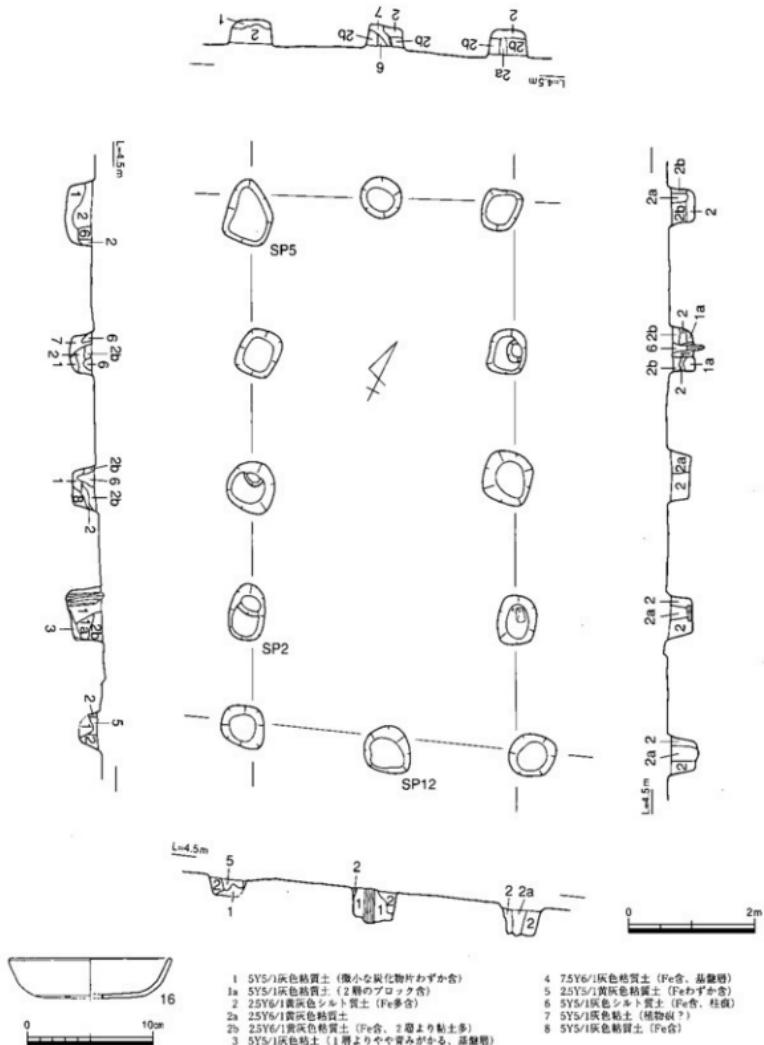
れている。中世までに低い地点には土砂の堆積が進行し、土地はほぼ平らになり、V区で中世の集落が形成される。とはいっても低地の影響が残り、中世にはSR01が同じ地点を流れていくことになる。

第4節 遺構・遺物

1. 据立柱建物跡

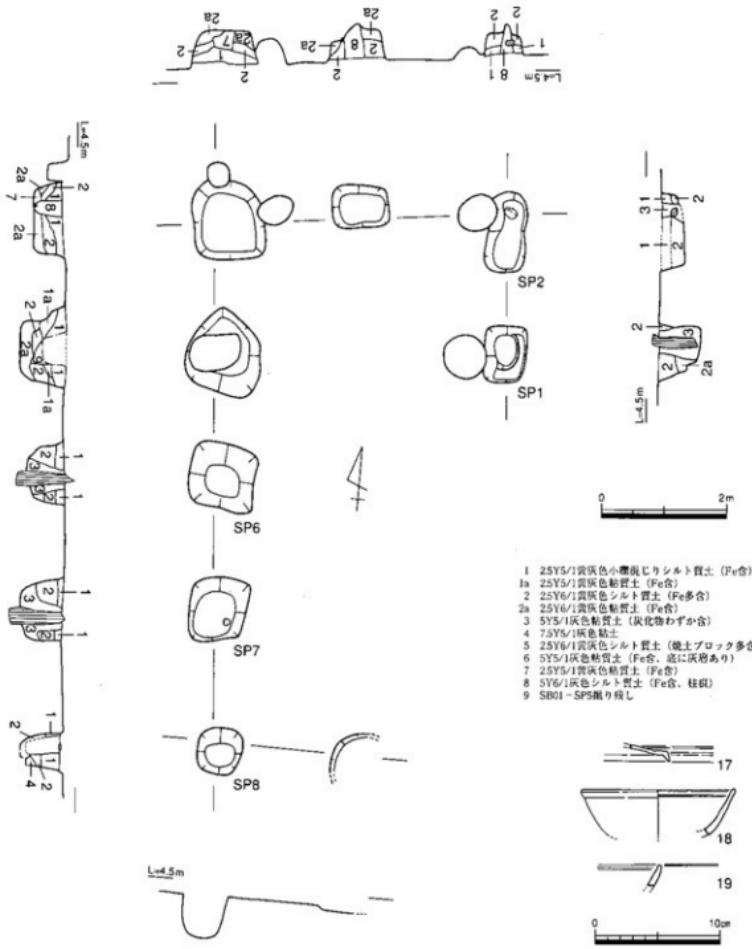
SB01 (第8図、図版6・7・11・28)

I区南東部で検出した。4×2間 (8.8×4.3m) の柱組みで、主軸はN 86.7° Eを向く。床面積は37.2m²である。遺構の重複からSB04・SD01・SD04より新しいと判断できる。ほとんどの柱に「根巻



第11図 SB03平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)

き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。1～5は須恵器である。3はSP 6とSP12から出土したものが接合した。5は高杯と判断した。6～12は土師器である。8・9・11・12は内外面とも赤色顔料を塗っている。8・9、11・12は同じ柱穴から出土しており、それぞれ同一個体の可能性がある。11は内面に暗文を描く。

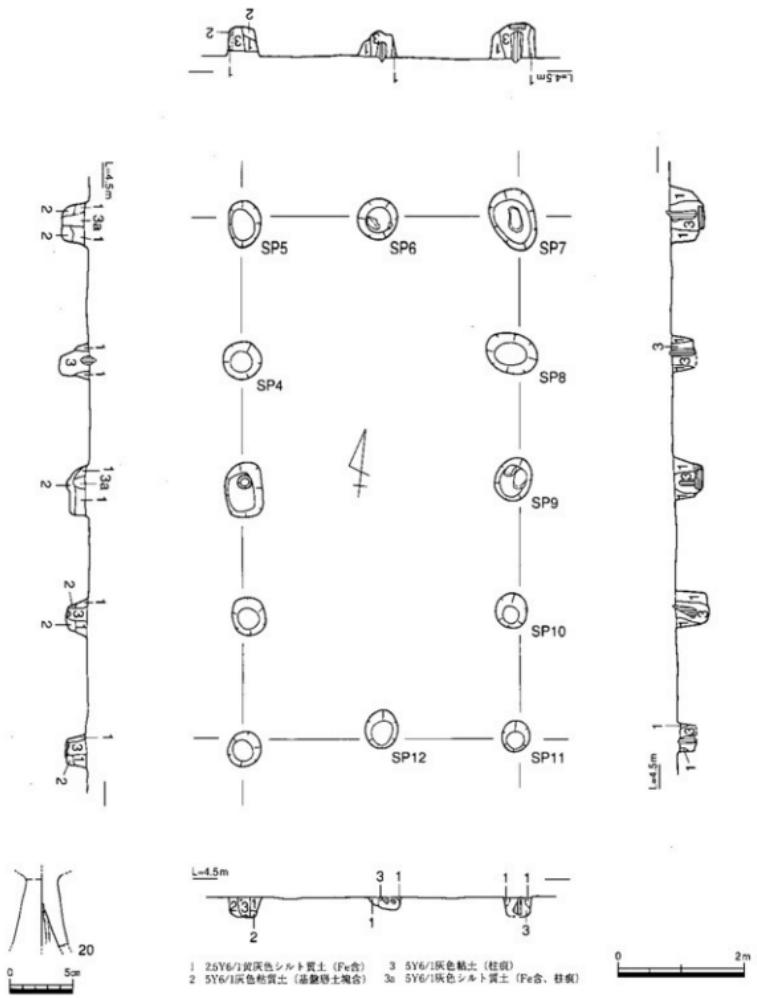


第12図 SB04平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)

出土した遺物のうち、2の形態の須恵器、外面の磨きが省略された土師器、土師器皿の存在から8世紀前半の建物と判断する。

SB02 (第10図、図版6・7・8・28)

SB01南東隣りで検出した。調査区境に接し全容を確定できないとはいっても、総柱建物の標準間取りから3×2間(4.8×3.9m)の柱組みと判断する。主軸はN4°Wを向く。床面積は19.0m²である。SP7の柱には「根巻き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。断面図の2・2

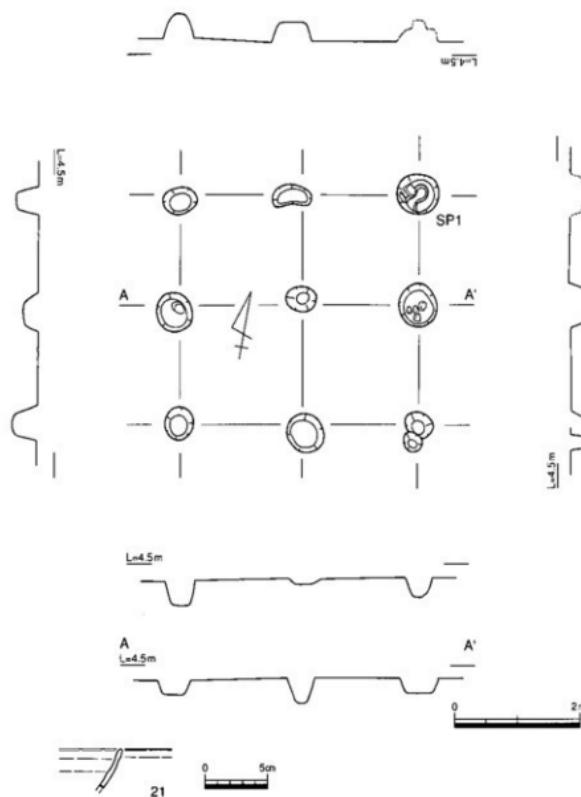


第13図 SB05平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)

a層がそれに該当し、砂をほとんど含まない。14・15は須恵器、13は土師器である。13は内面に赤色顔料を塗っている。出土した遺物は7世紀後半～8世紀前半のものである。

SB03 (第11図、図版7)

I区中央部で検出した。4×2間 (8.6×4.3m) の柱組みで、主軸はN 27° Wを向く。床面積は36.6m²である。重複するSB09とは時期差がある。SP 2・12の柱には「根巻き」と呼ばれる柱の周りに



第14図 SB06平・断面図(1/80)、出土遺物実測図(1/4)

粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。16は土師器杯である。内外面ともナデ仕上げだが、外底をヘラ削りで仕上げる。7世紀後半～8世紀前半のものである。

SB04 (第12図、図版7・12)

I区南東隅で検出した。南東角が調査区外に及ぶ。4×2間(8.6×4.5m)の柱組みで、主軸はN 3° Wを向く。床面積は38.3m²(推定)である。遺構の重複からSB01より古く、SD04より新しい。SP 1・6・7の柱には「根巻き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。17・18は須恵器、19は土師器である。これらは7世紀後半～8世紀代に属すると

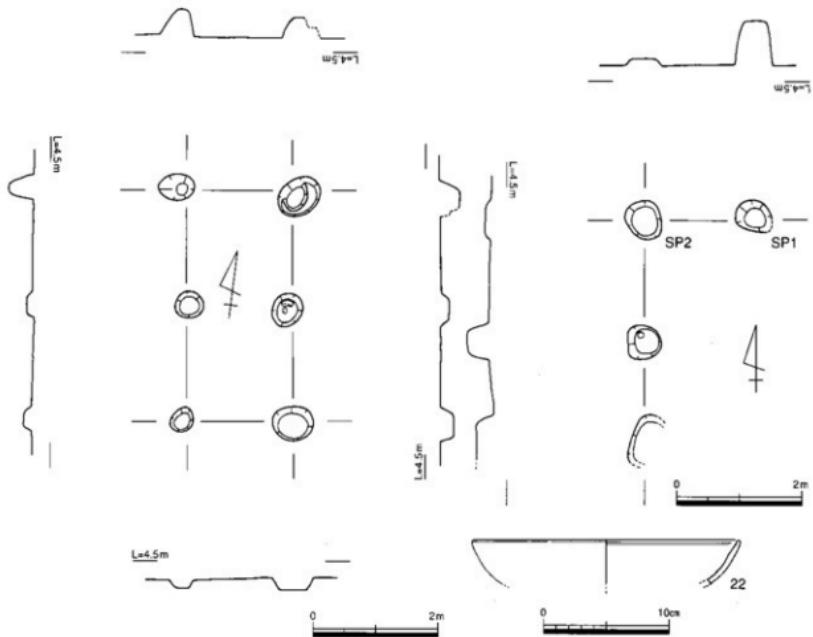
考える。

SB05 (第13図、図版9)

I区南西部で検出した。4×2間(8.0×4.3m)の柱組みで、主軸はN 6.3° Wを向く。床面積は34.6m²である。柱穴の重複からSB06より新しく、SB07とともに同時存在しない。SP 4・6～10・12の柱には「根巻き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。20は土師器の高杯である。断面は面取りを行わず丸いため7世紀後半以前の可能性がある。

SB06 (第14図、図版9)

I区南西部で検出した総柱建物である。2×2間(3.8×3.6m)の柱組みで、主軸はN 8.5° Wを向く。床面積は13.6m²である。柱穴の重複からSB05より古い。21は須恵器の杯である。



第15図 SB07平・断面図 (1/80)

第16図 SB08平・断面図 (1/80)、
出土遺物実測図 (1/4)

SB07 (第15図、図版9)

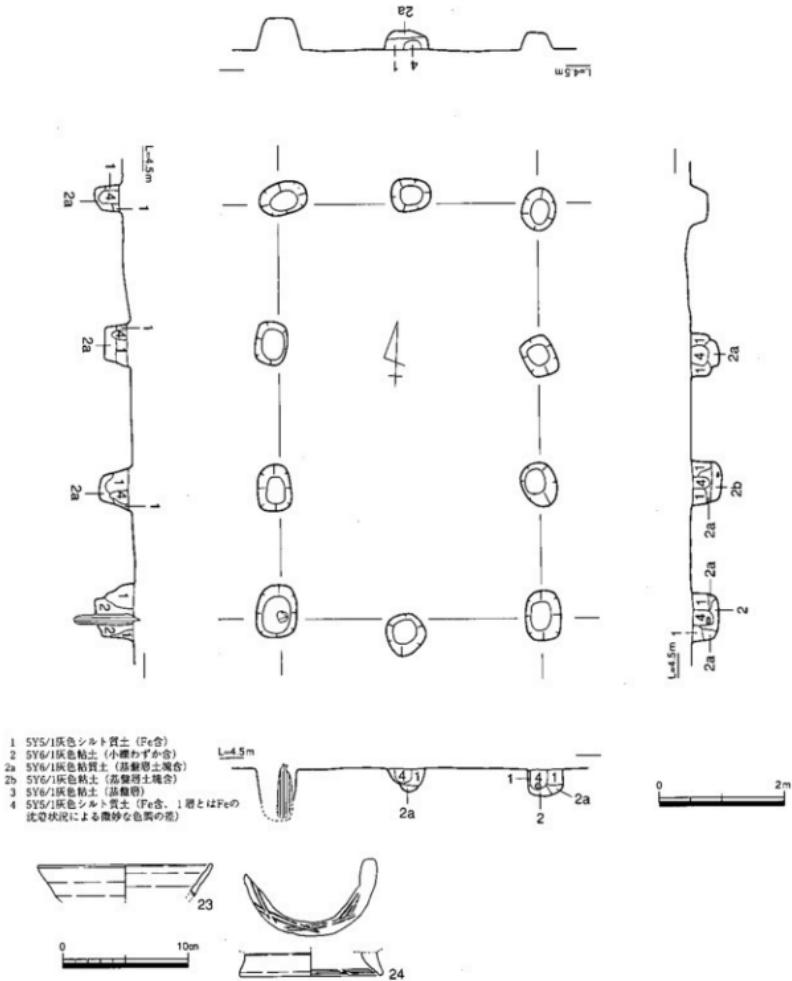
SB05・06南で検出した。2×1間(3.7×1.8m)の柱組みで、主軸はN 75°Wを向く。床面積は6.7m²である。SB05とは同時存在しない。

SB08 (第16図)

I区南東部で検出した。(2+)×(1+)間の柱組みで、主軸はNを向く。遺構の重複からSD04より新しい。写真記録によるとSP1の柱には「根巻き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められるが、仮にそうであれば「根巻き」によって目的どおり腐らなかったこの柱は当初よりきわめて細かったことになる。22は8世紀代の土師器の杯である。

SB09 (第17図、図版6・7・9)

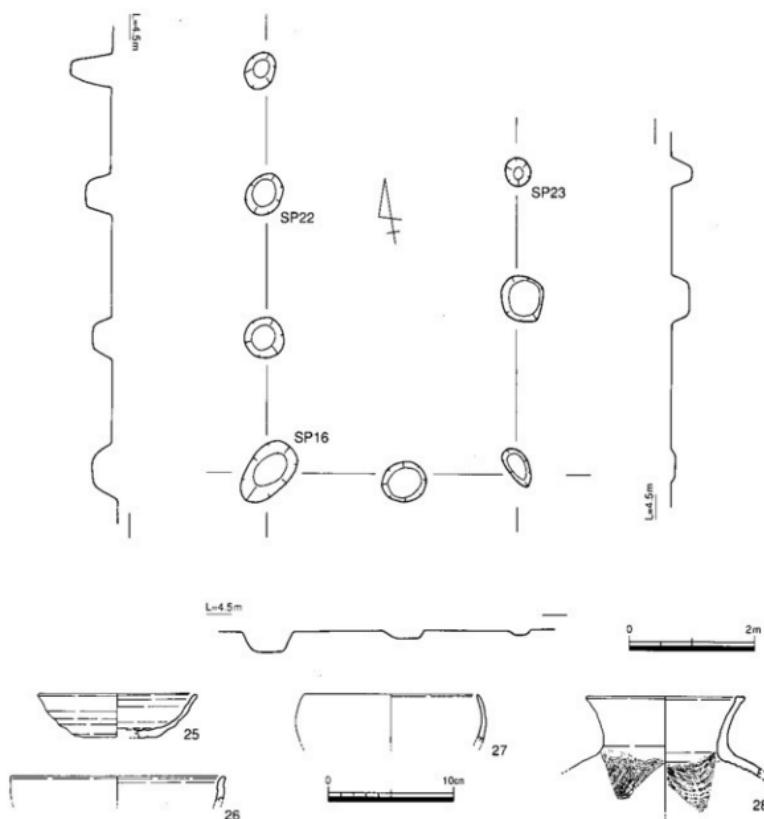
I区中央部で検出した。3×2間(6.7×4.1m)の柱組みで、主軸はN 25°Wを向く。床面積は26.9m²である。重複するSB03とは時期差がある。SP1の柱には「根巻き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。23は須恵器、24は土師器である。24は盤の脚で、接合面で剥離している。剥離面の文様状の筋は接合を強固にするためのものであろう。いずれも8世紀代のものと考える。



第17図 SB09平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)

SB10 (第18図、図版10・28)

I区北東部で検出した。3×2間 (6.3×4.0m) の柱組みで、主軸はN 6° Eを向く。床面積は25.2m²である。重複するSA01とは時期差がある。25・26・28は須恵器、27は土師器である。7～8世紀代のものと考える。



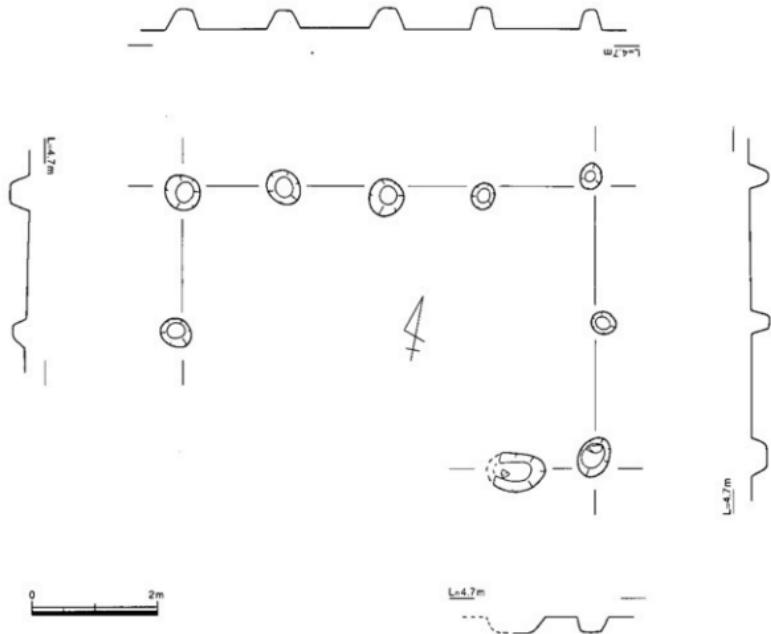
第18図 SB10平・断面図（1/80）、出土遺物実測図（1/4）

SB11（第19図）

I区北西部で検出した。建物の南西側は柱穴が不明である。試掘トレンチの位置に当たっているが、試掘記録によっても柱穴の存在を確認できなかった。4×2間（6.7×4.2m）の柱組みで、主軸はN 77° Eを向く。床面積は28.1m²である。他の掘立柱建物の柱穴に比べ、柱穴の径が小さく並びが不規則である。

SB12（第20図、図版10）

I区南西隅～II区南東隅にかけて検出した。（2+）×2間の柱組みで、主軸はNを向く。



第19図 SB11平・断面図 (1/80)

2. 棚列

SA01 (第21図)

I 区北東部で検出した。4本の杭列(全長7.5m)が判明し、ほぼ東西を向く。29は須恵器、30は平瓦である。29は7世紀後半頃のものである。30は須恵質に焼かれている。

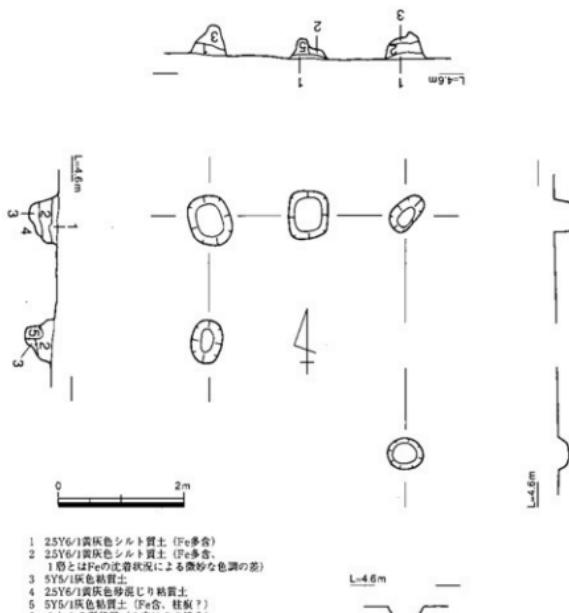
3. ピット

SP06 (第22図)

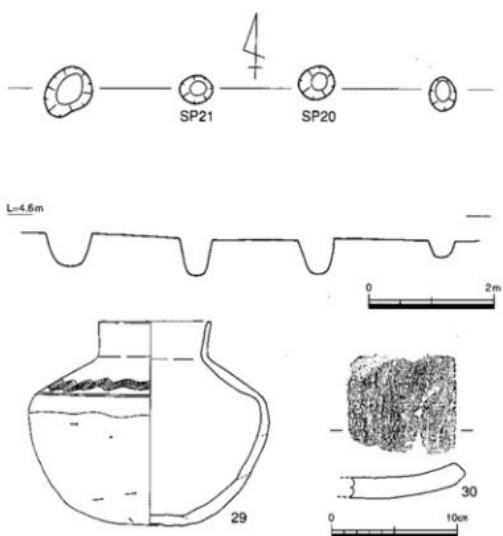
I 区中央部で検出した。「根巻き」と呼ばれる柱の周りに粘土を巻きつけたような痕跡が認められる。柱径は20cmで、周辺のピットの分布状況からSB03かSB09に伴うものと考える。

SP07 (第24図)

II 区南東部で検出した。直径1mもある。柱痕は認められず、全体に水平堆積で土が埋まり、1層は礫を含む。



第20図 SB12平・断面図 (1/80)



第21図 SA01平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)

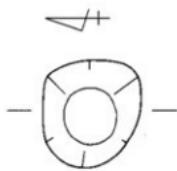
ピット出土の遺物 (第23・26図、図版巻頭1・28)

31はSP01出土の綠釉陶器である。糸切により切り離した体部底に高台を貼り付ける。高台内端に凹線が1条巡る。その後全面に施釉する。施釉後の2次焼成の重ね焼きの際に用いられた三叉トチソの跡が見込みに残る。以上の特徴は近江産であることを示す。胎土は硬質で、10世紀後半のものである。39はSP02出土で弥生時代に属する。鉢としたが傾きは不確定で、後期の壺の可能性もある。38はSP03出土の須恵器杯である。32～35はSP04出土である。7世紀後半～8世紀初頭のものである。35は底にヘラ記号が描かれる。36・37はSP05出土である。36は弥生時代後期の壺底、37は須恵器杯底である。

4. 土坑

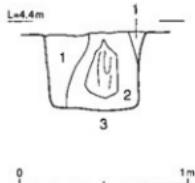
SK01 (第25図)

I区南のSB04に接して検出した浅い土坑である。1層は炭化物をわずかに含む。

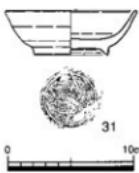


SK02 (第27図)

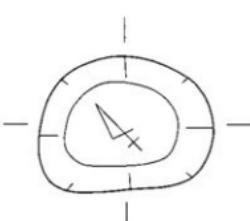
SK01の北で検出した浅い土坑である。遺構の重複からSB04より古い。埋土は炭化物をわずかに含む。40・41は須恵器杯である。40は蓋の可能性もある。41は高台が付くと思われる。



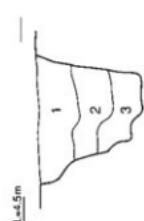
第22図 SP06平・断面図
(1/30)



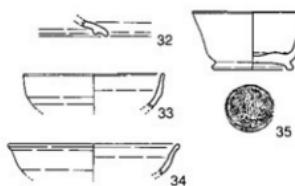
第23図 SP01
出土遺物実測図 (1/4)



第24図 SP07平・断面図 (1/30)



第25図 SK01平・断面図 (1/30)



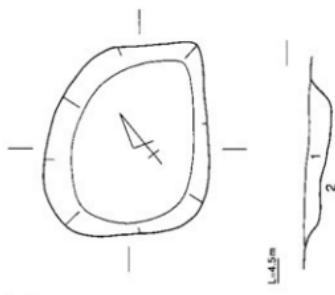
第26図 ピット (SP02～SP05) 出土遺物実測図 (1/4)

SK03 (第28図)

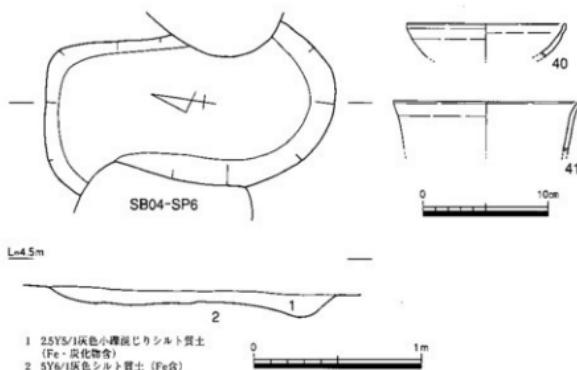
SK01の南で検出した浅い土坑である。42・43は須恵器、44は土師器である。

SK04 (第29図)

III区中央部で検出した。底は凹凸が著しい。



1 10YR5/1褐色シルト質土 (Fe多含、小礫含、炭化物混含)
2 SY6/1灰色粘土質土 (Fe多含)



第27図 SK02平・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)

SK05 (第30図)

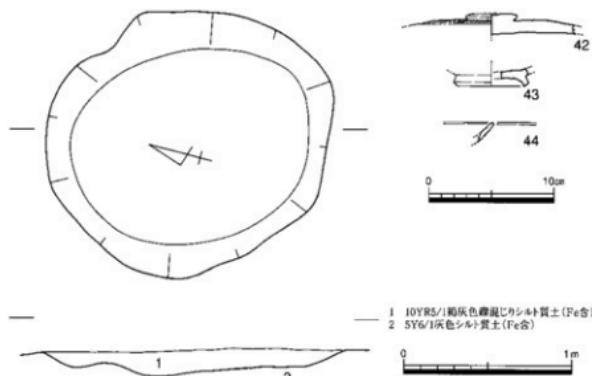
SK04南で検出した。平面不整形で底は凹凸が著しい。

SK06 (第31図)

SK05南で検出した。底は凹凸が著しい。

SK07 (第32図)

Ⅲ区南部で検出した長楕円形の浅い土坑で、底は凹凸がある。



第28図 SK03平・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)

SK08 (第33図)

SK07南で検出した方形に近い不整形の浅い土坑で、すり鉢状に窪む。

SK09 (第34図)

Ⅲ区南端で検出した浅い土坑である。

SK10 (第35図)

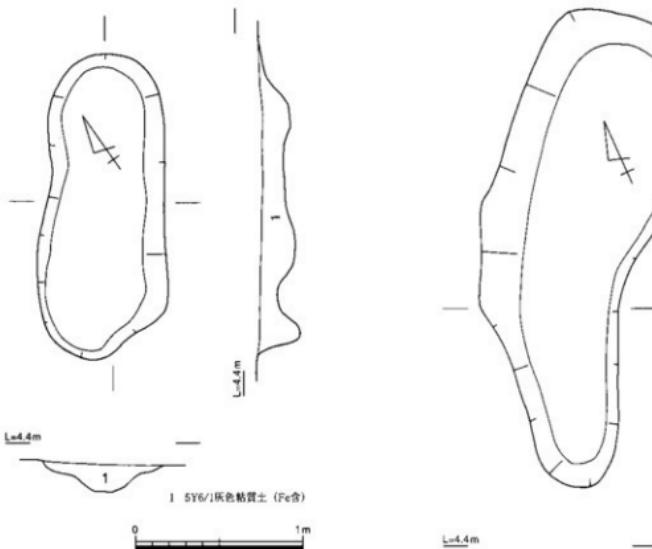
SK05東に接して検出した浅い土坑である。西が1段深い。

5. 井戸

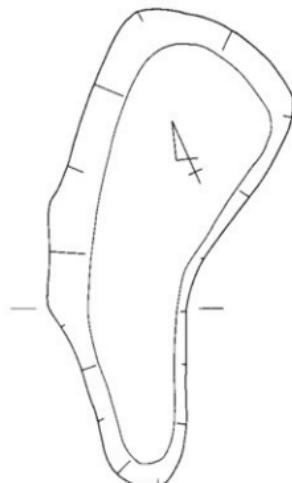
SE01 (第36図)

IV区北部で検出した。上部は垂直に掘り下げ、下部はすり鉢状の底となる。4～6層は湧水に伴い流れ込んだ砂による堆積で、特に4層はラミナ状の堆積を呈する。2・3層も自然堆積を示し、この井戸は自然に廃棄されたものと考える。弥生時代の土器細片4を出土した。素掘り構造からもこの時代のものと考える。

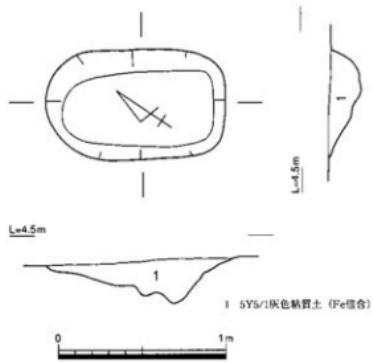
6. 性格不明遺構



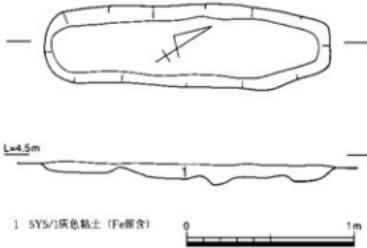
第29図 SK04 平・断面図 (1/30)



第30図 SK05 平・断面図 (1/30)



第31図 SK06 平・断面図 (1/30)



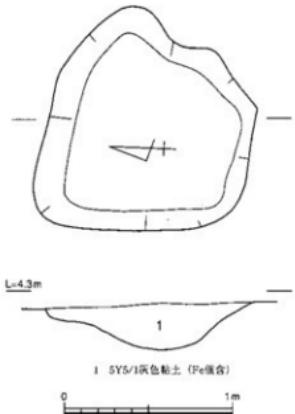
第32図 SK07 平・断面図 (1/30)

SX01 (第37図)

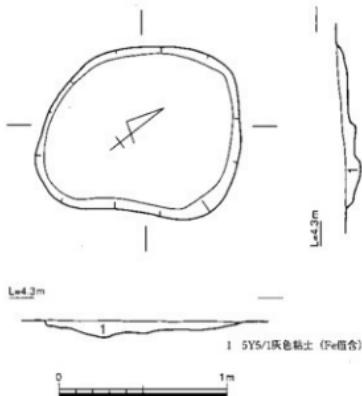
IV区南部で検出した。長楕円形の土坑で、すり鉢状の底を呈する。弥生土器細片1が出土した。

SX02 (第37図)

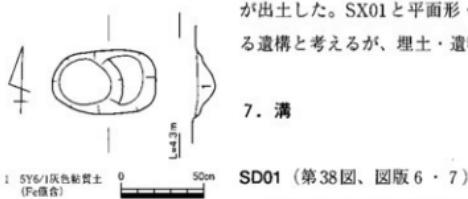
IV区南端で検出した。長楕円形の土坑である。弥生時代中期前葉の甕細片1と土師器らしい細片1



第33図 SK08 平・断面図 (1/30)



第34図 SK09 平・断面図 (1/30)



第35図 SK10 平・断面図 (1/30)

が出土した。SX01と平面形・規模・方向が似ており、同じ性格を有する遺構と考えるが、埋土・遺物からは手がかりを得られない。

7. 溝

SD01 (第38図、図版6・7)

I区南東部で検出した浅い溝である。

SD02 (第38図、図版6・7)

I区南東部で検出した浅い溝である。削平により分離したが、本来はSD01に続く溝と判断する。

SD03 (第39図、図版6・7・28)

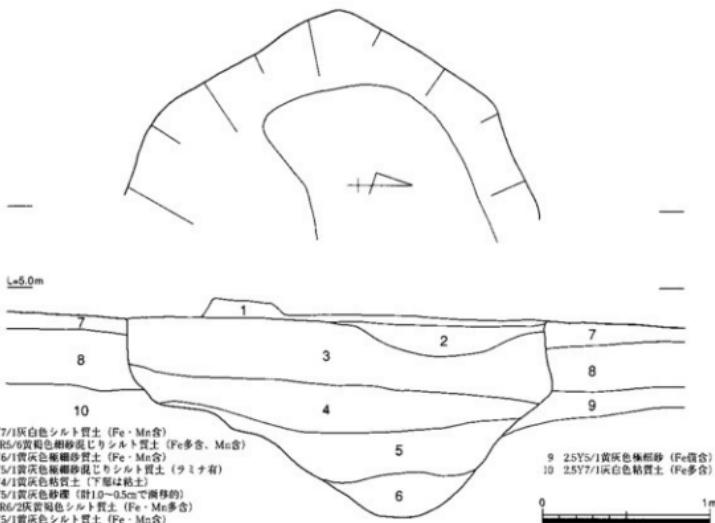
I区南東部で検出した浅い溝である。45は須恵器、46・47は土師器、48は窓の焼き口である。溝の時期は46より7世紀後半～8世紀前半と考える。削平により分離したが、本来はSD01・02と続く溝で、合わせてSB04を囲むように作られたと考える。

SD04 (第41図)

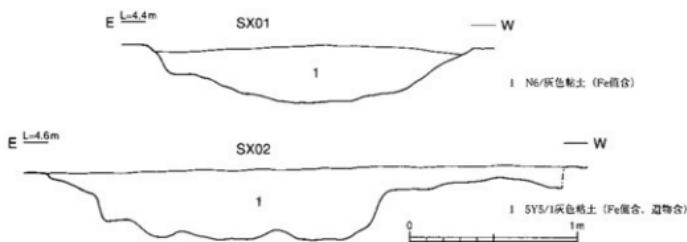
I区南東部で検出した溝で、SD05と調査区際で合流する。遺構の重複からSB04より古い。49～51は須恵器、52は土師器、53は砥石である。これらよりSD04は8世紀代の溝と考える。

SD05 (第40図、図版10・28・29)

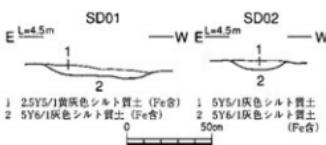
I区東部で検出した溝で、3つの方向・規模のそろわない流れに大きく分かれる。調査区東際ではSD04と合流する。遺構の重複からSB08より古い。溝群の中では比較的多くの遺物が出土した。54～



第36図 SE01 平・断面図 (1/30)



第37図 SX01・SX02断面図 (1/30)

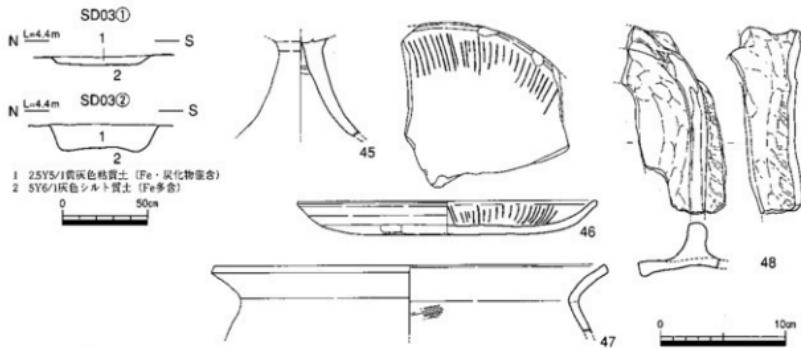


第38図 SD01・SD02断面図 (1/30)

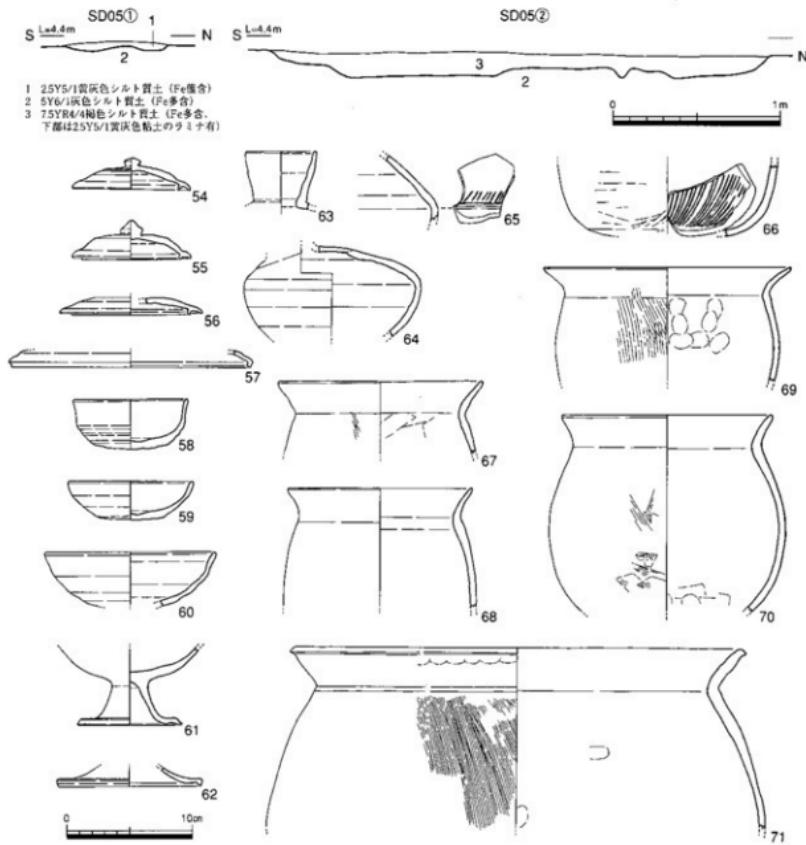
65は須恵器、66～71は土器である。64は胴下に自然釉がかかり、転地逆に置いて焼いたものと考えられる。65はSD03出土の破片が接合した。71は外面に煤が付着する。未図化を含め出土須恵器中に高台付杯やそれに伴う蓋は認められない。土器種の形態も杯の時期と矛盾するものでなく、SD05は須恵器TK217形式新段階である7世紀中葉の時期に当たると考える。

SD06 (第42図、図版10・29)

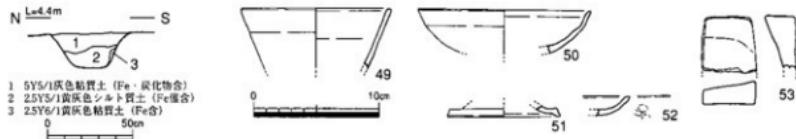
I区東部で検出した溝で、ほぼ東西を向く。隣接するSB08と関係する可能性がある。72・87以外



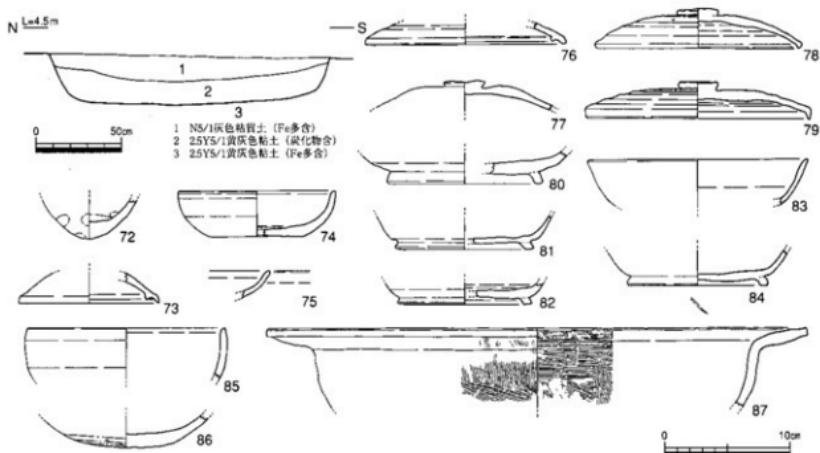
第39図 SD03断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)



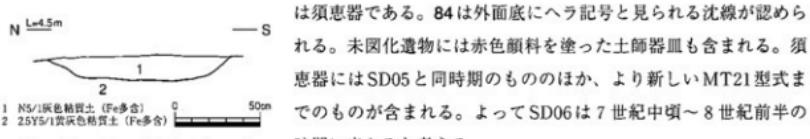
第40図 SD05断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)



第41図 SD04断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)



第42図 SD06断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)



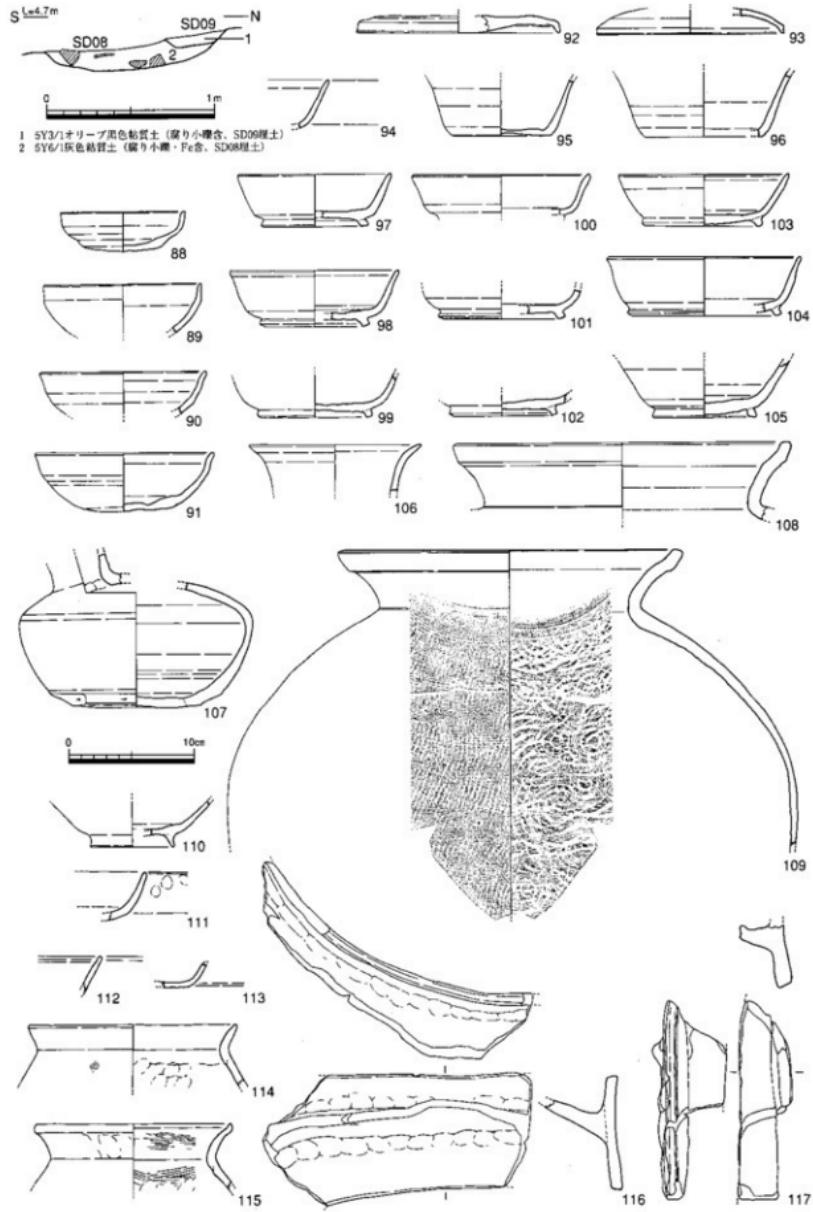
は須恵器である。84は外面底にヘラ記号と見られる沈線が認められる。未図化遺物には赤色顔料を塗った土師器皿も含まれる。須恵器にはSD05と同時期のものほか、より新しいMT21型式までのものが含まれる。よってSD06は7世紀中頃～8世紀前半の時期に当たると考える。

SD07 (第43図、図版10)

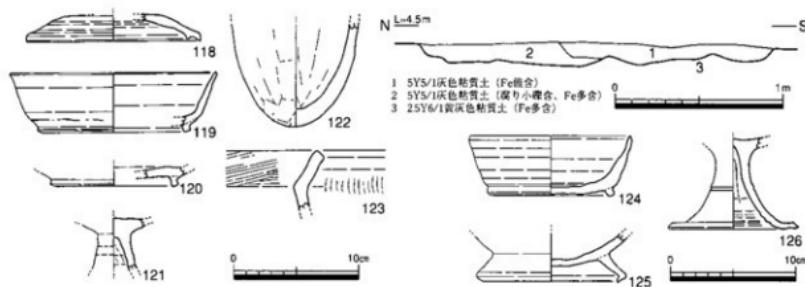
I区東部で検出した溝で、ほぼ東西を向く。方向からSD06と関係する可能性がある。また、重複関係からSB10とは時期が前後する。須恵器や土師器がわずかに出土している。

SD08 (第44図、図版10・12・29・30)

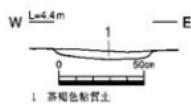
I区北東隅で検出した溝で、調査区間に沿っている。調査区の北は山裾であるため、山裾に沿って掘削されたと見る。また103の接合状況からSD10につながるとすれば、山裾を回り掘立柱建物群を取り囲むように掘削されたことも考えられる。埋土には礫が含まれる。この礫が山から落ちてきたものとすれば、土砂の流れ込みによって溝が埋まることもあったかもしれない。88～109は須恵器である。



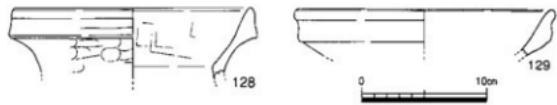
第44図 SD08・09断面図(1/30)、SD08出土遺物実測図(1/4)



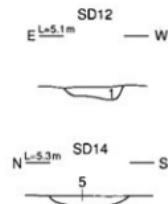
第45図 SD10断面図 (1/30)、SD09・SD10出土遺物実測図 (1/4)



第46図 SD11断面図 (1/30)



第47図 SD17出土遺物実測図 (1/4)



第48図 SD12～16断面図 (1/30)、SD12出土遺物実測図 (1/4)

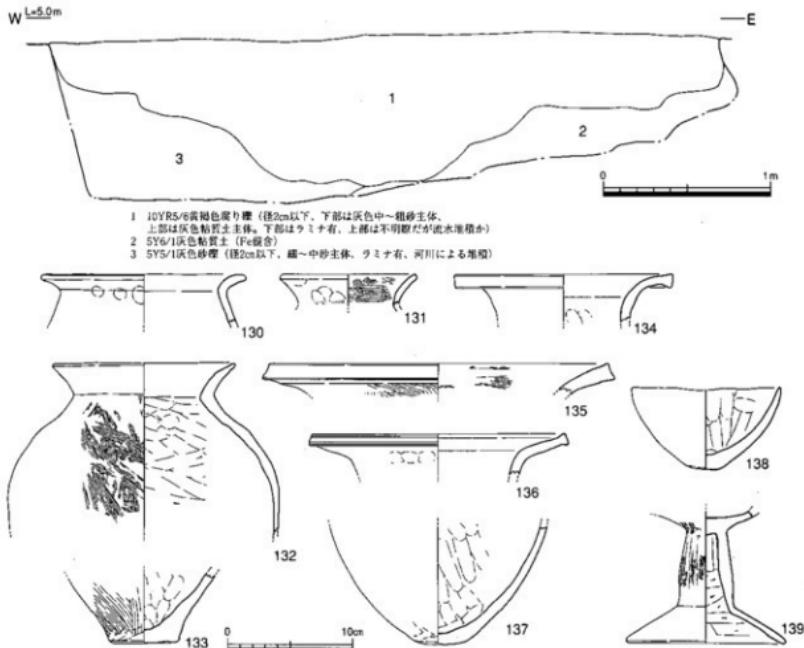
杯は高台付杯が主体である。88～91はそれ以前の蓋に返りの付く蓋杯の時期のものである。103はSD10出土の破片と接合した。110は土師器楕で包含層からの混入であろう。116・117は竈で、116は焚き口上部、117は焚き口側部である。主体である須恵器高台付杯から、SD08はMT21型式期の8世紀前半の時期に当たると考える。

SD09 (第44・45図、図版10・12)

I区北東隅で検出した溝で、調査区間に沿っている。SD08と同方向でより新しいため埋没したSD08を再掘削したもの、或いはSD08の最後の流れと判断する。118～123が出土物実測図である。122は弥生時代の鉢としたが、あまり見られない深い形態である。外面に焼成に伴う剥離が認められる。他に未固化的ウシカウマの歯が出土している。

SD10 (第45図)

I区北部で検出した溝である。東側は大きく屈曲し幅も広い。剖面によりSD08と同じ溝が分離した



第49図 SD18断面図（1/30）、出土遺物実測図（1/4）

可能性もある。124～126は出土遺物の実測図である。124は内面底に径7cmの灰被りが認められ、壺の頭部径を示している。

SD11（第46図）

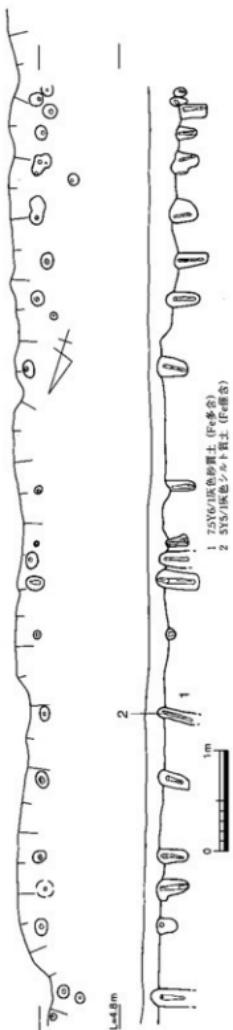
Ⅲ区北部で検出した直線に伸びる浅い溝である。弥生土器細片1が出土した。11mの間隔を置いて、調査区際を同じ方向に走る溝があり、何か関連があるのかもしれない。

SD12（第48図）

Ⅳ区中央部で検出した直線に伸びる浅い溝である。直線に伸びるが、中央でくの字に折れる。この溝の南半分と同じ位置・方向の水田の境が調査前に存在し、SD12は古い水田区画の溝と判断する。弥生土器と黒色土器A類碗がわずかに出土している。

SD13（第48図）

Ⅳ区中央部で検出した直線に伸びる浅い溝である。直線に伸びるが、SD12南半分と一直線につながる。SD13も同じ水田区画の溝と判断する。当初はSD12の溝が境だったものが、いつの時代かにSD13のような直線に区画が変更されたと見られる。



第50図 SR01杭列①平・
横断面図 (1/50)

SD14 (第48図)

IV区北端部で検出したSD13と直角方向の溝である。弥生土器や須恵器がわずかに出土している。

SD15 (第48図)

SD12の屈曲部から枝分かれし、北東へSD12と交錯しながら伸びる溝である。SD12との新旧関係は2箇所の記録地点で矛盾するため不明である。

SD16 (第48図)

IV区中央で検出した。SD12と直交し、それより古い。III区の古代の低地（前節参照）に覆水を落とし込むためのもの可能性もある。弥生土器細片がわずかに出土した。

SD17 (第47図)

IV区中央で検出した。幅広で不整形の溝である。128・129は弥生時代後期の壺である。

SD18 (第49図、図版13・29)

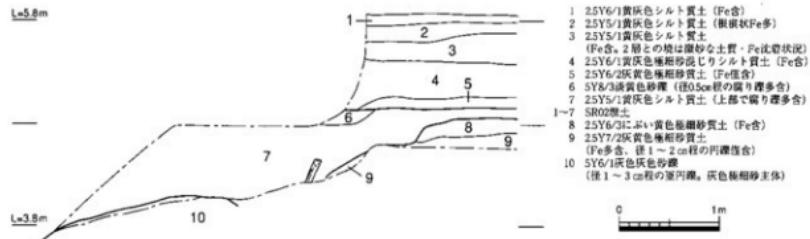
IV区西北部で検出した。平均幅4m、深さ1mで蛇行して流れるが、前節で検討したように溝とする。溝底の標高は検出範囲の南北端とともに3.8mで変化なく、これにより水の流れる方向を判断することはできない。埋土は流水による自然埋没を示す。弥生土器が少量出土している。132は外面上半に煤が付着する。内面のヘラ削りは方向が一定でない。遺物よりSD18は弥生時代終末期のものと考える。

8. 川跡

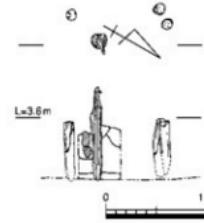
SR01 (第50～53図、図版14・30)

II区の殆どを占める。現状地割によりII区範囲は設定されているが、現状地割自体がSR01の存在に規制されたものである。2箇所で杭列を検出した。杭列①はI区との境付近、杭列②はより西側である。

①はSR01の岸際に並んで打たれた。9mの範囲で、24本検出した。杭の間隔は一定でなく、掘り方もなく直接の打ち込みであり、その深さもまちまちである。第51図を見ると杭は川の埋土である7層中に突き出している。では杭列①の用途は何であろうか。杭列①の位置はSR01が流れを南に変えた地点に当たる。水に勢いがあれば、川岸を越えてI区の平地へと溢れ出そうとするであろう。そこに打たれているということは、第1に川の氾濫を防ぐことが考えられる。しかし杭を打つだけで、そこに木材を渡



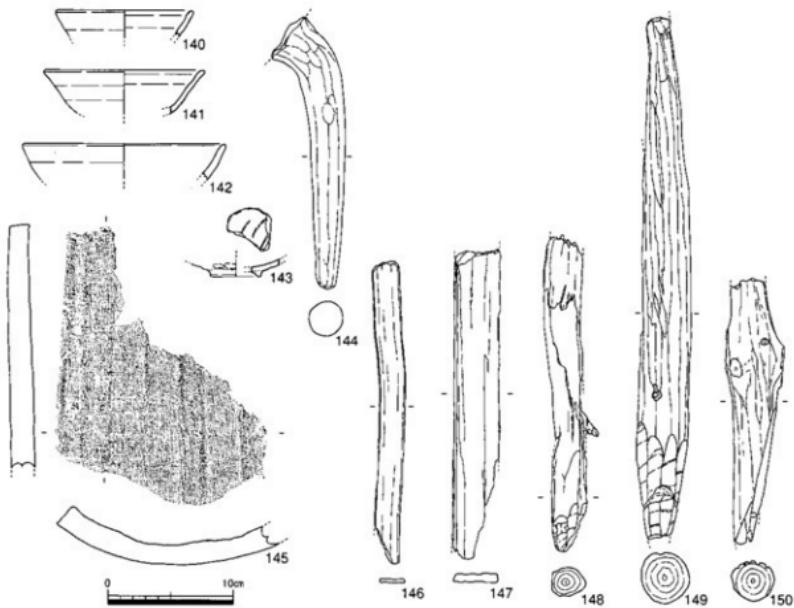
第51図 SR01杭列①縦断面図 (1/50)



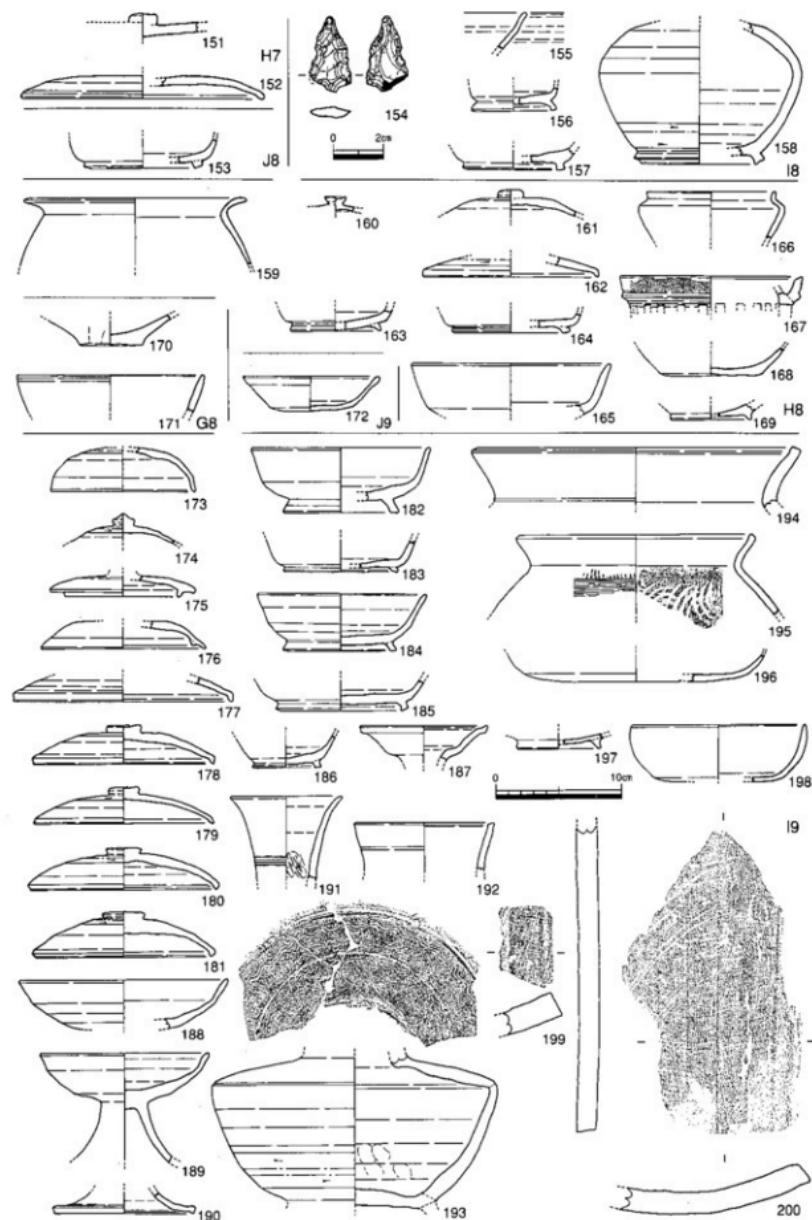
第52図 SR01杭列②平・断面図 (1/50)

したり土で覆ったりの工作を行った様子は認められない。杭の頭が氾濫時に予想される川岸より上の高さに届かないのも変である。第2に、逆に川での作業に伴い設置された可能性も考えておきたい。川漁の定置網、船着場など、杭を単純に打ち込むだけで足りる用途が想定できる。

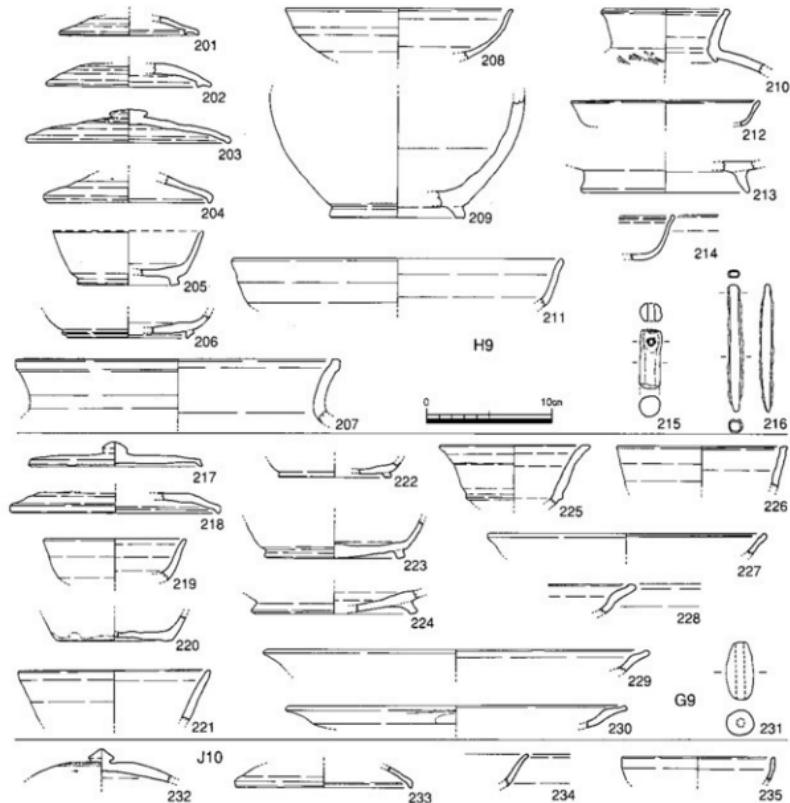
②は川の最も深い地点に打たれていた。4本のみの検出で2本1組に見える。中央の杭の断面には石が2個接しており、杭の固定に埋め込んだか、この杭列に伴う用途に使われていたか、水流で杭にかかる



第53図 SR01出土遺物実測図 (1/4)



第54図 包含層出土遺物実測図① (1/2、1/4)

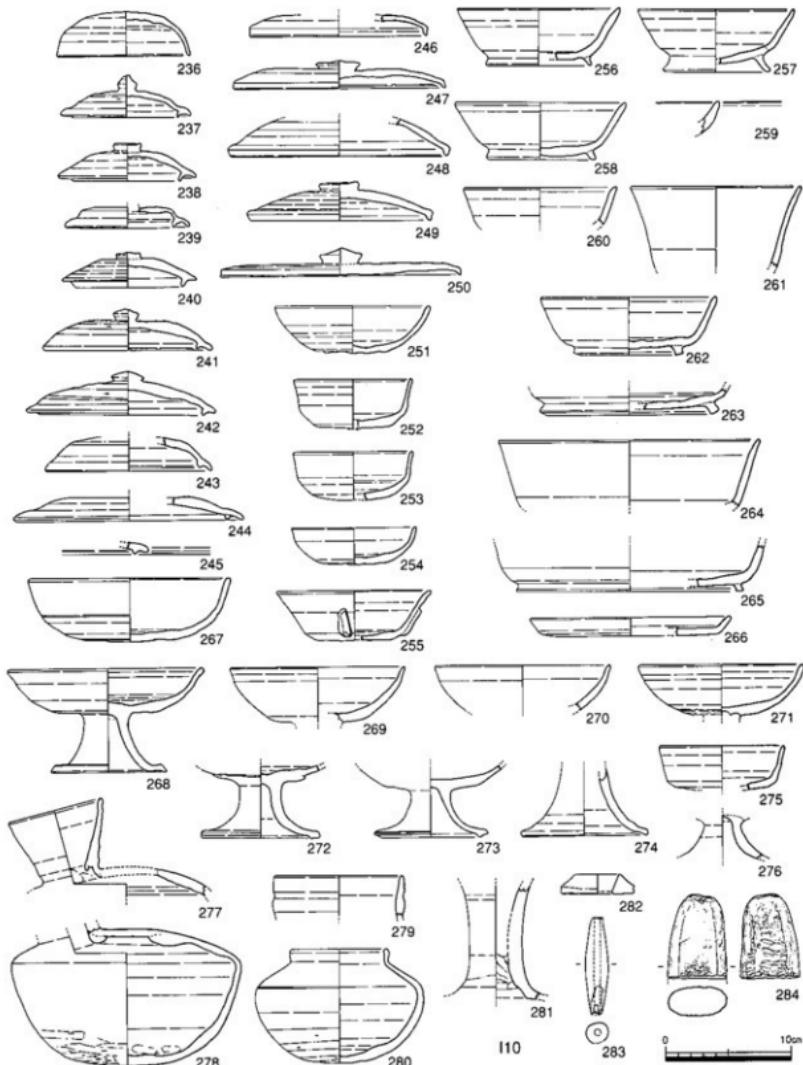


第55図 包含層出土遺物実測図② (1/4)

たか、が考えられる。杭列②の用途も不明であるが、位置的には川漁の可能性がある。

140～150はSR01からの出土遺物である。145は須恵質で、古代の遺物の流れ込みの一部かもしれない。146・147は加工された板である。現状では墨書等は確認できない。148～150は杭列①の杭である。149が最も長いが、これも上部は腐る等で欠けている。杭先は削って尖らせ、途中の枝も多くは括っている。150にのみ樹皮が少し残っていたが、用途で考えれば、樹皮を剥ぐ必要はない。出土遺物は少量でSR01の時期を限定できないが、143は磨滅していないためその時期の12～13世紀には流れていたとしておく。

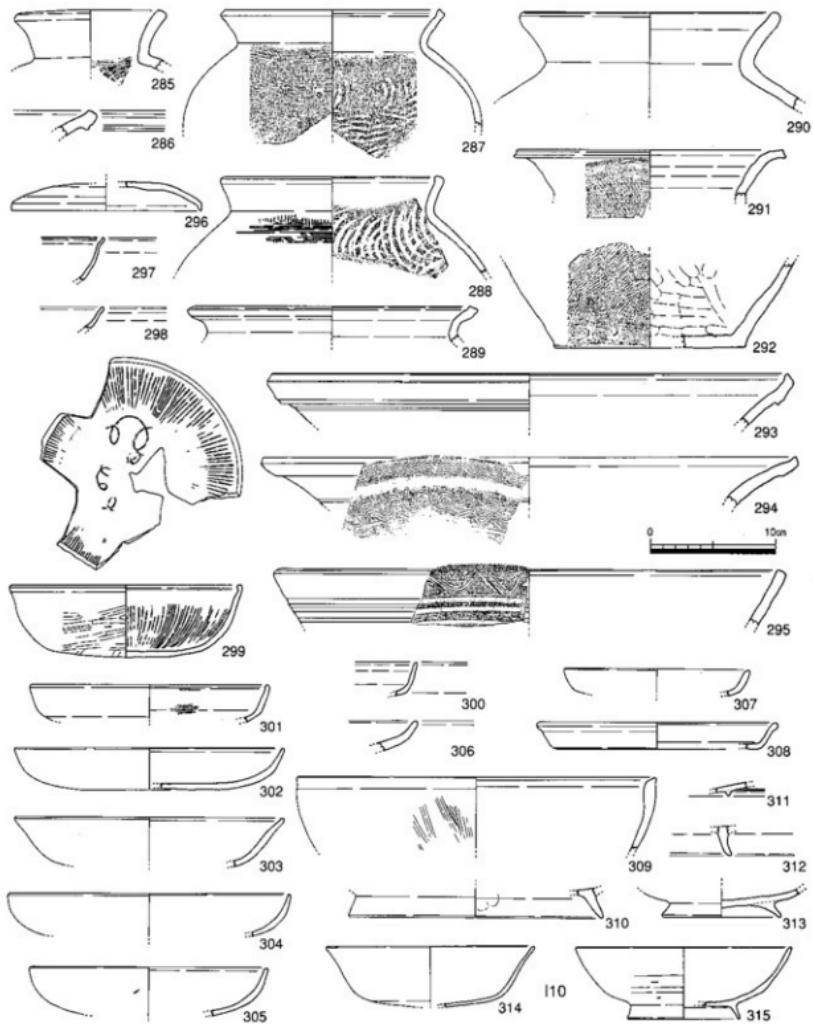
なお、調査時の概報には、「川道の両岸に（中略）杭が打たれ杭列となる」と記されるが、西岸の杭列の存在は調査記録に残されていないため、東岸のみの存在としておく。



第56図 包含層出土遺物実測図③ (1/4)

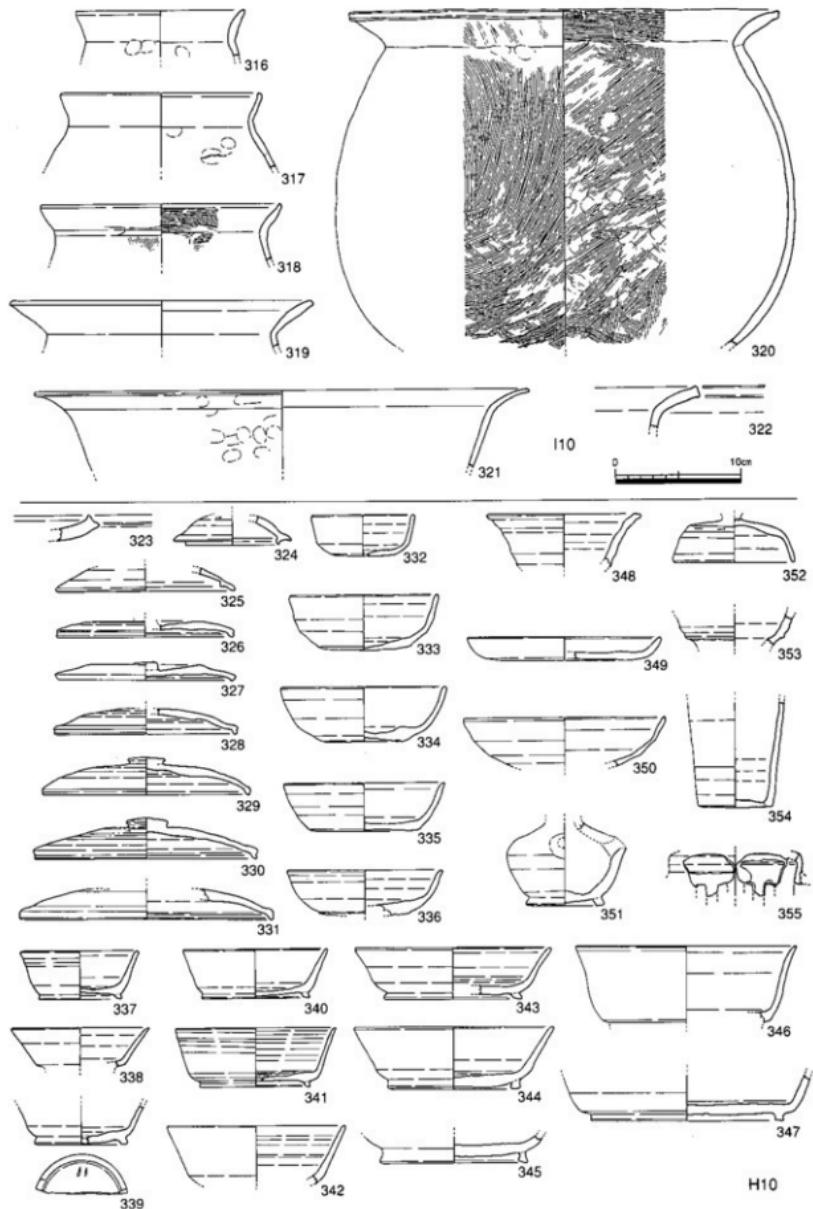
9. 包含層 (第54~64図、図版30~36)

遺跡全体で、28ℓコンテナ35箱分の遺物が出土し、そのうち包含層出土遺物は19箱である。ここではその中から残存状況の良好なものを抽出して掲載している。遺物の抽出は遺構同様任意であり、特異

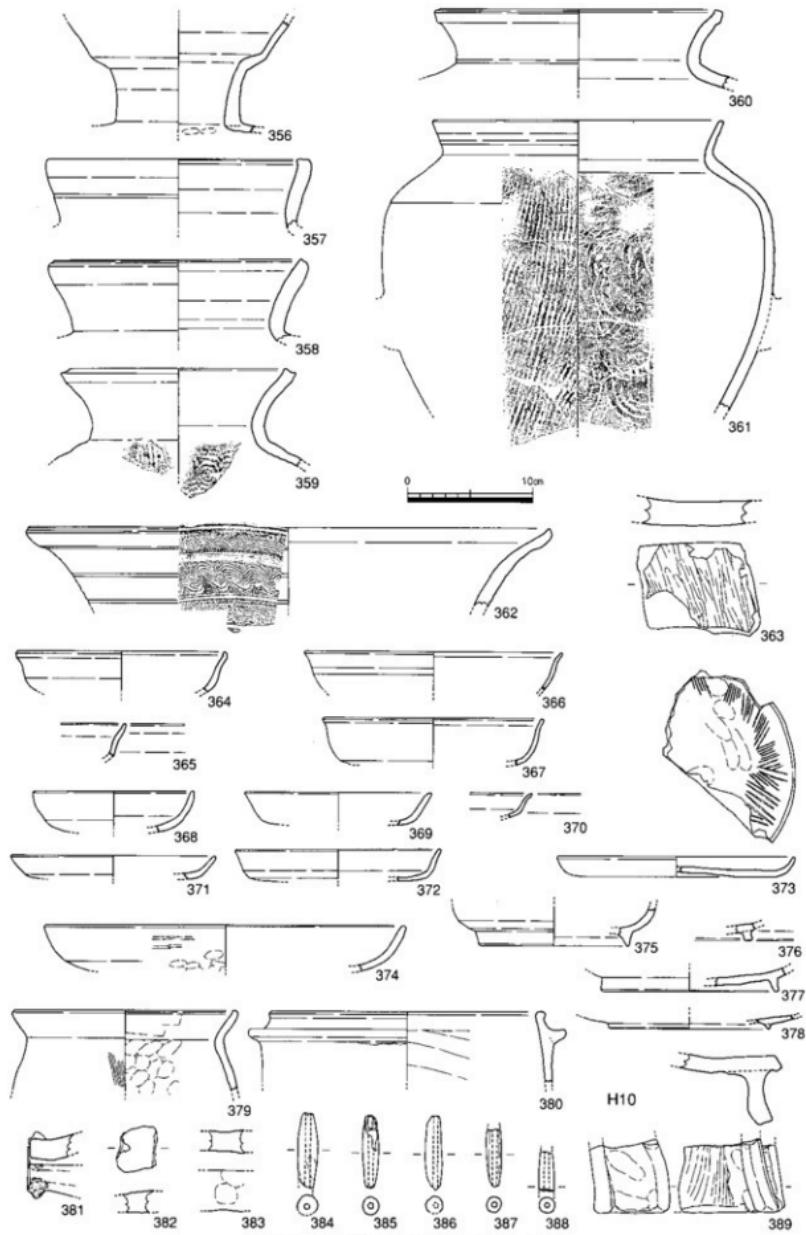


第57図 包含層出土遺物実測図④ (1/4)

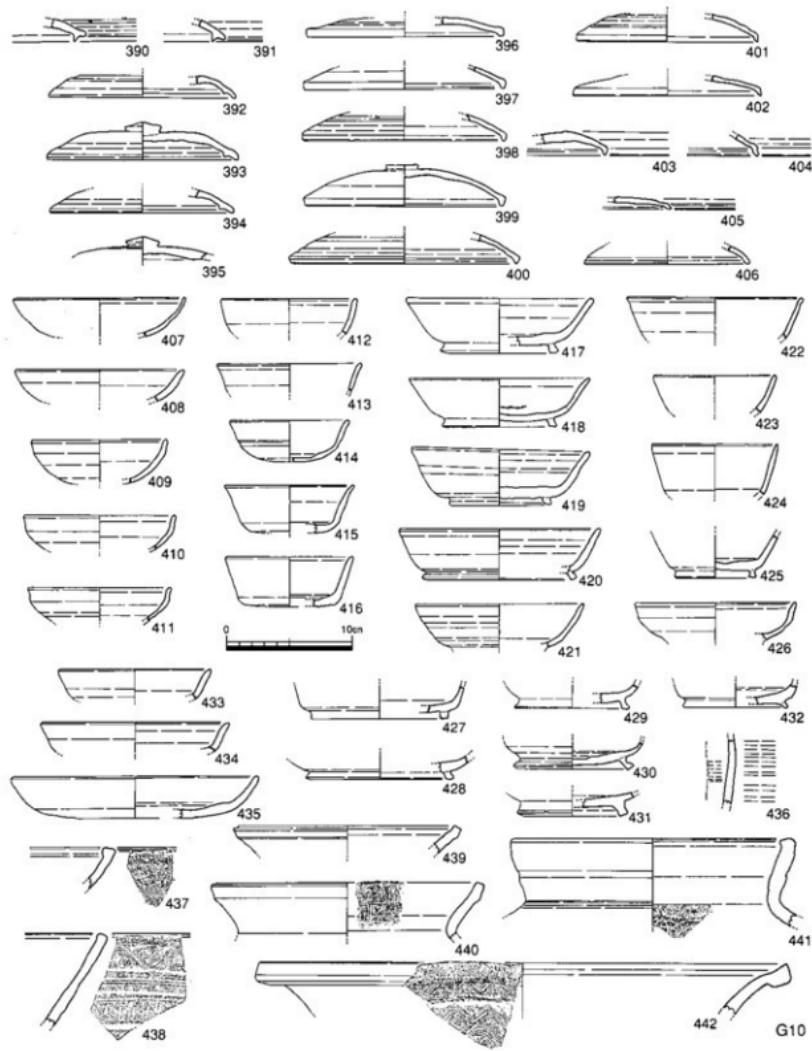
なものについては目に付いたものとなるだけ掲載している。遺物は調査区更にグリッドごとに掲載している。II～IV区からの出土は遺構状況を反映しそくわずかで、またグリッドごとの掲載量も出土量の比率を大まかに反映している。ただし、掲載遺物種の構成が包含層出土遺物種全体に占める比率を反映している訳ではない。遺物の散布はその調査区またはグリッドがその遺物の時期に利用されていたことを示すという仮定の下に、出土遺物の少ない遺構の時期を調査区またはグリッドの利用時期により補完する



第58図 包含層出土遺物実測図⑤ (1/4)



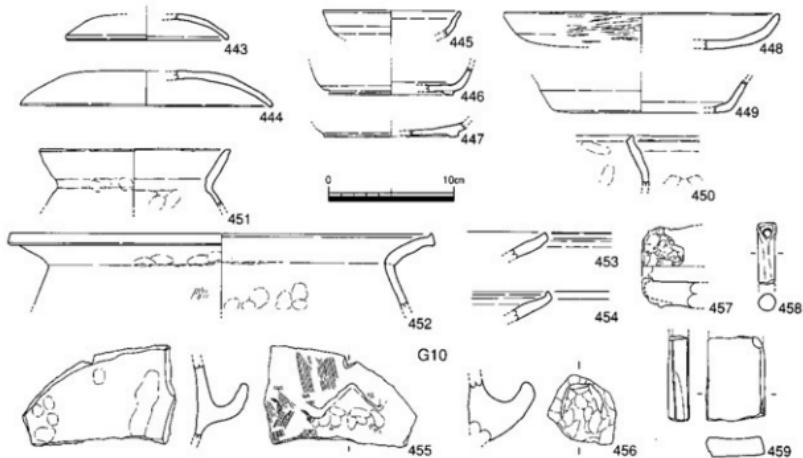
第59図 包含層出土遺物実測図⑥ (1/4)



第60図 包含層出土遺物実測図⑦ (1/4)

ことを目的として、このような操作を行った結果、グリッドにより若干の時期的傾向を見ることができ、一部特殊遺物の出土するグリッドを把握し、それと同じグリッドにある遺構との関連を推測することができた。

151～585はI区出土の遺物である。第6図土層①7層に示すように、包含層は同じ1つの層がI



第61図 包含層出土遺物実測図⑧ (1/4)

区全体を覆う。掲載遺物もほぼこの包含層からの出土である。

151はH 7 グリッドからの出土で7世紀後半ごろの杯蓋である。

152・153はJ 8 グリッドからの出土で、8世紀前半ごろのものである。これらのグリッドより北西では遺構をほとんど検出していない。

154～158はI 8 グリッド出土である。154は弥生時代の石錐である。158はI 9 グリッド出土破片と接合した。このグリッドも遺構密度が低い。

159～169はH 8 グリッド出土である。167は脚に方形の透かしを並べた円面鏡である。169は黒色土器A類である。小片だが、10世紀後半ごろのものとすれば、31と時代が合う。須恵器の時期は7世紀中頃～8世紀前半にわたる。このグリッドでは出土遺物量に比し遺構密度は低い。

170・171はG 8 グリッド出土である。このグリッドはSB05・06の中心域であるが、遺物量は極めて少ない。

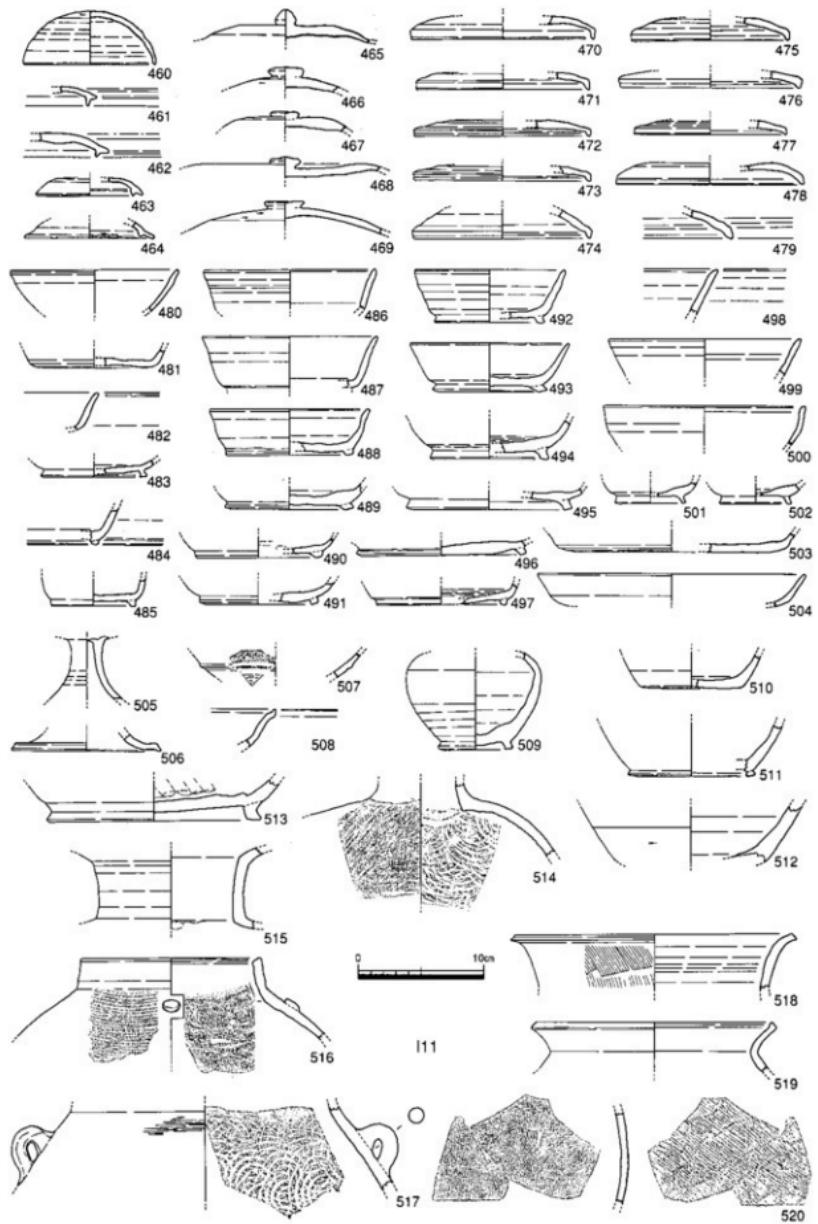
172はJ 9 グリッド出土の中世の土師器杯である。

173～200はI 9 グリッド出土である。173は杯の可能性もある。193はI 10 グリッド出土破片と接合した。このグリッドでは8世紀前半の遺構が主体だが、出土遺物には7世紀代のものも多く含まれる。197は169と同一個体である。199は須恵質、200は土師質だがともに桶巻き技法によるもので、桶の板幅は2.5cmである。200は糸で挽いて切り離した痕跡が斜めの筋となって残る。

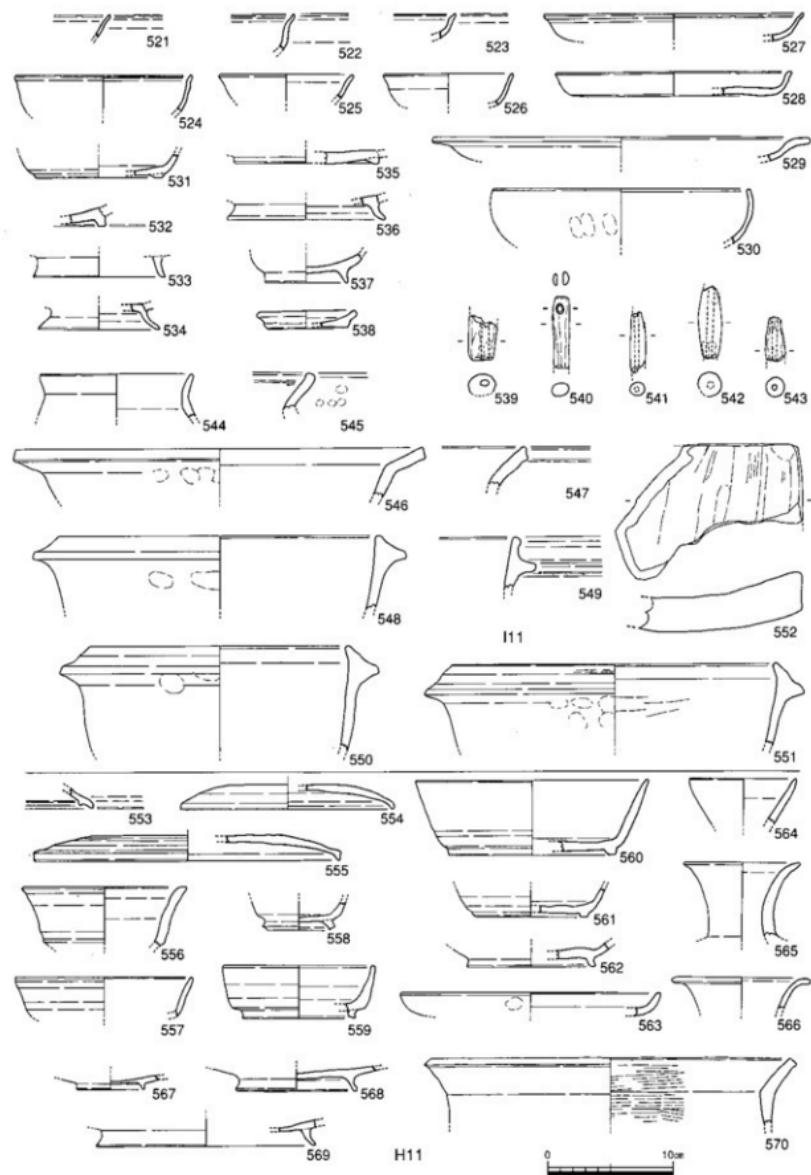
201～216はH 9 グリッド出土である。216は完存の鉄製品である。頭部のみ薄い。とりあえず釘とした。須恵器の時期に川北遺跡の古代集落の存続時期における偏りはない。

217～231はG 9 グリッド出土である。225は余り見ない形態で、高台の付く杯と考えた。348も同一個体であろう。228～230は同一個体と思われる。231は管状土錐である。須恵器には7世紀中頃のものは含まれない。

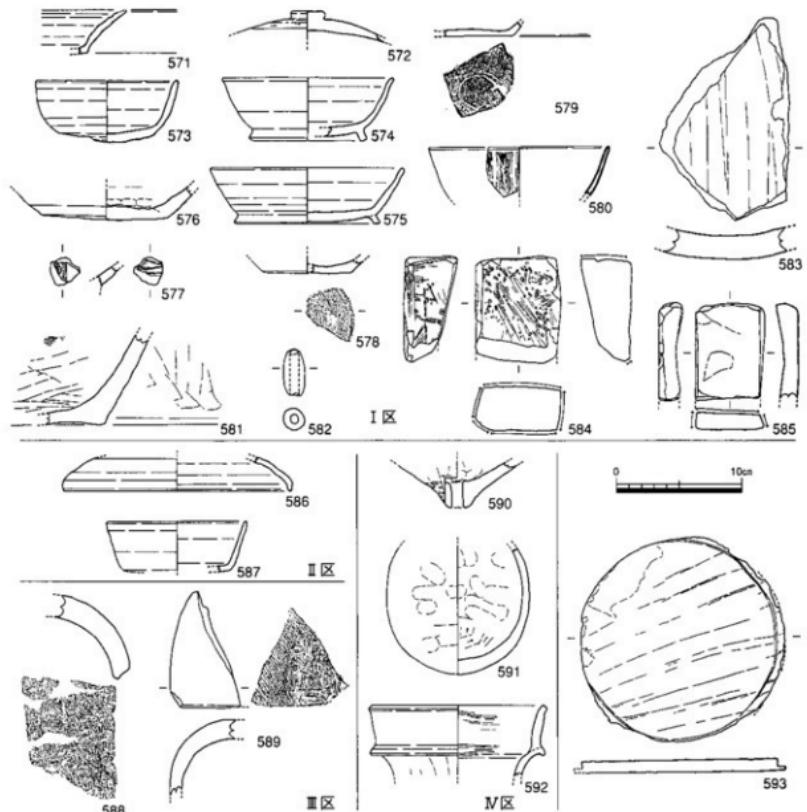
232～235はJ 10 グリッド出土である。



第62図 包含層出土遺物実測図⑨ (1/4)



第63図 包含層出土遺物実測図⑩ (1/4)



第64図 包含層出土遺物実測図⑪ (1/4)

236～322はI 10グリッド出土である。I 10・H 10・G 10・I 11のグリッド出土遺物が突出して多い。255は焼成時に接していた須恵器片が付着する。外底は板で丁寧になんでる。267は体部に沈線を引く小型の鉢である。278はI 10・H 10・G 10・H 11グリッド出土破片と接合した。282は紡錘車を考えたが、穴の径が上に広がる。283は管状土錐である。284は石錐とした。301は内面黒色で、胎土も他の土師器と異なる。310は高杯であろう。315は黒色土器A類である。321は鍋としたが器壁が薄い。須恵器はTK217型式～TK48型式（7世紀中葉～8世紀初頭）内に収まるとしてもおかしくはない。しかしTK48型式でも新しい形態を持つものは、次のMT21型式のものと個体判別では分離が難しい。グリッドの傾向として須恵器がより古い傾向を示すとしておく。土師器は讃岐での編年が出来上がってないため細かな時期判断が難しいが、須恵器と同じと見ておく。

323～389はH 10グリッド出土である。323は弥生時代終末期の壺である。339は外面底にヘラ記号が残される。350は高杯と思われる。352は壺の蓋と考える。353は余り見られない形態である。ハソ

ウの頸の可能性もある。354も珍しい形態で、タンブラーのような円柱状の杯である。中に黒色物体の付着があり、漆と考える。漆を溶くための特定の用途に用いられる容器と判断した。355は長方形透かし入りの円面鏡である。356は二重口縁の壺である。須恵器では珍しい形態である。361は胴に棒状か環状の取っ手が付く。363は須恵質の平瓦である。凹凸面とも丁寧に磨き、胎土也非常にきめ細かい。他の用途も考慮する必要がある。381～383は繡の刃口である。他に457がG 10グリッドで出ている。384～388は管状土錐である。389は竈の焚き口蓋である。H 10グリッドの須恵器もI 10グリッドの時期に収まるが、新しい時期のものである高台付杯が多い傾向がある。またこのグリッドでは他グリッドと異なり鍛治・墨書・漁業関係の遺物が集中して出土している。

390～459はG 10グリッド出土である。414はJ 9グリッド出土破片と接合した。435は須恵器の皿である。436は須恵器に似るが近世以降の陶器であろう。440は山と口が上下に重なったようなヘラ記号である。文字の可能性もあるが、判読できない。458は棒状土錐である。須恵器はH 10グリッドの須恵器と時期の傾向が一致する。

460～552はI 11グリッド出土である。460は天井部をヘラ削りしており、杯蓋と判断した。515は356と同一個体の可能性が高い。516は壺肩に円形浮文を貼り付け、内面は叩きの当て具痕をナデ消す。517は環状の取っ手をつける。520は外面に並行タタキ目が顕著に残る。529は非常に浅い皿である。538は中世の小皿である。539は土馬の脚である。540～543は土錐である。548～551は中世の土釜である。552は土師質の平瓦である。このグリッドではI 10グリッドと逆に須恵器はTK48型式～MT21型式（7世紀末～8世紀前半）を主体とし、TK217型式のものが一部含まれるという傾向を示す。553～570はH 11グリッド出土である。556は225・348と同一個体の可能性がある。562は砂を多く含み、胎土が生焼け状に黒い。土師器の可能性もある。

571～585はグリッド不明のI区の遺物である。571は下川津b類の胎土を持つ弥生時代後期の高杯である。572は摘みや蓋上部に墨痕状痕跡がかすかに残る。577は縁釉陶器である。内面には花弁状の縱方向の直線とおしへ状の浮彫りが認められる。また外面にも文様状の横方向の盛り上りがある。胎土色・釉色から57と同じく近江産と考えるが、小片であり、これ以上のことは明らかにできない。578は底を糸切した須恵器の杯である。579は中世の皿であろう。580は上田分類B-I'類の青磁碗である。蓮弁が表現される。14世紀中頃のものである。584の砥石は表面に研ぎ痕以外の擦痕が無数に付く。

586・587はII区出土遺物である。

588・589はIII区出土遺物である。588は内面に粘土の継ぎ目が明瞭に残る。589は内外面に少し縁がかった灰釉状の釉が全体に薄く付着している。自然釉か施釉したものか判断できない。須恵質に焼かれ特製に見える。

590～592はIV区出土遺物である。592は古墳時代の二重口縁の壺である。

593は予備調査24トレンチで検出した旧河川から出土した桶底（または蓋）である（第1章第1節2予備調査の結果参照）。曲げ物の受け部が縁辺に1段薄くなってせり出す。曲げ物と結合するための目釘穴らしいものが幾つか段側面に見受けられる。

第5節　まとめ（第2・3・4・9・65図）

川北遺跡の評価は7世紀中葉～8世紀前半の掘立柱建物群と溝等の付属遺構をどのように評価するかにある。以下この点を中心に遺跡のまとめを行う。

1. 遺構の時代別変遷

最初に川北遺跡で検出した遺構を時代に分けて概観する。

弥生時代

この時代の遺物は井戸SE01といくつかの溝とⅠ区包含層で少量が出土している。この遺構のうち、SD17は包含層の落ち込みの可能性がある。SD18は、13頁・39頁で述べたように平均幅4mの大規模な溝であると判断した。あえて蛇行する形態には流速を制御したりするような意図があると思われる。農業用の灌漑基幹水路として開削された可能性が当然考えられるが、今回の調査ではこれ以上は明らかにできない。SD18出土の土器は磨滅してなく遠方より流されてきたことは考えにくく、隣接して西側を調査するようなことがあれば、同時期の遺構が広がっている可能性もあるだろう。この遺構を残した人々の集落は、平成14年度に南西500mの地点で同時期の20棟以上の竪穴住居跡群が発掘調査された小海荒井遺跡（引田町教育委員会調査、未報告）と考えられる。

7世紀後半～8世紀前半

調査で検出された遺構・遺物のほとんどがこの時期に含まれる。掘立柱建物12棟・横1の他、溝・土坑がある。これらの遺構は、明らかにすべてが同時存在することはできない。よって幾つかの時期に分かれて遺構が変遷したことになる。当然遺構各自の時期判断が遺物からできれば、その変遷を簡単に追うことができる。今回の調査では遺構種別では掘立柱建物が主体を占めるが、掘立柱建物の柱穴から出土する遺物はわずかでしかも小片のため、これにより掘立柱建物の詳細な年代を決定することはできない。厳密には掘立柱建物が7世紀後半～8世紀前半に含まれるかも決めることができない。但し報告中で出土遺物を掲載したように、出土遺物はほぼこの時期に収まる傾向が読み取れるため、その蓋然性が高いと判断し、以下の検討の前提とした。

さて出土遺物量が多く時期の確定な遺構から、この時期は、少なくとも①SD05（7世紀中葉）→②SD06（7世紀中頃～8世紀前半）→③SD08（8世紀前半）、の3期に分かれる。

次に掘立柱建物の重複や位置関係が最も密なSB01・03・04・09を、その関係によりイ：SB04・09→ロ：SB01・03の2時期に分ける。2時期に分けるとすればこの組み合わせ以外は成立しない。3・4時期に分けることはもちろん可能であるが、組み合わせのパターンが増え、①～③との重ね合わせもそれぞれのパターンで複数成立することになる。その結果、他の遺構の時期判断はほとんど不可能となる。イ・ロの2時期に分けた場合が、以下のように他の遺構の時期も最もうまく説明できるため、正しい遺構の時期を示している可能性が高いと判断する。

SD01～03はSB01の区画溝と判断するので、SD01～03をロの時期に属させる。また遺構の重複から、SD04よりSB04が新しい。

ところでSB04・09とも、8世紀と見られる遺物を出土しているので、イ・ロは②・③に重ねるこ

とができる。するとSD04は①の時期に重ねることができる。実際、SD04・05は調査区際で合流するとの判断されており、この推論と矛盾しない。更にSD04より新しいSB08は②か③の時期に当てることができる。SD07を方向的一致から②の時期に当てるとき、SB10は①か③にならざるを得なく、SA01はSB10と異なる時期に属する。SA01の29は割合大きな破片で、包含層からの混じり込みでないと見れば、SA01は①か②に属し、必然的にSB10は③の時期となる。SD10はSD08と出土遺物が接合するため、同じ③の時期と考えることもできる。

以上を整理すると、

① (SA01)、SD04・05 …… 7世紀中葉

②SB04・(08)・09、(SA01)、SD06・07 …… 7世紀中頃～8世紀前半

③SB01・03・(08)・10、SD01・02・03・08・09・10 …… 8世紀前半

となる。遺物出土量から見て①の時期に掘立柱建物が存在しない可能性は低いので、残るSB02・05～07・11・12のいずれかがその時期の掘立柱建物と見られる。実際にいずれの柱穴からも8世紀の遺物が出土していない。但し、SB05～07は2時期の遺構であるので、①以前の時期を設定すべきか、SB05もしくはSB06を②か③の時期に下げる必要が生じる。後者であっても出土遺物の時期と矛盾しない。

10世紀後半～11世紀

38頁では出土遺物がわずかなため時期判断を控えているが、SD12・13は今回未報告のV区県道調査区SD05（注1）と同一延長上にあるため同じ溝と判断できる。わずかな出土遺物も、その判断を否定しない。であれば、V区県道調査区SD05での黒色土器の時期判断から、SD12は11世紀の溝となる。この溝は現代まで水田の畔として存続しているようであり（畔Aとする）。自動車道建設のために測量された第2図では左下から2.8cm上の横方向の短冊形の区割りの上の線とみられるが、2図と9図を比較すると1～2mのずれがあり、図上での誤差が長期間にわたる利用の間にずれたとみられる。昭和49年撮影の航空写真でも不鮮明ながら認められる。南の条里型地割の南北方向の線を延長すると、SD12はその線から西に55m離れて平行する。条里型地割一辺109mのちょうど半分となるため、SD12=畔Aは重要な溝となる。なおⅢ区とⅣ区の境は畔Aと平行に工事と調査工程との調整で機械的に設定されたものである（現在の水田の広がる景観がこの時代に形成されたことになる。更にSD12・13とも山裾により北へ延長できないため、同じ時期にⅡ区に溝への導水を行える遺構が存在したことを示している。つまり、SR01はこの時期まで遡るとみてよい。よってSR01とつながるSD12・13が作られ、SR01はやがて埋まり南端に小さな用水路となって残り、埋まったSR01はそのまま水田区画となつたという景観の変化が追えることになる。この時期以降は掘立柱建物がV区に集中しており、こちらに集落の中心が存在する。よって今後行うV区県道調査区の整理において、上記の判断を再検討したい）。

最後に川北遺跡で出土した縁釉陶器はその編年観から10世紀後半としたが、この時期に確実に該当する遺構・遺物は見つかっていない。48頁では、黒色土器片の年代を縁釉陶器に引き寄せて判断したものの、黒色土器が上記のように11世紀のものであるとすれば、川北遺跡の縁釉陶器には骨董品的な付加価値を与え、その実際の廃棄はV区掘立柱建物群の時期に引き寄せた11世紀以降とすべきかもしれない。それにしても集落の中心から離れて単体で出土した状況は解明できない。

中世

この時期の遺物は、SR01の他には、包含層から少量出土したに過ぎない。SR01出土土器はV区県道調査区の上記集落の時期に重なることから、SR01に打たれていた杭列①・②はこの集落の住民によって打たれたのであろう。杭列打設は護岸や漁業が目的である可能性を、39頁で指摘した。集落とSR01は11世紀以来の密接な関係が保たれ、引き続き一つの景観をなしていたことを物語っている。

2. 川北遺跡の掘立柱建物群の性格と南海道引田駅の所在地

あらためて、I区の掘立柱建物群を見ると、柱穴の間隔は7尺(2.12m)のものが多く、基準尺の存在が想定され、建物方向は国土座標系(世界測地系ではない)北から約4度西に振った方向を基準にしている可能性があり、この方向が南に広がる条里型地割の阡陌(せんばく)の方向と合致し、この地域独自の方向であることから、両者に関連がある可能性が高いことが指摘されてきた(第65図)(注2)。

条里地割と同じ方向の建物群で、大きな柱穴、宮殿・官衙などに選択的に利用されるヒノキの柱材、建物間の方向を描えるなどの企画的な配置、基準尺存在の可能性、少量の硯や瓦の出土、などから官衙の可能性も考えられ、ひいては付近を通るとされる南海道の引田駅との関係まで調査時には検討が行われてきた(注3)。しかし、一つ一つの材料は官衙に近い様相を持っていても、全体としてみた場合、官衙関連施設とするには複いようない貧弱さを露呈する。結局、調査終了時点では「集落跡」という評価に落ち着いた(注4)。

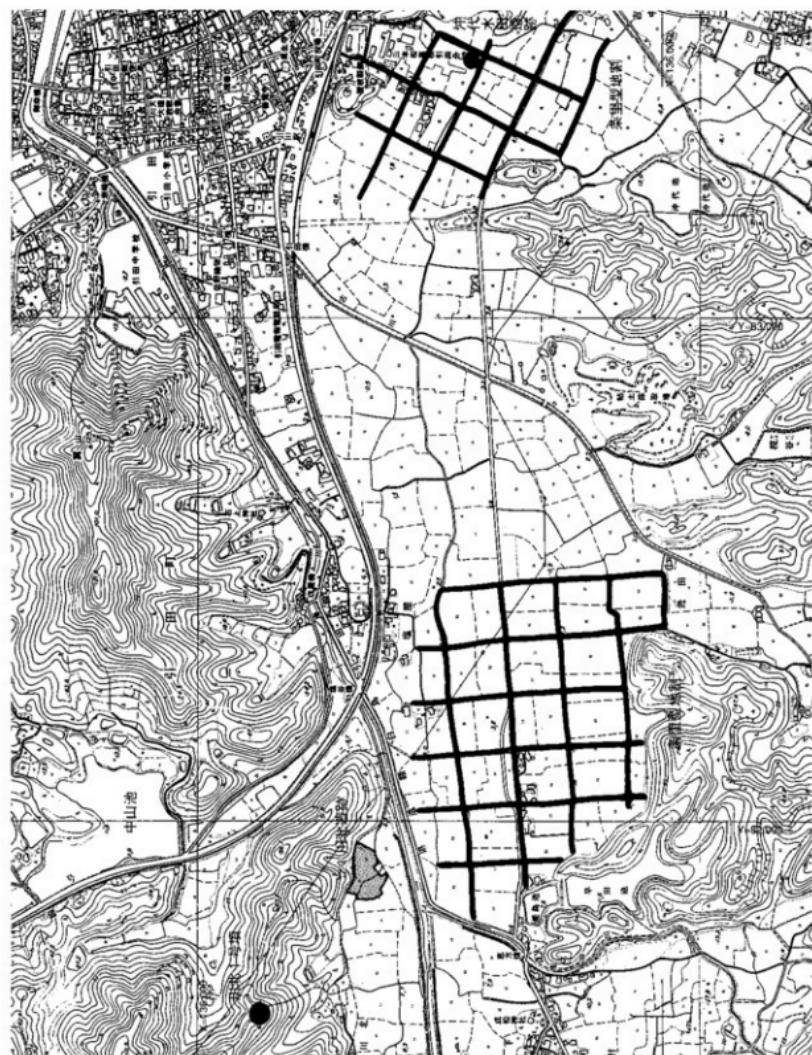
川北遺跡の時代変遷を見ると、7世紀中葉で掘立柱建物群が出現する。南西500mの地点に弥生時代の居住域があり、また7世紀前半の溝も見つかっていることから居住に適しているのはその周辺であり、川北遺跡の地点には7世紀中葉に初めて人が住み着いたことになる。地形的にもⅢ・Ⅳ区更にその西の調査区外が高く、掘立柱建物群のあるI区は微高地縁辺部の居住に適さない地点であり、自然発生した集落とはい難い。建物群の方向が条里型地割と関連し、上記の官衙的な様相を若干とも持っている点、やはりこの掘立柱建物群の成立に特殊な意義を認める必要があると考える。

ここではまず第1に古代の引田周辺における重要施設である南海道引田駅との関連を考えてみる。引田駅に直接関わる基本文献は10世紀前半の『延喜式』兵部省の諸国駅伝馬で、それには阿波から讃岐に入った最初の駅を引田に設け、伝馬四疋を置くことが決められている。その引田駅の起源に関しては、『続日本紀』養老2年(718)5月7日の条により、この頃既に南海道と駅が設置されていたことが知られる。また『大宝令』(701)には駅制が細かく規定されている。基幹交通網の整備は中央集権国家を維持していくうえで重要な問題であるため、この時期に全国に駅制が整備され、その内で引田駅も設置されたことが想定できる。

引田駅の所在地の比定については、明治時代における地名から類推した馬宿説が基本となり現在に至っている(注5)。しかし、引田駅が設置される元となった律令制と関連の深い条里型地割は、引田周辺では馬宿ではなく引田の南西側に分布することが明らかになり、狭い地域において駅と条里型地割という律令制下の要素の分布にずれがある点がその後明らかになってきた(注6)。馬宿の地名の起源がどこまで遡るのか不明であるが、古代引田郷の遺称地が近世の引田村であり、馬宿は隣の馬宿村に含まれることも、馬宿での比定に疑問が残る原因である。南海道は川北遺跡からは尾根を越えた北側にある中山池付近を通過していたと推定されている(注7)。この池から東に向かうには現在鉄道や国道の通る要衝となっている広い谷を通りしかなく、それより川北遺跡までは300mの距離を測るのみである。

川北遺跡では今回の調査で官衙関連施設でないにしても同時代の掘立柱建物群を検出しており、引田駅の所在地を考古学的成果も含めて再検討する時期に入ったといえよう。

次に条里型地割に目を転じたい。香川県下の条里型地割は、丸亀平野において7世紀末～8世紀初頭には既に存在したことが明らかにされ（注8）、坂出市下川津遺跡でも遅くとも8世紀初頭には出現し



第65図 川北遺跡の位置と条里地割の復元（1/10,000、第4図より地割を復元）

ている（注9）。引田周辺に残る2ヶ所の条里型地割は成立年代が不明であるが、川北遺跡南の条里型地割は、前述したように川北遺跡の掘立柱建物群と強い関連があり、成立年代もそこに求めることが可能である。またもう一つのJR引田駅南東の条里型地割下では沖代水田遺跡が発掘され、ここでも古墳時代後期に水田が存在したことが明らかになっている（注10）。香川県東端でも県西部と同時に条里型地割が施行されたと考えることに問題はない。

再度駅制に話を戻す。岸本道昭氏によると、古代山陽道の播磨国内にある野原駅家（注11）・高田駅家・布勢駅家・大市駅家・草上駅家の所在地・所在推定地では、いずれも7世紀後半の終末期古墳と古代寺院が隣接して存在しており、古代の郷が成立した際に、後に終末期古墳に葬られた人物が郷長となり、また駅長も兼ね、更に古代寺院の壇越でもあったことが推測できるという（注12）。特に布勢駅家周辺では西にある小丸中谷廃寺遺跡で寺院とも考えられる遺構が検出されており、長尾薬師古墳は横口式石槨状石室を持つ一辺17mの方墳であることが明らかにされ時期も7世紀第3四半期とされる。

ここで想起するのは川北1号墳の存在である。川北1号墳は径15mの円墳で、引田周辺で現在知られる唯一の横穴式石室を持つ古墳であり、石室は中規模とはいえ地城では当然最高位にある。川北1号墳は6世紀末～7世紀前葉の時期に属し川北遺跡とは時期がずれるが、沖代水田遺跡の標高から推測した川北1号墳の時代の可耕地の中心域が古墳の位置する尾根の南や南東の低地に求められ、その水田の生産力に依拠して成長した政治勢力の長が川北1号墳の被葬者であると想定されている（注13）。可耕地が条里型地割の分布域と重なることにも注目しておきたい。川北遺跡の予備調査でも小片1点ながら条里型地割の地点で6世紀末～7世紀前半頃の須恵器が出土している（1頁参照）。上記山陽道の終末期古墳と被葬者の背景に雰囲気の似る部分があり、古墳で見た場合引田周辺で唯一となる川北1号墳の周辺に引田駅が存在した可能性は十分考えられる。

引田駅の所在地を考古学的に再検討すべきと述べたが、永田英明氏によると、上出の山陽道草上駅の駅戸（注14）は一貫して「家辺」（駅家の近辺）に居住地がありそこで生活していたことが、宝亀4年（773）2月14日官符から読み取れるという。また、『類聚三代格』弘仁13年（822）1月5日官符は、駅戸の口分田（注15）を駅家の付近に集中して班給することを命じており、駅戸が駅家の近くに住んでいたことを前提としたものという（注16）。つまり駅戸は駅家の勤務地である駅家の近辺に居住地があり、居住地の近くに口分田を与えるという令制の理念により口分田も駅家の近くで与え、しかもその口分田は一定の範囲に集中して与えられたというのである。

口分田には通常であれば国家の土地制度に組み込まれた条里制開拓によって形成された方形区画の水田が与えられるであろう。引田周辺の条里型地割の中に口分田が含まれていたとすれば、上述したように口分田の近くに駅家があるので、これから引田駅の所在地を求めるとき、おのずとその範囲は狭められる。更にその条里型地割に隣接して営まれた川北遺跡の掘立柱建物群には、駅戸が含まれていた可能性も出てくる。この場合駅戸の近くに駅家があるなら、馬宿でなく引田に引田駅があった方が駅戸にとっては便利である。これは川北1号墳から類推した引田駅の所在地と合致する。第4図を見ると、川北遺跡周辺では渕・潟跡地が条里型地割と接している。南海道が川北遺跡の北の谷を西進し中山池付近を通るとすれば、その道は東へは条里型地割の北端付近を通り、渕・潟跡地の際を通って北上しもう一つの条里型地割の付近を通っていったように思える。この道沿いに当然駅があり、道から最短300mの地点に駅戸を含む集落（＝川北遺跡）があり、駅と駅戸に接して条里型地割があるとすれば、申し分ない環境であろう。

川北遺跡の掘立柱建物群の中に駅戸が含まれるとすれば、駅家の整備によってその建物群も整備されたであろうから、この節の最初で述べたような官衙的な様相が掘立柱建物群の中に認められることはなんら不自然ではない。むしろ当たり前といえよう。南の条里型地割の坪界を延長してくると、SB12のすぐ西側を通る。掘立柱建物はすべてこの線より東に建てられている。微高地を避けその縁辺部を選んでいるぐらいであれば、この線を意識して同じ一辻109mの方形区画の中を居住用地としたことを考えてもよいかもしれない。また居住に最もよい土地を選んでいないことは、この掘立柱建物群の突然の出現と合わせ、集落としての計画的な移住が背景に考えられる。駅子は駅馬の6倍が基本の可能性があり、駅家経営の人的基盤が駅戸、駅戸の課丁がすべて駅子とされる原則ならば、駅子数から駅戸のおおよその数を推定可能であるという（注17）。それに従い引田駅の駅子・駅戸を算出すると、駅馬は4疋であるので、駅子は24人、駅戸は約3.7戸になる。前節で7世紀後半～8世紀前半を3期に分けた。倉庫である総柱建物や住むに適さない小面積の建物を除いた側柱建物は7～9棟で、1期当たり2.3～3棟になる。建物群は南東へやや広がる傾向を示しているので、もう少し1期当たりの建物数は増えるであろう。算出した駅戸と建物数が近似することは、この掘立柱建物群が駅戸のみで構成される駅戸集落であった可能性も示している。駅と駅戸集落を新たに設置するのであれば、より近くになるよう設置したであろう。ここでも引田駅が川北遺跡の近くに置かれていた可能性を示している。

以上をまとめると、南海道引田駅は馬宿でなく、引田にあった可能性が高い。その根拠は川北1号墳の存在であり、条里型地割の分布による。山陽道播磨国の一例では、駅家の周辺に有力な終末期古墳が存在する。条里型地割の分布範囲が狭い地域に駅家が存在する場合、両者は駅戸を介在して近接した位置に所在する可能性が高い。また駅制成立期の掘立柱建物群が川北遺跡で確認されたことも、同時期の集落が発見されたことに留まらず、引田駅の所在地を推測する手がかりとなる。川北遺跡の掘立柱建物群は条里型地割と密接に関連する集落であり、駅家と条里型地割の間に介在する駅戸集落の可能性がある。その川北遺跡の集落は計画的な移住と見られるため、駅と一緒に設置された可能性がある。つまり引田駅がその付近に存在することになるのである。

最後になるが、この集落の廃絶の原因は何であろうか。西5kmにある原間遺跡でも8世紀前半で集落が廃絶し、一方で更に西4kmの坪井遺跡（第66図参照）では、8世紀中葉に集落が出現する。両者とも官道沿いの集落であることから、2つの集落の消長の原因が古代の幹線道路が南海道ヘルート変更されたことに求められた（注18）が、地形により道の通りうる範囲が限定される引田周辺では、その可能性はない。駅制は「延喜式」に見られるように10世紀前半も制度として存続しており、川北遺跡に駅戸が継続して営まれてもなんら問題はない。9世紀後半には駅制衰退の中で駅子の逃亡も増加してきており、このような要因も考えることができるかも知れないが、条里型地割は継続して残りSD12・13からは地割がずれることもなかったことが窺える。この条里型地割内での水田耕作は集落の廃絶後も行われていたと見れば、他の理由で単に集落の移動があっただけかもしれない。弥生時代の集落が見つかった小海荒井遺跡では8世紀前半頃の掘立柱建物が1棟検出されており、これも検討材料になるであろう。ともかく空白の時間を埋める遺跡の発見を期待したい。

- 注1 「川北遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成10年度 1999 (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2 「川北遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成10年度 1999 (財)

香川県埋蔵文化財調査センターほか

- 3 「川北1号墳から川北遺跡へ」『引田町の歴史を掘りおこそう』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査説明会資料 1998 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 4 注2文献
- 5 吉田東伍『増補大日本地名辞書』第3巻中国・四国 1900 富山房
服部昌之「讃岐国」「古代日本の交通路」Ⅲ 1978 大明堂
- 6 注5服部文献
金田章裕「高松平野の条里遺構」『香川県史』第1巻 1988 四国新聞社
「古代の引田と南海道」『引田町史』 1995 引田町
- 7 日野尚志「南海道の駅路 阿波・讃岐・伊予・土佐四国の場合」「歴史地理学紀要」第20巻 1978
- 8 森下英治「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要」V 1997
- 9 大久保徹也「下川津遺跡といわゆる条里地割について」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」VII 1990 (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 10 丹羽佑一「古墳時代」141・145頁『引田町史』 1995 引田町
- 11 駅と駅家はほぼ同じものであるが、参考とした文献に従って使い分けている。
- 12 岸本道昭「駅家とその周辺」「駅家と在地社会」古代官衙・集落研究会報告要旨・資料 2003 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所。なお講演の記憶と資料に基づくものであり、誤解があれば筆者の責任である
- 13 注10文献145頁
- 14 駅戸は駅の近傍の戸が指定されたもので、駅子は駅戸の課丁がすべて当てられた。駅子は駅起田を耕作する他駅馬の養飼の義務などを負う。国司の補助要員として駅務を執るのが駅長で、駅戸の中から富裕で才幹あるものが終身の間任用された。(『国史大辞典』(吉川弘文館) 駅制の項による)
- 15 駅子は駅の業務に携わるため徭役は免除されたものの、生活基盤として通常の口分田を与えられた。
- 16 永田英明「駅家と駅戸」「駅家と在地社会」古代官衙・集落研究会報告要旨・資料 2003 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 17 注16文献
- 18 片桐孝浩編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第39冊 原間遺跡Ⅰ』488～490・504～505頁 2002 (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

第3章 三殿出口遺跡の調査

第1節 歴史・地理的環境と立地（第66・67図）

四国横断自動車道建設以前の大内町（当時）の遺跡については、これまで刊行された本シリーズの第36冊金毘羅山遺跡Ⅰ・第39冊原間遺跡Ⅰ・第40冊坪井遺跡と、大内町史・同補遺で解説が行われている。また、四国横断自動車道建設に伴い調査された大内町（当時）内の7つの遺跡のうち6つの遺跡の成果については本シリーズの上記3冊のほか第39冊原間遺跡Ⅱ・第46冊金毘羅山遺跡Ⅱ・第47冊楠谷遺跡等に既にまとめられている。

三殿出口遺跡は調査の結果、中近世を中心とした遺跡であり、ここでは該期の遺跡の概要を上記資料より抽出しまとめておく。

中世

王子の谷遺跡では室町時代前半の建物と溝が検出されているほか、鍛冶遺構も検出されている。またそれに伴い大量の土師器が出土している。坪井遺跡で散村的集落の存在を示す掘立柱建物や溝が検出さ



第66図 三殿出口遺跡周辺の遺跡分布 (1/25,000)

- | | | | |
|----------|---------|----------|------------|
| 1 三殿出口遺跡 | 3 坪井遺跡 | 5 金毘羅山遺跡 | 7 西谷遺跡 |
| 2 王子の谷遺跡 | 4 仲善寺遺跡 | 6 別所池田遺跡 | 8 原間遺跡（横断） |



第67図 三殿出口遺跡位置図 (1/5,000)

れている。金毘羅山遺跡で埋没河川の上に建物群が建てられている。仲善寺遺跡でも集落が検出され、これは西側の谷奥部にある仲善寺跡との関連が考えられている。西谷遺跡では、13世紀後半から15世紀前半にかけての集落跡が検出されている。原間遺跡で掘立柱建物跡2棟と自然河川跡が検出されている。川田池西遺跡では試掘調査の結果、古代末～中世前半の集落跡が想定されている。

近世

坪井遺跡で江戸時代に埋没した溜池状遺構が検出され、中世同様の散村の存在が想定されている。金毘羅山遺跡では砂糖甕が検出されている。原間遺跡では、屋敷の区画溝あるいは雨落ち溝と考えられる南北50m×東西約28mの溝とそれに隣接して掘立柱の覆い屋を伴う砂糖甕が見つかっており、主屋に対する作業小屋的な関係がうかがわれる。

三殿出口遺跡はさぬき市三本松周辺の平野部から西へやや谷あいに入った地点に立地する。北東はこの平野部を望むが、東西に丘陵に挟まれた広い谷で、南も丘陵が迫る。

第2節 調査の方法

1 地区割り（第68図）

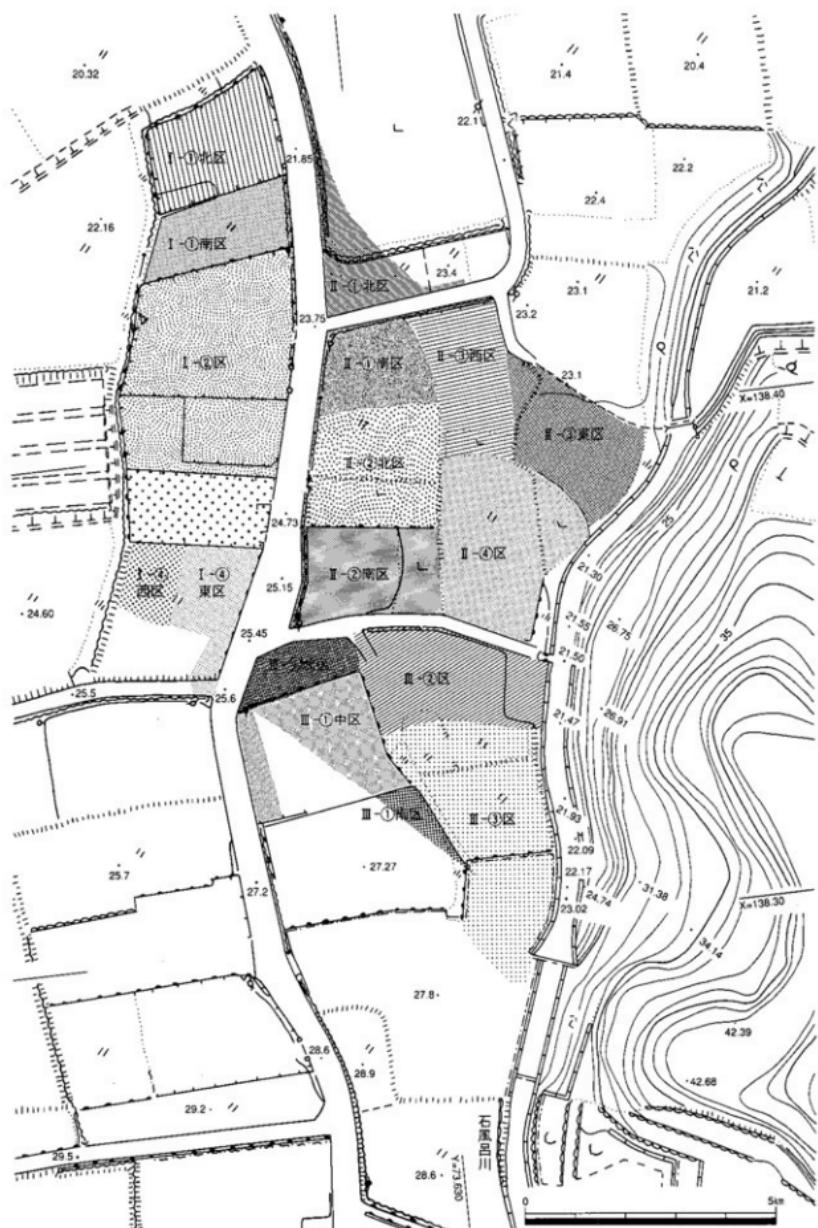
全体を現道によって3つに分け、I～Ⅲ区とした。それぞれを土地区画・調査着手順で①～④区に分け、更に必要に応じて東西南北中区に細分した。よって3層構造の地区割りとなっている。

2 記録類の作成

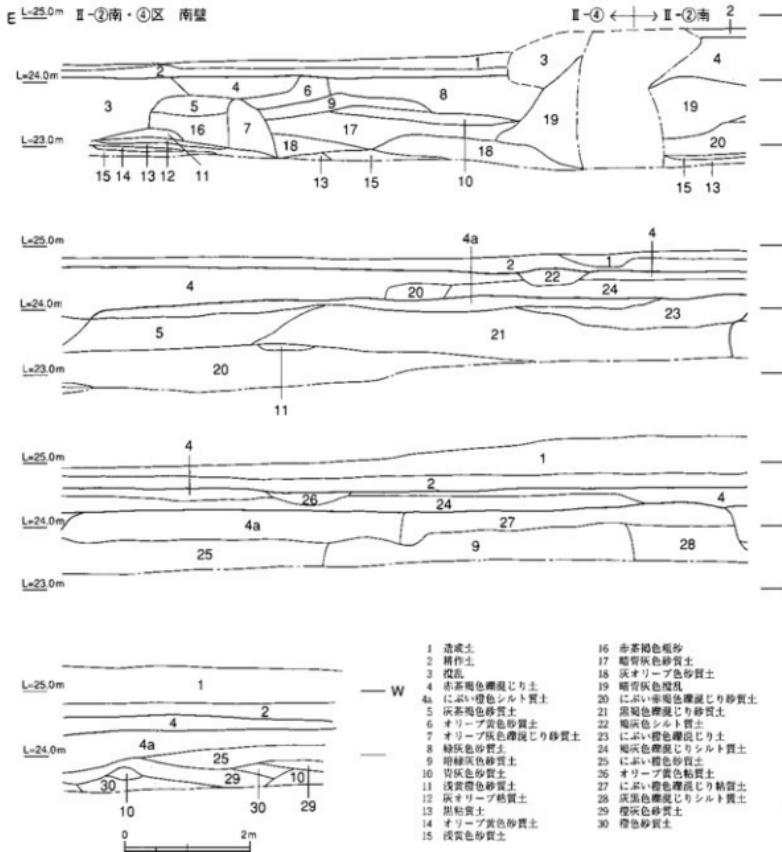
検出した遺構については、航空写真測量による1/50の縮尺の図面または現地での手書き作業による1/20縮尺の図面を作成した。更に詳細な記録を必要とする掘立柱建物跡のような遺構については、手書き作業により適宜1/10縮尺の図面も作成した。写真は35mmサイズの白黒フィルム、リバーサルフィルム、カラーフィルム及び6×7判の白黒フィルムにより記録を残した。また、航空写真測量の際に、35mmサイズのリバーサルフィルム、6×7判のカラーネガフィルム、リバーサルフィルム、及び4×5判のカラーネガフィルムによる俯瞰写真も撮影した。焼付けのみであるが、航空写真測量に用いた各調査区の完全俯瞰写真も保管している。また三殿地区の予備調査遺物・記録も合わせて保管している。

第3節 土層序

遺跡の南北端部はトレーンチ調査のため、その部分の土層が記録されているのみである。また、遺跡中央部では調査区周囲の土層断面が作成されているが、遺構面の認識が記録されているものは少なく、これを平面記録に残された遺構面上の標高から判定することも現実的には難しい。ここでは遺構面の認識が残された部分を掲載する。土層番号の位置は第73図に対応する。



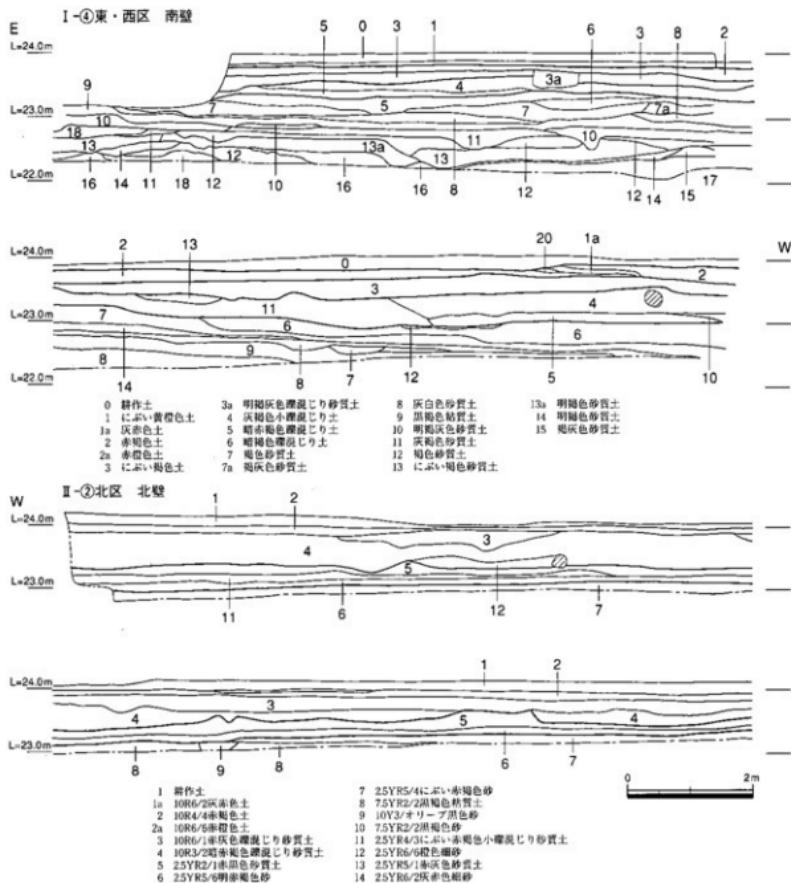
第68図 三殿出口遺跡調査区割り図 (1/1,000)



第69図 三殿出口遺跡土層図① (1/80)

土層①（第69図）

記録地点は II - ②南区南壁と II - ④区南壁の一部である。II - ②南区中央あたりの21・23層が旧風呂川の流路岸と想定されている。両区の境から東 II - ④区側は3・19層といった擾乱が大きく及んでいるが、それにより II - ④区全域が旧風呂川の流路となる。遺構面は2面存在する。下の第2遺構面は II - ②南区のみ認められる。但し、遺構はほとんど見つかっていないとされる。4a層上面がそれに該当する。西端がわずかに高い。旧風呂川が流れていた時期から埋没後までの遺構面と判断できる。次に II - ④区唯一の遺構面と II - ②南区の上の遺構面とで第1遺構面（4層上面）を形成すると、調査時に判断されている。しかし標高から見て II - ④区の遺構面は第2遺構面とすることも可能である。第2遺構面に II - ②区側のみ盛土による整地が行われて第1遺構面が形成されたのではないだろうか。これであれば、II - ④区の遺構面は II - ②南区1～2遺構面の時期に重なる。



第70図 三殿出口遺跡土層図② (1/80)

土層②(第70図)

土層①の同一線上で町道の西側になる。こちら側では遺構面は計4面想定されている。2層上面の第1遺構面は近世とされ、溝2条が検出されている。2層下3層上面が第2遺構面で中世とされる。この面でST01を検出している（調査の経過では第2遺構面の下に弥生時代の遺物包含層が広がることになっている。後に第2遺構面が細分され、当初第2・3遺構面と呼んでいたものが第3・4遺構面になったのである）。3層下4層上面が第3遺構面となり、遺跡で最も古い時代の遺物が出土している弥生時代と想定されている。ただし、この調査区では遺構を検出してないため、想定に留まる（調査の経過でも想定第3遺構面で遺構未確認とあり、この土層図で言う第4遺構面ということになる）。基盤層は

砂・シルト系、それより上は小礫混じりの土で構成される。3 - 4面間は弥生時代の包含層と記録され、そうであるなら、第4遺構面 = II - ②北区の第2遺構面となる。

土層③（第70図）

記録地点は遺跡中央やや北寄りのII - ②北区北壁で、これも東西方向の土層である。南北方向の土層はすべて遺構面が判断できないため、土層序の説明として不完全となっている。土層①と土層③は南北に位置するため、この比較により最小限の南北方向の土層状況を観察することが可能である。

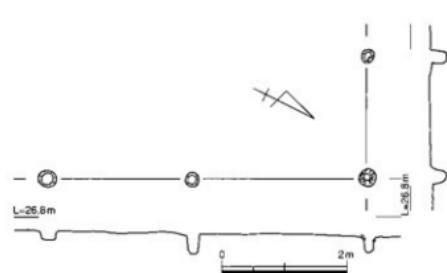
3・4層は近世の遺物を包含する洪水砂礫層である。この層はII - ②北区でも南端付近では存在しないと記録される。南端付近では床土直下で第1遺構面を検出しており、この面を北に追いかけると3・4層に覆われていく。これにより、3・4層下が第1遺構面と判断されている。しかしこの層が旧風呂川によるものであるとすれば、第1遺構面がII - ②南区の第2遺構面となり、従って3・4層上面は、遺構面間の層形成の要因が異なるとはいえ、II - ②南区の第1遺構面となる。但し調査時にはその判断はなされてなく、実際3・4層上面では遺構は見つかっていないとされる。6層は弥生時代の遺物包含層で、下の7層が基盤層で弥生時代の遺構面（第2遺構面）となる（調査の経過ではSE01もこの面で検出したとあるが、SE01は近世の遺構であり、その説明箇所で述べたように調査ミスである）。II - ②南区ではこれも第2遺構面に重なると想定できる。

第4節 遺構・遺物

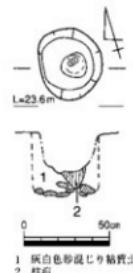
1. 捜立柱建物跡

SB01（第71図、図版27）

遺跡南端のIII - ①南区で検出した。調査範囲の影響で、全体の建物構成を確定できない。検出しえたのは 2×1 間（ 5.1×2.0 m）である。主軸はN 26.4° Wを向く。柱穴から土師器片がわずかに出土しているが、時期を判断できない。柱穴の大きさ・周辺の遺構分布から、中近世の建物跡と考える。



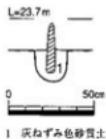
第71図 SB01平・断面図 (1/80)



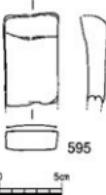
第72図 SP01平・断面図 (1/30)

第73図 三段出口通路構位置見取り図(1/400)





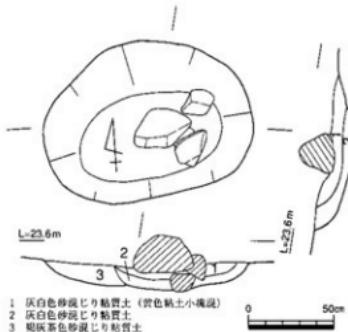
第74図 SP02平・断面図 (1/30)



第75図 SP04出土遺物実測図 (1/4)



第76図 SP03出土遺物実測図 (1/4)



第77図 SK01平・断面図 (1/30)

2. ピット

SP01 (第72図)

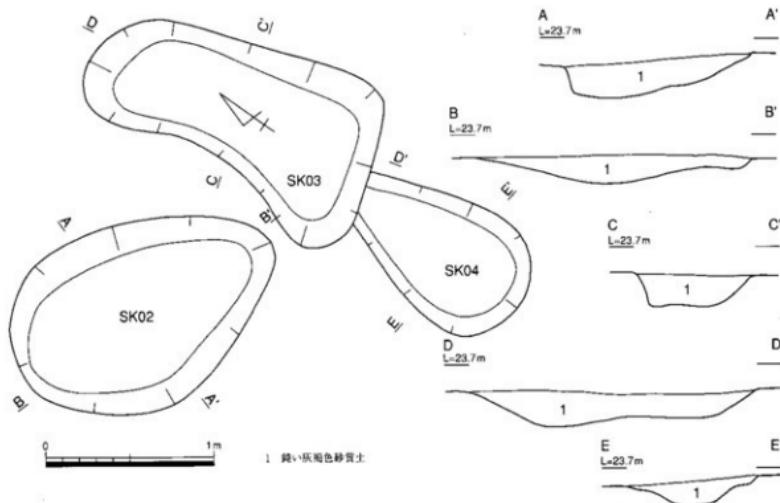
I - ④東区で検出した。底に小砾を詰め上部構造の固定を図った上で径10数cmの柱を据えている。柱は根が残っていた。掘り方を持ち柱径も大きいことから、掘立柱建物を構成する柱穴と判断するが、調査結果では掘立柱建物を復元できない。柱穴から土師器片がわずかに出土しているが、時期を判断できない。

SP02 (第74図)

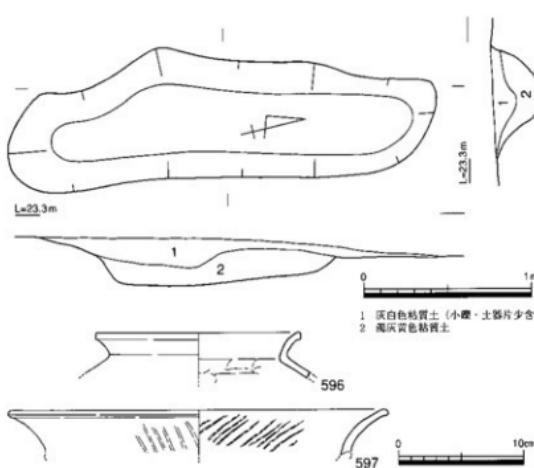
II - ②北区で検出した。穴を掘って現存径5cmの棒を立てている。SP01とは逆に掘立柱建物を構成しないと判断する。横の可能性もある。いずれにしても、調査結果では構造物を復元できない。穴からの他の遺物の出土はなく、時期を判断できない。

ピット出土の遺物 (第75・76図)

594は II - ②北区のSP03から出土した。断面下が薄くなっているので楔かと考える。中世以降のものであろう。595は III - ②区のSP04から出土した砥石である。研ぎ面上部にはそれより下を顕著に使用したための稜線が入っている。



第78図 SK02～04平・断面図 (1/30)



第79図 SK05平・断面図 (1/30)、出土物実測図 (1/4)

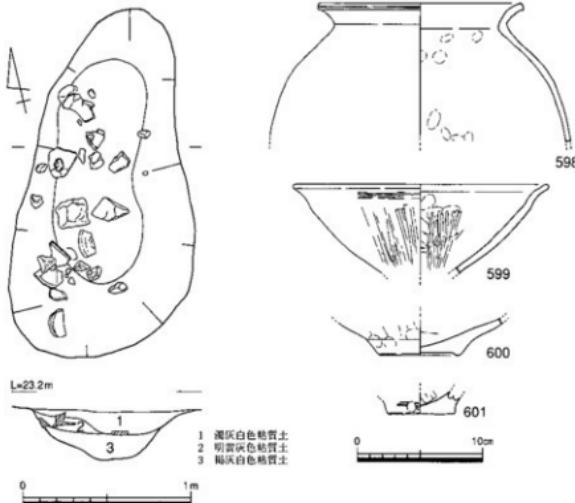
SK02 (第78図)

II - ②北区で検出した浅い土坑である。弥生土器片とサヌカイト1が出土した。包含層の落ち込みの可能性もある。

3. 土坑

SK01 (第77図)

I - ④東区で検出した深い土坑である。2層は自然堆積で、1層は粘土塊の混じりから埋め立てと考える。中に幾つか詰まっていた大きな砾は埋め立ての途中に穴に落とされたものと判断する。中から土師器片がわずかと寛永通宝が2枚出土している。後者より江戸時代の遺構と考える。



第80図 SK06平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

た。ほぼ長楕円形の整った形を呈するため、人間による掘り込みと考える。弥生土器片が少量出土した。596は甕で598と同一個体の可能性がある。597は高杯で内外面とも磨いている。遺物より弥生時代後期の土坑と判断する。

SK06 (第80・93図、図版23)

SK05と並んで検出した。弥生土器片が少量出土した。598は口縁に沈線状の浅い筋が入る。599は内面ヘラ削りの後磨いている。600は壺の底、601は甕の底であろう。遺物より弥生時代後期の土坑と判断する。644もSK06出土遺物である。当初包含層出土で扱っており図版を組んだ後にミスに気づいたが、遺物管理での混乱を避けるため、図版の組み直しを避けた。

4. 井戸

SE01 (第81・82図、図版22・23・35・36)

II-②北区で検出した。最上部に小砾群、その下に石組み、更に下で割り竹の編み枠を検出した。その下から底まで1.5mの範囲には単一の埋土が埋まっていた。石組みと割り竹より井戸と判断した。割り竹は桶の縄で、桶の上に石を組んで井戸を完成させる。この遺構周辺で柱穴を探していないため、井戸屋根があったかは不明である。桶板を抜いた際縄のみが残り、埋め戻していく途中で石組みも大部分が崩れた。最後に小砾で覆って埋め戻しが終わる。小砾で覆う状況は、高松城西の丸町地区やその西の浜ノ町遺跡ほか県内の近世井戸でも多く見られ、井戸跡の存在を示す効果も伴うが、基本的にはその上を踏んだときの沈下や滞水で湿地状となることを防ぐための手段であろう。中から、近世陶磁器の他

SK03 (第78図)

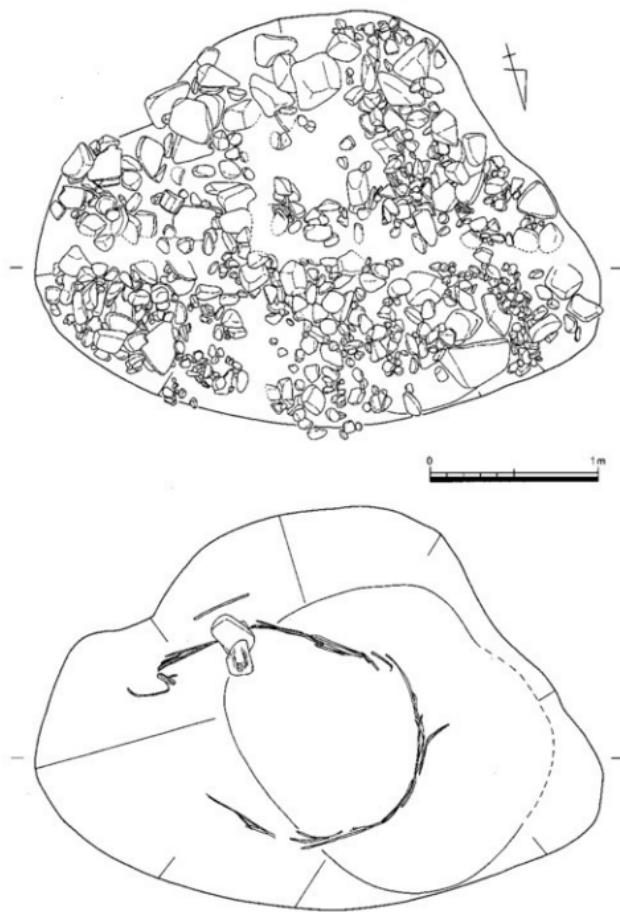
SK02の北に隣接して検出した浅い土坑である。遺物は出土していない。

SK04 (第78図)

SK03に切られる形で検出したが、埋土から2つは同時期であり、浅いためこのような状況で検出されたと判断する。包含層の落ち込みの可能性もある。弥生土器片1が出土した。

SK05 (第79図)

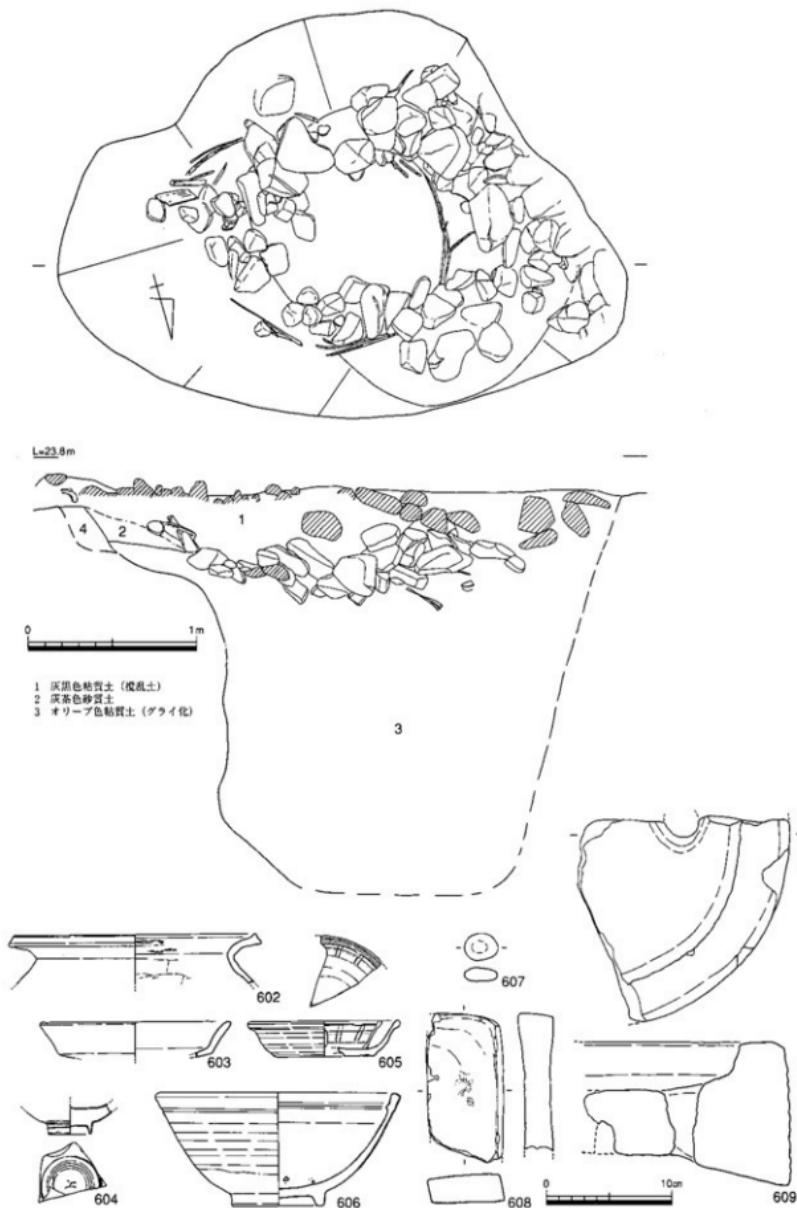
II-②北区で検出し



第81図 SE01埋め立て面検出状況（上）、井戸枠？検出状況（下）(1/30)

土師質土器・瓦・磨り臼・砥石・巻貝・焼け木等が出土しており、埋め戻しをゴミ捨てにも利用したことが明らかである。

602・603は埋め戻しの土に最初から混じっていた弥生土器である。604は外底に筆でコンニャク印判を描く。605は見込みと外底を蛇ノ目釉剥ぎしている。いずれも肥前系磁器で、18世紀後半以降のものである。606は瀬戸・美濃系陶器の灰釉片口で、登窯X期の19世紀以降のものである。607は余り見ない白い石で自然石と認めがたく、墓石とした。609は径約30cmに復元でき、軸受ともの入れが一部残る。焼け木には加工痕は認められなかった。以上より19世紀代の遺構と考える。

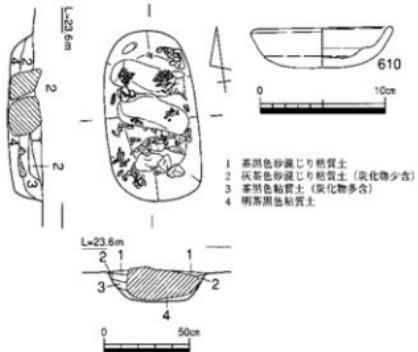


第82図 SE01平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

5. 墓

ST01 (第83図、図版19・35)

I - ④東区で検出した。長軸が南北方向をとる。長椭円形の穴の中に石を入れ、石の周囲の埋土には骨や炭化物が多く含まれていた。骨は無数の灰白色のかけらになっていたが、硬く石化しており、またやや大きく残るものは変形していた。また石化のため全く溶解することなく残ることになった。歯や頭蓋などは見当たらず、四肢骨や指の骨が少し判別できた。人間を火葬した結果強く焼損した骨片が残ったもので、骨の残存と土器の出土から墓と判断した。火葬から埋葬までの過程を考える。①火葬はST01に隣接した場所で行われた。(被熱とワラ類の炭の付着から大きな石2つは火葬の棺台と判断する。しかし棺台が底のST01に接する部分にまで炭が付着する一方で、4層に炭を含まず、ST01自体も熱で焼けた痕跡が認められない)。②ST01を掘削し、棺台となった石や他の石を置いた。(この時

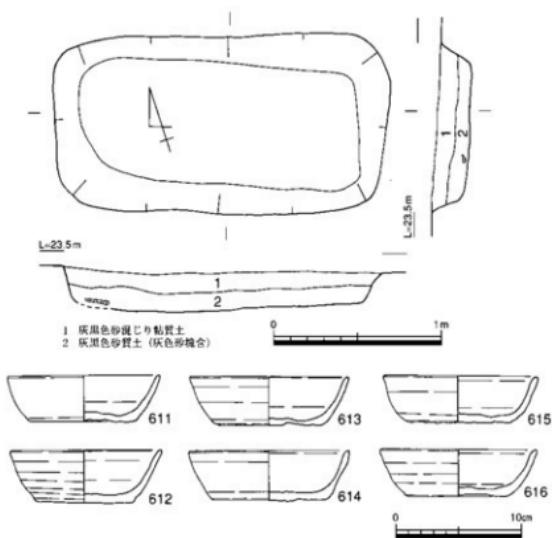


第83図 ST01平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

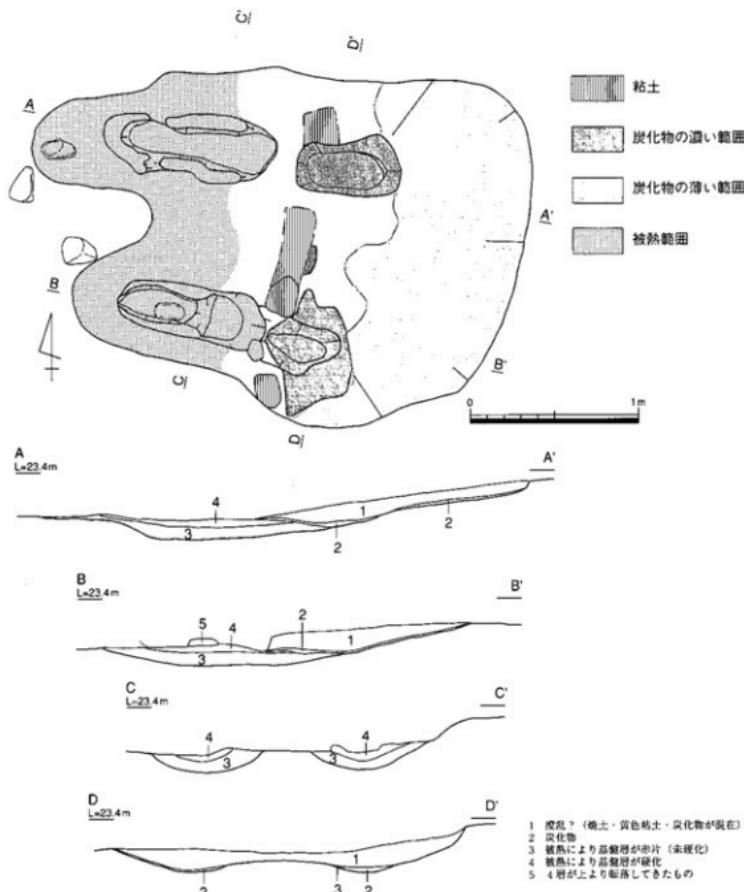
頭蓋などは見当たらず、四肢骨や指の骨が少し判別できた。人間を火葬した結果強く焼損した骨片が残ったもので、骨の残存と土器の出土から墓と判断した。火葬から埋葬までの過程を考える。①火葬はST01に隣接した場所で行われた。(被熱とワラ類の炭の付着から大きな石2つは火葬の棺台と判断する。しかし棺台が底のST01に接する部分にまで炭が付着する一方で、4層に炭を含まず、ST01自体も熱で焼けた痕跡が認められない)。②ST01を掘削し、棺台となった石や他の石を置いた。(この時

4層で石を途中まで埋めた理由は不明) ③火葬した骨や炭を集めた 2・3層を4層の上に埋めた。火葬骨はST01内に散布しており、木製容器に入れて埋葬した状況にはない。④石の上にお供えの土器1個を置いた。出土した土器より、ST01は中世に属する。

県内での中世火葬墓の例は『香川県史2』(平成元年)によると、綾南町西村遺跡や高松城跡東ノ丸下層で土坑内に石を敷き床面としその上で火葬を行いそのまま葬った例がある。また坂出市がんどう遺跡では五輪塔群の一角で火葬骨を納めた骨蔵器が見つかっている。その後も県内の調査例はほとんどなく、火葬骨を



第84図 ST02平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

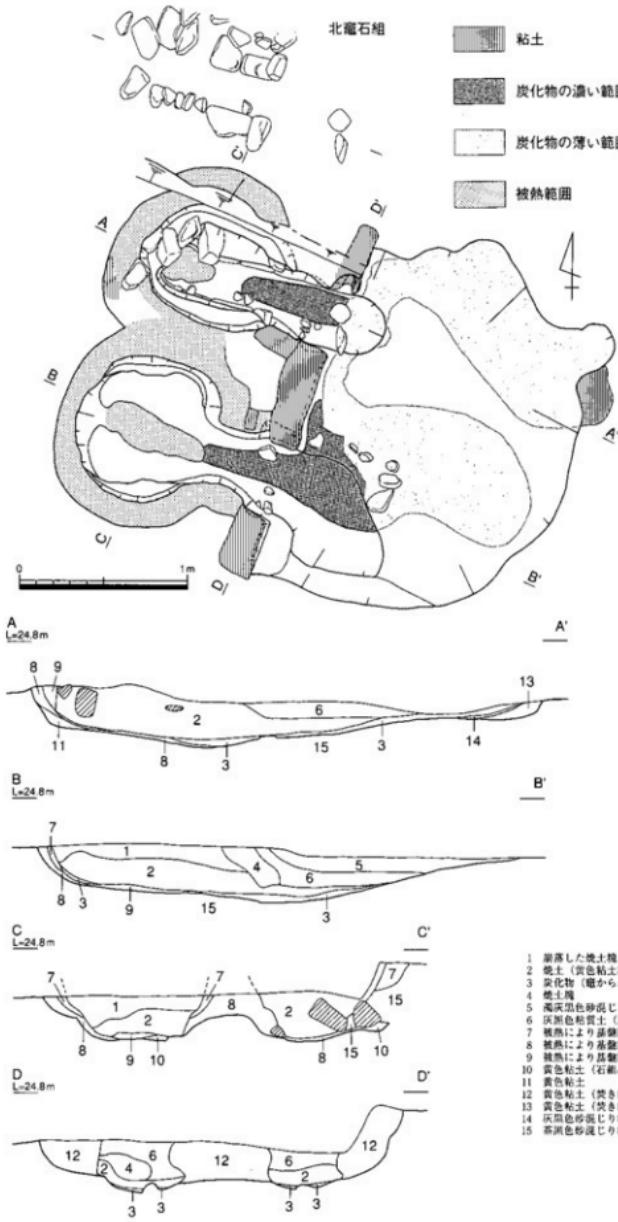


第85図 SF01平・断面図 (1/30)

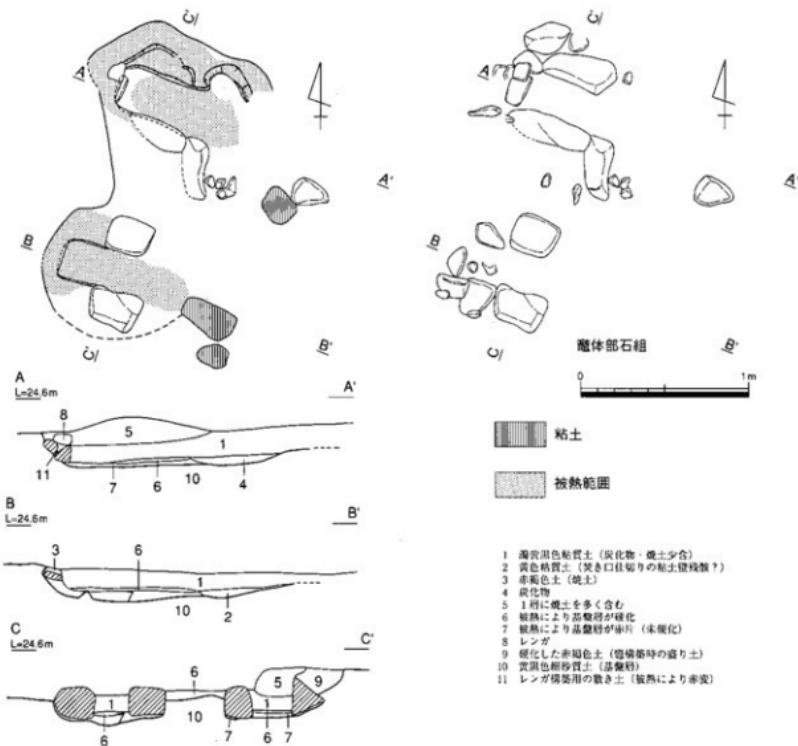
火葬場所とは別施設に葬った点が別形式として評価できる。

但し、正式な鑑定を経ていないが、検出した骨の中に主要骨が見られないことは分骨の可能性も考えておく必要がある。茶毬に付し、骨を拾い、骨臓器に納め埋葬するのが火葬墓の一般的な形態とするなら、県内の火葬墓例と異なり、棺桶も骨臓器もなく直接土坑に火葬した骨を納めることは考えがたい。逆に分骨を行った後であるからこそ、残された骨と棺台を簡易な土坑にまとめて埋めたと考えることも可能である。上述したST01の形成過程もこのことを示しているのかもしれない。

参考文献 『図解・日本の中世遺跡』Ⅶ 祭祀と葬送 2001 東京大学出版社



第86図 SF02平・断面図、北竈石組み平面図 (1/30)



第87図 SF03平・断面図、竪石組み平面図 (1/30)

ST02 (第84図、図版20・36・37)

I - ④西区で検出した。隅丸長方形の深い土坑である。予備調査の12Bトレンチで検出し、その際「中世土師皿集積」として、611～616の土師器杯6枚を取り上げた。そのため詳しい出土状況は記録されていないが、写真によると3枚重ねで2組に分かれて並んで埋まっていたらしい。その後の本調査では、用途不明鉄器1のほか、須恵器や瓦器・土鍋釜などがわずかに出土した。土器の出土状況から地鎮遺構の可能性も考えたが、2組の土器セットを埋めるには不相応な大きさの穴であり、付近に掘立柱建物を復元できないため、土坑墓とそれに供えた土器という関係で捉えた。1mの穴に棺を用いず覆葬することは県内でも各地で認められる一般的な葬法である。但し、複数の土器を供える場合、重ねずに1枚1枚並べておくのが通常である点や長軸の方向が意識されていない点が気になる。611～616は、ほぼ同じ規格の製品であり、同一の製作者更に同一時期であることが考えられる。外面底はヘラ切りで、体部下位がやや強い指ナデで窪み、同様に内面底に強い指押さえの跡が残る(図版36参照)。中世に属することは間違いないが、東讃の中世土師器の編年が未完成である現状では詳細な時期判断はできない。県内の中世土坑墓は検出例が多い。削平された可能性は残るもの墳丘ではなく、副葬品に輸入陶磁器

を持つことは稀で土師器を持つか何もないことが共通し、一般庶民の墓であることがわかる。

ST01・02とともに、付近に中世の集落を伴わないため、集落から離れた場所で葬られたと見られる。

一方、ST01・02は隣接する調査区で時期も中世でありながら、火葬墓と土坑墓と異なる葬法による墓を検出したことになる。集団・階層が同じであれば通常は同じ葬法をとるため、異なる集団か階層差かST02が墓でないかが考えられる。県内での火葬墓検出例が少ないことを上流階層で流行したためであるとするなら、ST01・02には階層差を考えることができるかもしれない。

6. 砂糖窯

香川県は近世に砂糖生産が盛んであった土地である。香川県への製糖技術の伝来には諸説あるが、1760年代であることにはほぼ間違いない。その後寛政2年（1790）に向山周慶が砂糖を製造し、技術は完成した。

SF01（第85図、図版27）

II-③西区で検出した。図面左に窯部、右に作業場がつく。削平が著しいため、基礎部のみが残る。長楕円形の窯の痕跡が2つ並び、その右中央部の窯みが焚き口で炭が濃く堆積する。焚き口左端は粘土が残り、窯前面の壁が存在したことを示している。そのまま右の作業場へとつながり、ここには焚き口からかき出された炭が薄く堆積する。断面では窯部が最も低く、作業場へと緩やかに昇る。（断面A・B）。窯や焚き口は熱で地面が硬化している（断面C）。近世陶磁器や土壺・瓦などの破片がわずかに出土している。

SF02（第86図、図版27）

III-②区で検出した。三段出口遺跡で検出した3基のうちでは最も残りがよい。SF01と構造は同じで、図面左に窯部、右に作業場がつく。窯部は円形のものが2つ並ぶ。断面Cを見ると、南側の窯は窯内面の側壁は底へと狹くなる途中で屈曲点がある。北側の窯や原間遺跡の砂糖窯との比較から、この屈曲下部に石組みが接し、壁と石組み全体で釜を受け止めるよう釜の形に似せていることになる。北側の窯は幅20cmをおいてその石組みが1段残されていた。石組み基礎は粘土で固定されている。窯の右の焚き口には炭が濃く堆積する。窯前面の壁である粘土壁がよく残る。作業場には焚き口からかき出された炭が薄く堆積する。作業場北東部には作業場へと下りる階段の残骸らしき粘土が残っていた。近世陶磁器や瓦・用途不明の鉄などの破片がわずかに出土している。

SF03（第87図、図版26）

SF02から数m離れて検出した。これもSF01と構造は同じであるが、作業場の範囲は不明瞭である。窯部は2つ並ぶ。2つとも底を石組みの範囲だけ少し掘り下げて石を据えて行く。SF02と少し工法が異なる。奥壁では石組みは2段ある。焚き口は断面Aによりその範囲が知られる。また断面Bにより窯前面の壁が存在したことが判明する。近世陶器の破片がわずかに出土している。

近世の砂糖窯は金毘羅山遺跡で1基、原間遺跡で6基を、この横断面関連で他に検出している。原間遺跡では製造者の屋敷地まで検出しており、砂糖製造の末端単位をうかがえる良好な結果が出た。区画

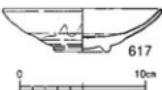
溝に囲まれた屋敷地と離れた場所に、屋根覆い付きの釜場を作り、その中に竈を築き、砂糖汁が煮詰められていた。三殿出口遺跡ではこのような状況は全く把握できなかったが、II - ③西区とIII - ②区の2ヶ所で製糖が行われていたことは明らかである。

竈の構造は、当初は竈が1つで、文化4年（1807）に向山周慶により荒釜（糖汁に石灰等を混ぜて溶解している不純物を析出させる）と揚釜（水分を十分に蒸発させる）の竈2つによる技術が導入された。また讃岐外では江戸時代に竈3つの技術があり、明治12年（1879）には香川県でも3つの竈を持つ洋竈が開発されている。原間遺跡では竈1つと2つのものを検出しており、讃岐での製糖当初より操業が行われていたことを想定できる。また2つの竈も、当初側壁屈曲部に粘土を貼り付けて釜を受けていたものが、三殿出口遺跡SF02のような石組みを持つ構造に技術革新したことが明らかにされている。三殿出口遺跡SF01～03ともこの2つの竈の新しい段階のものである。但し、詳細な年代は遺物が少ないため今回も明らかにならなかった。

7. 溝

SD01（第88図、図版17）

I - ②区で検出した。東西に直線の溝で、西で直角に折れる。深さは10cm程度で、中には礫がたくさん詰まっていた。屋敷溝かとも考えられるが、全体像を把握できないので、溝の用途は明らかでない。近世の陶磁器や土師質土器がわずかに出土した。617は肥前系陶器で、高台は削り出しで無釉。内面を蛇の目剥ぎしている。技法・釉色から17世紀末から18世紀前半の佐賀県嬉野町内野窯産と

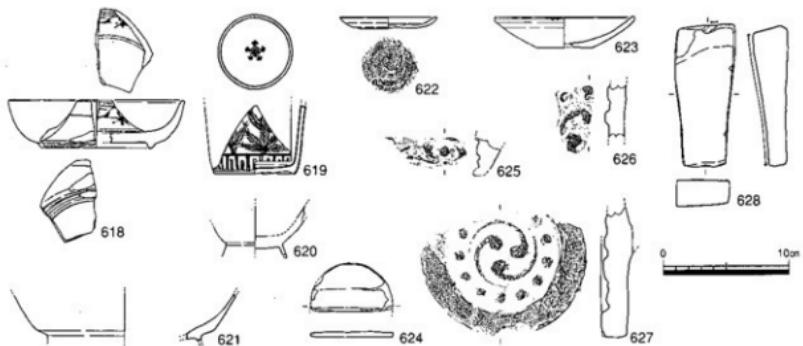


617
10cm

第88図 SD01出土遺物
実測図(1/4)



第89図 SD02出土
遺物実測図①(1/4)

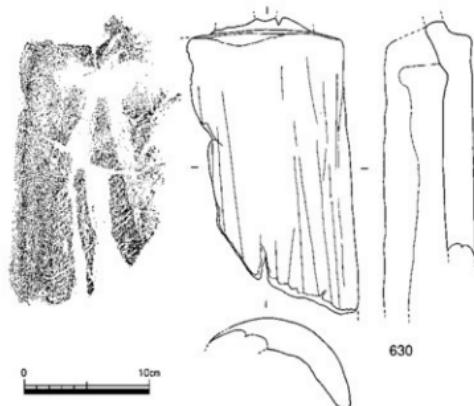


第90図 SD02出土遺物実測図②(1/4)

思われる。

SD02 (第89・90図)

I - ③区で検出した。幅広で浅い溝で、平面形は途中で鈍角に折れて山形となる。南西側の一角を区画する溝の可能性があるが、区画対象となる造構は不明である。近世の陶磁器や土釜・軒丸瓦・砥石・板材・桃か梅の種子等がコンテナ半箱程度出土した。溝に捨てられたゴミである。618は内面に草花文を描く。619は見込みに五弁の花のコンニャク印判を印している。また外底を蛇の目釉はぎしている。いずれも18世紀以降に作られた肥前系磁器である。620・621・624は漆器である。620は外面黒漆で文様がなく、内面赤漆で詳細は不明である。621は全体赤漆で文様はない。624は縁と片面に黒漆を塗っている。容器とするには素地の面にも目釘穴がなく、用途はわからない。623は京信楽焼陶器の灯明皿で、19世紀以降のものかと思われる。625は軒平瓦、626・627は三つ巴文の軒丸瓦である。627は瓦当面にキラコを使用しており、それにより18世紀以降のものと判断する。628の砥石は炭が付着している。629の杭は途中で折れたまま実測している。枝は適度に切り払っている。



第91図 SD03出土遺物実測図 (1/4)

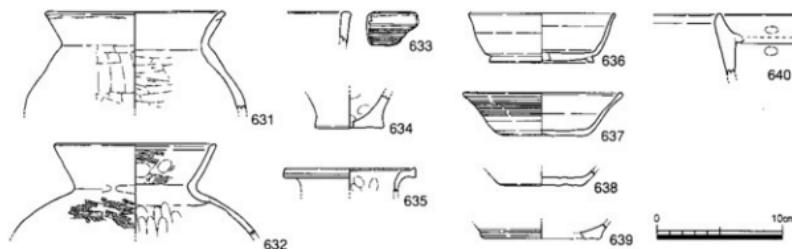
SD03 (第91図)

I - ④東区で検出した。南北方向に走る細く浅い溝である。土師器と瓦がわずかに出土した。630は丸瓦で内面にコビキ痕が残る。上端には瓦を止めるための金具を挿す穴の痕跡が残る。

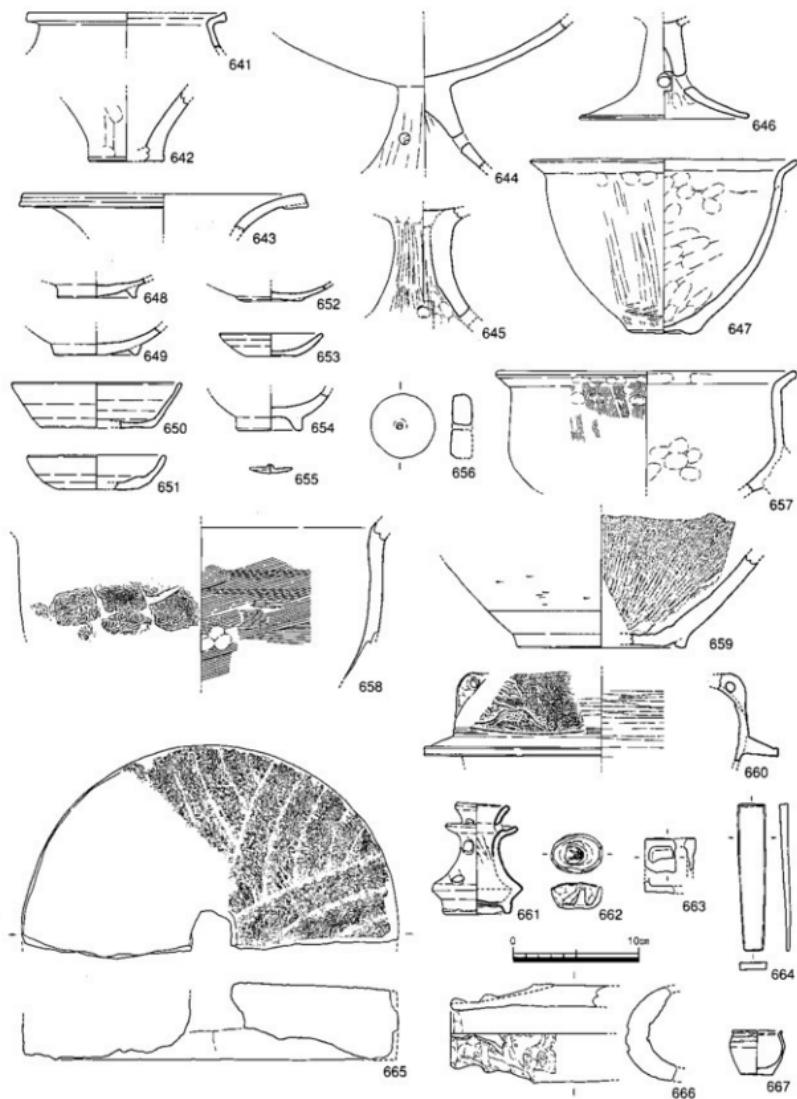
8. 川

SR01 (第92図、図版35・36)

遺跡東側の調査区一帯で検出した。トレンチを入れて部分的に流れの範囲を押さえたのみで、遺跡東に広がるた



第92図 SR01出土遺物実測図 (1/4)



第93図 包含層出土遺物実測図（1/4、644のみSK06出土遺物）

め、全容は把握していない。Ⅲ-③区トレーナでは現耕作土下で礫岩を多く含む土層を確認しており、雨水による激流であったことがわかる。またⅡ-②南・北区でも川岸から生活面に向けて広範囲に川の氾濫による土層が堆積しており、これもその激流に伴うものであると思われる。出土遺物から中世に埋没したと思われ、その埋没は激流によるものであると思われ、埋没後の上面に近世の遺構が営まれることになり、その頃には現在と同じ遺跡東外に流路が変化したようである。

631～633はⅡ-③西区部分で出土した。631・632は古墳時代前期の甕である。633は外面に沈線が多数走るため、弥生時代中期前半のものと考えたが、余り見ない口縁形態であり、弥生土器でない可能性もある。634～640はⅡ-②北区部分で出土した。634・635は弥生時代中期の土器、636は8世紀ごろ、637～640は中世の土器である。637は器壁が薄く、体部外面には板ナデ痕が明瞭に残る。

9. 包含層（第93図、図版35・37）

遺跡全体で、28ℓコンテナ20箱分の遺物が出土し、そのうち包含層出土遺物は15箱程度である。ここでも前章同様残存状況の良好なものを抽出して掲載しているが、包含層遺物のほとんどは搅乱を含めた近世の遺物であるため、掲載量はわずかである。

643は口縁外面に薄く粘土帯を貼り口縁を厚くしている。646は3方向から穿孔している。647は外面底に叩きの痕跡があり、それより上位は磨いてある。649は体部外面をヘラで刻み、高台との接合を強化している。651は底と体部の境が厚く盛り上がり、610に似る。652は薄い高台を持つ須恵器碗である。13世紀後半に綾南町陶周辺で焼かれたものと思われる。653・654は京信楽焼で、653は口縁に煤が付着した灯明皿で19世紀以降のものであろう。654は疊付を釉剥ぎしている。655はⅢ-②区で出土した外面施釉した小壺である。同じ地点の包含層から出土した667とセットになると思われる。656は紡錘車とした。時代はわからない。658は火鉢で表面が炭化物吸着による黒色を呈し、外面は磨いた後で印花文を押す。659は明石堺系のすり鉢であろう。660は茶釜で外面型成形により作られており、草花文の陽刻が入る。外面にはキラコが塗られており、鋸下と内面上半に煤が付着する。661は鉄釉の秉燭（ひょうそく）で、疊付き以外全面施釉している。把手が付き、受け皿の上に穴が2ヶ所開いている。662は灯り取りのたんころで、容器内の二又突起状の芯差し先端に火をともす芯を置く。この部分に煤が付着している。661・662とも18世紀中葉以降のものであろう。663の硯には海部の隅に薄く墨らしき痕跡が付着している。664は下がやや薄く細い。楔であろうか。665は下臼で目は8分割される。666は遺跡の南100m地点で、試掘調査時に出土したものである。繖の羽口部分である。鉄滓状のものが付着し、胎土には粗砂の他、モミ殻が多く含まれる。三段出口遺跡のものとは関係ないかもしれないが、砂糖窓に関連する可能性もあると考え掲載した。

第5節　まとめ（第73図）

前節で見てきたように、三段出口遺跡では、主に弥生時代、中世、近世の3時期の遺構を検出した。本章では、各時代の遺構をまとめることにより、遺跡全体の歴史的変遷を跡付けたい。

三段出口遺跡は遺跡面積が広い割には遺構密度が低い。広い谷を流れ下ってくる風呂川が蛇行・氾濫を繰り返し居住に不適な環境下にあったからであろう。その一端を旧風呂川とそこからの土砂氾濫層の

検出により窺うことができる。遺跡付近が居住しやすくなるのは旧風呂川が埋没し現風呂川へと流路が整えられたからであり、そのことは旧風呂川埋没面の上に近世以降の遺構が広がり、また遺跡自体近世のビットを中心とすることからわかる。

このような環境下で三殿出口遺跡には、弥生時代～近世までの遺構が認められた。ここでは、本文中で遺構を時代別に並べていない不便を補うために、各時代に属する遺構・遺物を紹介し、時代を通して三殿出口遺跡を概観する。

弥生時代

弥生時代に属する遺構は、SK05・06がある程度である。他に包含層の落ち込みとも見られるSK02～04が存在し、遺物はSR01や包含層からも見つかっている。ただし遺物出土量はわずかで竪穴住居跡などの居住を直接示す遺構もなく、この時代にあってはゴミを捨てる程度で利用価値の少ない場所であったと推測できる。土居と田面峠を結ぶ大きな谷の南側では弥生時代の集落は発見されてなく、今後三殿出口遺跡の遺構・遺物を残した集落が付近で発見される可能性がある。

古墳時代・古代

古墳時代前期の土器と8世紀代の須恵器がSR01からごくわずか出土している。いずれも集落本体は遺跡外にある。8世紀代の集落は、大内町内では原間遺跡と坪井遺跡が知られるのみで、原間遺跡の報告者は8世紀中頃を境にして原間遺跡から坪井遺跡へ集落の移動が行われたと見ている。このとおりであれば、三殿出口遺跡の8世紀の遺物は北800mにある坪井遺跡から持ち込まれた可能性がある。同じ坪井遺跡で古墳時代前期～中期の土師器がこれもわずかだが出土している。

中世

この時期の遺構には検出した2つの墓ST01・02がある。また遺物はこのほかに溝やSR01・包含層から出土している。三殿出口遺跡では近世遺物に次いで、弥生土器と共に比重が高い。ST01は火葬墓、ST02は土坑墓で、異なる葬法の墓を検出した背景は74～78頁で検討した。ST01・02の土師器については伴出遺物がなく時期判断を控えたが、包含層の須恵器碗が13世紀後半であるため、これを材料にすることができるかもしれない。

近世

上述のように環境が安定したこともあり、この時代の遺構・遺物が最も多い。時期のわかるほとんどの遺構、SK01・SE01・SF01～03・SD01～03がこの時代に属し、またSB01もこの時代の可能性がある。SE01・SD02は19世紀代、SD01も17世紀末以降で、包含層出土遺物もこの時期のものである。SF01～03もその構造上19世紀以降であるため(79頁)、19世紀になって人の住んでいないこの地に砂糖製造のために人間が移住してきたのであろう。SD01～03とSF01～03は場所が東西に離れており、居住域と砂糖生産施設を分けた原間遺跡同様の状況が想定できる。

高松藩の特産品である砂糖製造は技術が秘密にされたと思われ、そうであればこそこのような土地が移住先に選ばれたと思われる。また讃岐で砂糖製造を初めて成功させた向山周慶の出身地である淡村まで5kmもないことも、この地が選ばれ後に東讃が讃岐でも砂糖の特産地になっていった要因であろう。

第4章 自然科学調査の成果

第1節 川北遺跡出土柱材の樹種同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

川北遺跡では、掘立柱建物12棟で構成される奈良時代の集落跡が検出されている。これらの建物は、方向を揃えて配置するなどの企画性が認められた。また、識字層の存在を示す遺物も出土しており、周辺に広がる条里型地割の方向とも関連することから、律令国家との関連性が考えられている。

今回検出された掘立柱建物の柱穴の一部からは、柱材が出土している。過去に行われた調査では、宮殿・官衙などの公的機関の柱材にはヒノキやコウヤマキが選択的に利用されている。(伊東・島地, 1979; 島地ほか, 1980)。

本報告ではこれらの柱材について樹種同定を行い、掘立柱建物の用材に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、掘立柱建物の柱材から出土した柱材等22点(試料番号1~22)である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに第4表に記した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クローラル(抱木クローラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合溶液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を第4表に示す。試料番号8は、仮道管を主とすることから針葉樹材であるが、保存状態が悪く、樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹2種類(ヒノキ・カヤ)、広葉樹1種類(イスノキ)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を、以下に記す。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほとんど単独で散在し、分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、段数は5段前後。放射組織は異性II型、1~3細胞幅、1~20細胞高。従組織は独立帶状または短接線状ではなく間隔に配列する。

番号	地区	本報告書遺構名	柱穴番号	時代	用途	樹種
1	I 区	SB01(掘立柱建物跡)	SP1	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
2	I 区	SB01(掘立柱建物跡)	SP5	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
3	I 区	SB01(掘立柱建物跡)	SP8	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
4	I 区	SB01(掘立柱建物跡)	SP9	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
5	I 区	SB01(掘立柱建物跡)	SP10	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
6	I 区	SB01(掘立柱建物跡)	SP11	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
7	I 区	SB03(掘立柱建物跡)	SP2	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
8	I 区	SB03(掘立柱建物跡)	SP8	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	針葉樹
9	I 区	SB03(掘立柱建物跡)	SP12	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
10	I 区	SB04(掘立柱建物跡)	SP1	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
11	I 区	SB04(掘立柱建物跡)	SP6	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
12	I 区	SB04(掘立柱建物跡)	SP7	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
13	I 区	SB05(掘立柱建物跡)	SP4	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
14	I 区	SB05(掘立柱建物跡)	SP6	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
15	I 区	SB05(掘立柱建物跡)	SP7	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
16	I 区	SB05(掘立柱建物跡)	SP8	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
17	I 区	SB05(掘立柱建物跡)	SP9	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
18	I 区	SB05(掘立柱建物跡)	SP11	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
19	I 区	SB08(掘立柱建物跡)	SP1	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	カヤ
20	I 区	SB09(掘立柱建物跡)	SP1	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
21	I 区	SB10(掘立柱建物跡)	SP10	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	ヒノキ
22	I 区	SP06	SP24	第2章第4節各遺構説明参照	柱材	イスノキ

第4表 川北遺跡出土木材樹種同定結果

4. 考察

柱材は、不明1点、カヤ1点、イスノキ1点を除く19点がヒノキであった。本地域周辺では、これまでにも柱材などの調査で複雑管束亞属（いわゆるニヨウマツ類）、コウヤマキ等が確認されているが（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）、ヒノキがまとまって出土した例は知られていない。そのため、今回の結果は、本遺跡において柱材にヒノキを選択的に利用していた可能性が指摘できる。

柱材にヒノキを多く利用する例は、平城宮跡や大宰府史跡・御子ヶ谷遺跡等の宮殿・官衙、法隆寺などの寺院などに多く見られる（西岡・小原、1978；鶴倉、1978；伊東・島地、1979；島地ほか、1980）。この用材は、「日本書紀」の素戔鳴尊の説話とも一致している。また、平城宮のヒノキ材は、近江・丹波・伊賀等から宇治川等を利用して運ばれてきたことが、和歌などからうかがえる。これらの記述や実際にヒノキが多く利用されている結果から、宮殿・官衙の柱材にヒノキが選択的に利用されていたことが推定される。

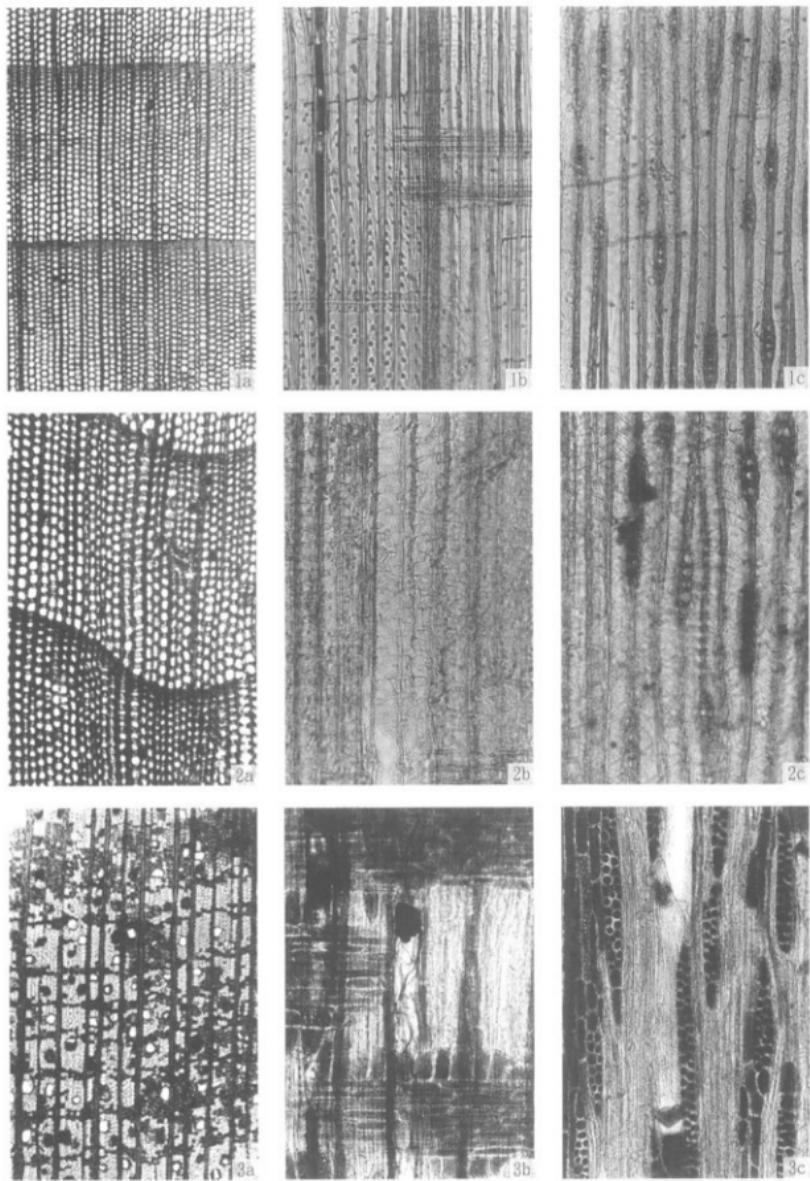
ヒノキは、樹幹が真っ直ぐに育ち、耐水性・防虫効果も高い。そのため、大型建築物の柱材としては適材であり、宮殿・官衙・寺院等に多く利用された背景として考えられる。また、同時期の堅穴住居などでは、ヒノキ材がほとんど検出されないことから、ヒノキの利用が貴族階級などに制限されていた可能性も指摘されている（満久、1983）。

これらの事例を考慮すれば、本遺跡の掘立柱建物は、特別な意味を持つ建物の可能性がある。平城宮の柱材では、ヒノキ以外にコウヤマキ、モミ属、ツガ属等の針葉樹材や、カシ類等の広葉樹材も利用さ

れている（島地ほか、1980）。そのため、今回のカヤについてもヒノキ材が足りない等の理由で、代用として利用されたことが推定される。一方、所属する建物が不明なSP24（本報告書遺構名SP06）では、唯一の広葉樹材であるイスノキが確認されており、他とは異なった用材が推定される。

引用文献

- 伊東隆夫・島地謙（1979）古代における建造物柱材の使用樹種、木材研究資料、14, p.49-76, 京都大学木材研究所。
- 溝久崇磨（1983）木のはなし、238p., 思文閣出版。
- 西岡常一・小原二郎（1978）法隆寺を支えた木、226p., NHKブックス。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1993）郡家一里屋遺跡出土木材等分析依託業務報告、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十二冊 郡家一里屋遺跡」、p.227-233, 勤香川県埋蔵文化財調査センターほか。
- 島地謙・伊東隆夫・林昭三（1980）古代における宮殿・官衙の使用樹種、古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」、p.249-260, 日本学術振興会。
- 鷗倉巳三郎（1978）わが国の古代遺跡から出土した木質遺物の樹種について、曉学園短期大学紀要、No.11, p.105-111.



1. 桧ノキ (S000 SP1)

2. 食竹 (SD08 SP1)

3. イヌノキ (SP21)

a: 立木, b: 横木, c: 斜木

200 μm : a100 μm : b, c

第94図 川北遺跡出土木材各樹種代表断面図

報告書遺構名	調査区	調査時遺構名
SB01	I 区	SB01
SB02	I 区	SB02
SB03	I 区	SB03
SB04	I 区	SB04
SB05	I 区	SB05
SB06	I 区	SB06
SB07	I 区	SB07
SB08	I 区	SB08
SB09	I 区	SB09
	I 区	SA01
SB10	I 区	SB10
SB11	I 区	SB11
SB12	I・II区	SB12
	I 区	SP18
	I 区	SP19
SA01	I 区	SP20
	I 区	SP21
	I 区	SP31
	II 区	SP03
	I 区	SP12
SP03	I 区	SP13
SP04	I 区	SP14
SP05	I 区	SP26
SP06	I 区	SP24
SP07	I 区	SP01
SK01	I 区	SK01
SK02	I 区	SK02
SK03	I 区	SK03
SK04	III区	SK01

報告書遺構名	調査区	調査時遺構名
SK05	III区	SK02
SK06	III区	SK03
SK07	III区	SK04
SK08	III区	SK05
SK09	III区	SK06
SK10	III区	SK07
SE01	IV区	SE01
SX01	III区	SX01
SX02	III区	SX02
SD01	I 区	SD01
SD02	I 区	SD02
SD03	I 区	SD03
SD04	I 区	SD04
SD05	I 区	SD05
SD06	I 区	SD06
SD07	I 区	SD07
SD08	I 区	SD08
SD09	I 区	SD09
SD10	I 区	SD10
SD11	III区	SD01
SD12	IV区	SD01
SD13	IV区	SD02
SD14	IV区	SD03
SD15	IV区	SD04
SD16	IV区	SD05
SD17	IV区	SD06
SD18	IV区	SR01
SR01	II区	SR01

第5表 川北遺跡変更遺構番号対照表

SB01	III-①南区	SB01
SP01	I-④東区	SP06
SP02	II-②北区	SP02
SP03	II-②北区	SP05
SP04	III-②区	SP01
SK01	I-④東区	SK03
SK02	II-②北区	SK03
SK03	II-②北区	SK04
SK04	II-②北区	SK05
SK05	II-②北区	SK06
SK06	II-②北区	SK07

SE01	II-②北区	SX01
ST01	I-④東区	ST01
ST02	I-④西区	SK04
SF01	II-③西区	SF01
SF02	III-②区	SF01
SF03	III-②区	SF02
SD01	I-②区	SD01
SD02	I-③区	SD01
SD03	I-④東区	SD02
SR01	II-②北区	SR01
	II-③西区	SR01

第6表 三殿出口遺跡変更遺構番号対照表

第7表 川北遺跡遺物観察表(1)

遺物番号	種別・区分	種類・基盤	遺物名	残存量	施土	色調	外面観察	内面調整	整形・調整の特徴
1	9	-	須恵器・杯	SB01 - SP2	1/8	織・普 纏・少	N8/灰白色 N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
2	9	-	須恵器・杯	SB01 - SP6	小片	織・普 纏・少	N6/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
3	9	28	須恵器・高台付杯	SB01 - SP12	1/8	織・普 纏・少	N7/灰白色	回転ナメ・ヘラ削り	外底の多くは右回り
4	9	-	須恵器・杯	SB01 - SP11	小片	織・普 纏・少	N7/灰白色	回転ナメ	無き不確定
5	9	-	須恵器・高杯	SB01 - SP3	-	中・普 纏・少	(内)N8/灰白色 (外)N7/灰白色	回転ナメ・ヘラ削り	内面沈継
6	9	-	土師器・杯	SB01 - SP6	1/8	織・普 纏・少	7.5/YR7/4E-5E/黄褐色	削減	ナメ
7	9	-	土師器・杯	SB01 - SP1	小片	織・普 纏・少	10/YR6/3E-5E/黃褐色	ナメ	内外面赤系顔料
8	9	28	土師器・杯	SB01 - SP12	小片	織・普 纏・少	7.5/YR6/6E/褐色	削き	外底へラ削り
9	9	-	土師器・杯	SB01 - SP12	小片	織・普 纏・少	5/YR5/4E-5E/褐色	回転ナメ	外底赤色顔料
10	9	-	土師器・皿	SB01 - SP3	小片	中・少	5/YR7/6E/褐色	削減	内面青文
11	9	-	土師器・皿	SB01 - SP6	1/8	織・多	10/YR8/3E/淡黄褐色	削減	内外面赤色顔料
12	9	-	土師器・皿	SB01 - SP6	小片	織・少	10/YR8/3E/淡黄褐色	削ナメ	内外面赤色顔料
13	10	28	須恵器・杯	SB02 - SP7	小片	中・少	2.5/YR6/6E/褐色	削き・粘着	内面赤色顔料
14	10	-	須恵器・高台付杯	SB02 - SP7	底1/8	織・普 纏・少	N8/灰白色	回転ナメ・ヘラ削り	外底多くは左削り
15	10	-	須恵器・盃	SB02 - SP12	小片	精良	N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
16	11	-	土師器・杯	SB03 - SP5	2/8	金茎母 織・普 纏・少	2.5/YR5/6E/褐色	横ナメ・静止ヘラ削り	横ナメ
17	12	-	須恵器・平蓋	SB04 - SP6	小片	N8/灰白色	回転ナメ	回転ナメ	杯と並ね焼き?
18	12	-	須恵器・杯	SB04 - SP2	1/8	織・普 纏・少	N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
19	12	-	土師器・杯	SB04 - SP8	小片	織・普 纏・少	10/YR7/3E-5E/黄褐色	ナメ・削減	内面沈継
20	13	-	七輪器・高杯	SB05 - SP7	-	織・普 纏・少	7.5/YR8/3E/淡黄褐色	削減	絞り目
21	14	-	須恵器・杯	SB06 - SP1	小片	織・普 纏・少	N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
22	16	-	土師器・杯	SB08 - SP2	1/8	中・少	10/YR6/4E-5E/黄褐色	削減	内面沈継
23	17	-	須恵器・杯	SB09 - SP2	小片	織・少	N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
24	17	-	土師器・皿	SB09 - SP2	4/8	織・少	7.5/YR7/4E-5E/褐色	削ナメ	複合面で削減
25	18	-	須恵器・杯	SB10 - SP16	3/8	織・少	N8/灰白色	回転ナメ	回転ナメ
26	18	-	須恵器・杯	SB10 - SP23	小片	精良	(内)7.5/YR7/4E-5E/黄褐色	回転ナメ	回転ナメ
27	18	-	土師器・杯	SB10 - SP16	1/8	中・普 纏・少	(外)YR6/6E/褐色	削減	削減
28	18	28	須恵器・壺	SB10 - SP22	3/8	織・普 纏・少	N8/灰白色	回転ナメ・平打引き・板ナメ	回転ナメ・当チ具頭
29	21	-	須恵器・盃	SA01 - ST20	2/8	中・少	N8/灰白色	回転ナメ・器底器身・沈継 リ・指真珠	回転ナメ・ヘラ削り
30	21	-	須恵器・平瓦	SA01 - ST21	-	精良	3Y8/灰白色	板ナメ・削り	板ナメ・削り

第8表 川北遺跡遺物観察表(2)

遺物 番号	種類 固版	種類・属性	遺構名	候存量	施土	色調	外面調整	内面調整	整形・調整の特徴
31	24 1,28	骨頭・骨器・角	SDP01	1/8	較密	(赤土)25/5/1黄灰色 (赤)10YR 2/2+/-灰黑色	回転ナダ・系切り	回転ナダ	全面磨耗
32	26	- 頸部器・骨壺	SDP04	小片	粗・昔	(内)N6/灰白色 (外)N5/灰色	回転ナダ	回転ナダ	
33	26	- 頸部器・骨壺	SDP04	1/8	細・昔	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
34	26	- 頸部器・骨壺	SDP04	小片	細・少	N5/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
35	26	- 頸部器・高台付	SDP04	高台 5/8	中・昔	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	外底へタ記号
36	26	- 弦生土器・壺	SDP05	底5/8	中・昔	25/8/1灰白色	輪毛目・ナダ	ナダ	
37	26	- 頸部器・壺	SDP06	2/8	粗・多	N6/灰黑色	回転ナダ・ヘタ切り	回転ナダ	
38	26	- 頸部器・壺	SDP03	小片	粗・少	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
39	26	- 弦生土器・体	SDP02	小片	中・多	(95)7/5/3R/25灰黑色	剥離	剥離	剥離不確定
40	27	- 頸部器・壺	SK002	1/8	稍負	N8/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	外周自然物
41	27	- 頸部器・壺	SK002	1/8	粗・少	N7/灰白色	回転ナダ・ヘタ切り	回転ナダ	
42	28	- 頸部器・壺	SK003	-	粗・少	N7/灰白色	回転ナダ・ヘタ削り	回転ナダ	
43	28	- 頸部器・高台付	SK003	2/8	微・昔	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
44	28	- 土器器・壺	SK003	小片	微・少	7/5/7/4R/6灰色	剥離	剥離	口縁内面少し厚い
45	39	- 頸部器・高杯	SD003	-	粗・少	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
46	39/28	- 土器器・壺	SD003	2/8	粗・昔	25/7/3R/3灰色	横ナダ・ヘタ削り・板ナダ	ナダ・斜文	内面磨文
47	39	- 土器器・壺	SD03	小片	粗・昔	(95)10YR 4/2-5/-灰・黃褐色	削減	削減・鋸目	
48	39	- 土器器・壺	SD03	小片	粗・多	JOYR 3/1-5/-灰・黃褐色	剥離・削減・削毛目?	剥離・削減	
49	41	- 頸部器・壺	SD04	1/8	粗・少	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
50	41	- 頸部器・高杯	SD04	2/8	微・少	(内)N7/灰白色/外)N6/灰黑色	回転ナダ	回転ナダ	
51	41	- 土器器・高杯	SD04	2/8	稍負	N5/灰黑色	回転ナダ	回転ナダ	
52	41	- 土器器・壺	SD04	小片	5YR6/6灰色	-	ナダ・削離痕	ナダ	
53	41	- 瓷石	SD04	-	25/8/1灰白色	-	-	-	
54	40	- 頸部器・骨壺	SD05	8/8	中・昔	N6/灰黑色	回転ナダ・回転ナダ削り	回転ナダ	研ぎ面薄しく削減
55	40/29	頸部器・骨壺	SD05	8/8	中・少	N8/灰白色	回転ナダ・ヘタ削り	回転ナダ	
56	40	- 頸部器・骨壺	SD05	1/8	中・多	N6/灰黑色	回転ナダ	回転ナダ	内外面仄くぶり。
57	40	- 頸部器・骨壺	SD05	小片	粗・昔	N7/灰白色	回転ナダ・ヘタ削り	回転ナダ	口縁端重ね焼痕
58	40/29	頸部器・壺	SD05	4/8	微・少	N7/灰白色	回転ナダ・ヘタ削り	回転ナダ	内面自然物
59	40	- 頸部器・壺	SD05	1/8	中・少	N7/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
60	40	- 頸部器・高杯	SD05	2/8	中・昔	N6/灰黑色	回転ナダ	回転ナダ	磨滅・削離ナダ
61	40	- 頸部器・高杯	SD05	购1/8	中・少	N6/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	
62	40	- 頸部器・高杯	SD05	1/8	粗・少	N6/灰白色	回転ナダ	回転ナダ	

第9表 川北過熱地帯植物観察表(3)

調査番号	種名	固有名	種類・特徴	通称名	植生層	植生量	地土	色調	外斑調整	内斑調整	整形・調整の特徴
63	40 -	須毛器・平瓶	S005	-	3/8	微・普	N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	外面下半に自然輪
64	40 -	須毛器・平瓶	S005	-	-	精良	N7/灰白色	板ナデ	回転ナデ	回転ナデ	外面下半に自然輪
65	40 -	須毛器・壺	S005	-	-	粗・少	(9)5YR6/6褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	外面下半に自然輪
66	40 -	土師器・壺	S005	-	-	液・少	(9)10YR7/34-56-57黄褐色	板ナデ・割目	板ナデ・割目	板ナデ・割目	内面彫文
67	40 -	土師器・壺	S005	-	3/8	粗・普	5YR7/41-56-57褐色	割目・鋸毛目?	割目・鋸毛目?	割目・鋸毛目?	内面彫文
68	40 -	土師器・壺	S005	-	2/8	粗・多	(9)10YR7/44-56-57褐色	削減	削減	削減	削減
69	40 -	土師器・壺	S006	-	1/8	中・普	5YR7/41-56-57褐色	楊ナデ	楊毛目	楊ナデ	楊頭楓
70	40 -	土師器・壺	S005	-	2/8	中・多	10YR8/35-36-37褐色	削減	削毛目	削毛目	削毛目
71	40 -	土師器・壺	S005	-	1/8	中・多	(9)10YR7/44-56-57褐色	ナデ・楊頭楓	ナデ・楊頭楓	ナデ・楊頭楓	ナデ・楊頭楓
72	42 -	弘生土器・林	S006	-	底8/8	中・粗	10YR8/35-36-37褐色	削減	削減	削減	削減・指ナデ
73	42 -	須毛器・杯蓋	S006	-	小片	液・少	(4)10YR7/40-56-57灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
74	42 -	須毛器・杯	S006	-	1/8	粗・少	10YR7/40-56-57灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
75	42 -	須毛器・杯	S006	-	小片	微・普	N6/灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
76	42 -	須毛器・杯蓋	S006	-	小片	微・少	N6/灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
77	42 -	須毛器・杯蓋	S006	-	-	微・普	(9)10YR8/35-36-37褐色	回転ナデ・圓輪ヘタ削り?	回転ナデ	回転ナデ	外面彫吸巻?
78	42 -	須毛器・杯蓋	S006	-	1/8	粗・少	5YR7/40-56-57褐色	回転ナデ・ヘタ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
79	42 -	須毛器・杯蓋	S006	-	3/8	粗・少	N6/灰色	回転ナデ・ヘタ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
80	42 -	須毛器・高台付杯	S006	-	底2/8	微・少	N8/灰白色	削減・圓輪ヘタ削り	削減	削減	削減
81	42 -	須毛器・高台付杯	S006	-	底2/8	微・少	(9)N5/灰色(外)N4/灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
82	42 -	須毛器・高台付杯	S006	-	底2/8	微・少	N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
83	42 -	須毛器・高台付杯	S006	-	小片	粗・少	N5/灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
84	42 -	須毛器・高台付杯	S006	-	底4/8	粗・多	5YR7/40-56-57褐色	回転ナデ・ヘタ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
85	42 -	須毛器・林	S006	-	小片	微・普	5YR7/40-56-57褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
86	42 -	須毛器・林	S006	-	底8/8	中・普	N7/灰白色	回転ナデ・ヘタ削り	ナデ	ナデ	ナデ
87	42 -	土師器・罐	S006	-	1/8	中・普	(9)10YR7/40-56-57褐色	鋸毛目	鋸毛目	鋸毛目	鋸毛目
88	44 -	須毛器・杯	S008	-	2/8	粗・少	N8/灰白色	回転ナデ・ヘタ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
89	44 -	須毛器・杯	S008	-	1/8	微・少	N6/灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
90	44 -	須毛器・杯	S008	-	1/8	粗・多	N6/灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
91	44 -	須毛器・杯	S008	-	2/8	中・普	5Y8/10K白色	削減・圓輪ヘタ削り	削減	削減	削減
92	44 -	須毛器・杯蓋	S008	-	1/8	中・少	N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
93	44 -	須毛器・杯蓋	S008	-	1/8	粗・少	(9)10YR7/40-56-57褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
94	44 -	須毛器・杯	S008	-	小片	粗・普	(9)10YR8/35-36-37褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ

第10表 川北遺跡遺物觀察表(4)

測定番号	番号	種類・基準	測定名	純度	純度	純度	外観調整	内面調整	整形・調整の特徴
95	44	- 痘虫器・杯	SD008	底3/8	細・少	N7/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	96と同一個体?
96	44	- 痘虫器・杯	SD008	底2/8	細・昔	N6/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	95と同一個体?
97	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	2/8	中・少	N7/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
98	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	3/8	中・昔	N5/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
99	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	底6/8	中・多	2.5/7/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
100	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	1/8	細・昔	2.5/8/灰白色	滑減	滑減	
101	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	底2/8	細・少	1.9/2.5/7/灰白色	滑減・回転ナダ ナダ	外面調査 回転ナダ ナダ	
102	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	底7/8	粗・少	N6/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	ヘタ切り
103	44	29 痘虫器・高台付杯	SD008	5/8	中・昔	(内)2.5/7/1灰白色 (外)2.5/7/1灰白色	滑減・回転ナダ ナダ	滑減・回転ナダ ナダ	
104	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	1/8	細・少	N6/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
105	44	- 痘虫器・高台付杯	SD008	底2/8	中・多	N6/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	ヘタ割りの部分は左回り
106	44	- 痘虫器・臺	SD008	1/8	細・昔	N7/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	内面自然輪
107	44	29 痘虫器・平板	SD008	-	中・少	N7/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	外底近くへ割り一端
108	44	- 痘虫器・壺	SD008	小片	細・昔	(内)N6/灰黑色(外)N7/灰白色	回転ナダ ナダ	指頭痕・ナダ ナダ	
109	44	30 痘虫器・壺	SD008	2/8	簡・少	N7/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
110	44	- 土陶器・輪	SD008/09	底1/8	細・昔	(内)1.7/5/8/7/4/5/6/暗褐色 (外)1.7/5/8/4/5/6/暗褐色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
111	44	- 土陶器・杯	SD008	小片	中・昔	5Y8/灰白色	滑減	滑減	
112	44	- 十字器・杯	SD008	小片	細・少	7.5/FR8/4/5/黃褐色	ナダ ナダ	ナダ ナダ	
113	44	- 土陶器・杯	SD008	小片	細・少	2.5/FR6/8/褐色	滑減	滑減	
114	44	- 洋生土器・壺	SD008	1/8	中・昔	2.5/FR6/8/褐色	滑減・漏毛目・漏縫	滑減	
115	44	- 土陶器・壺	SD008	1/8	中・昔	7.5/FR6/3/-/暗褐色	滑減	滑減	
116	44	- 土陶器・壺	SD008	-	粗・多	2.5/FR6/6/暗褐色	指頭痕・指ナダ ナダ	滑減	
117	44	- 土陶器・壺	SD008	-	中・多	5Y8/7/6/暗褐色	ナダ ナダ	ナダ ナダ	
118	45	- 痘虫器・高台	SD009	小片	細・昔	(内)N7/灰白色(外)N5/灰白色	ヘタ割り・回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
119	45	- 痘虫器・高台付杯	SD009	底1/8	細・昔	N7/灰白色	滑減・ナダ ナダ	滑減・ナダ ナダ	
120	45	- 痘虫器・高台付杯	SD009	小片	中・昔	N8/灰白色	回転ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	
121	45	- 痘虫器・高台	SD009	底1/8	少	N7/灰白色	滑減	滑減	
122	45	- 洋生土器・鉢	SD009	-	中・多	(内)15/Y8/6/6/暗褐色 (外)15/Y8/3/-/暗褐色	滑減・板ナダ・ナダ ナダ	滑減・板ナダ・ナダ	
123	45	- 土陶器・壺	SD009	小片	細・昔	(内)10/Y8/7/3/-/暗褐色 (外)10/Y8/3/-/暗褐色	滑減・漏毛目	漏毛目・漏減	
124	45	- 痘虫器・高台付杯	SD10	4/8	細・多	N8/灰白色	回転ナダ・ヘタ切り・ナダ ナダ	回転ナダ ナダ	

第11表 川北遺跡遺物觀察表(5)

遺物 番号	種別 回版	種類・若様	遺構名	埋存量	土色	外函調査	内函調査	多形・複数の特徴
125 45	-	須恵器・盃	SD10	底3/8 底2/8	黒・青 N6/灰色 N8/灰色	回版ナダ	回版ナダ	内底に径7cmの円形の灰小ぶり
126 45	-	須恵器・高杯	SD10	-	(内)10YR5/28E白	回版ナダ	回版ナダ	絞り目・回版ナダ
127 45	-	弦生土器・林	SD12	1/8	中・青 (外)10YR7/21-5灰・青褐色	ナダ・平印彫	研毛目・ナダ・ヘラ削り	
128 47	-	弦生土器・盃	SD17	1/8	中・青 (内)2.5Y7/25E青色(外)2.5Y7/1灰白色	ナダ・折頭傾・ナダ	研ナダ	
129 47	-	弦生土器・盃	SD17	1/8	中・多 (内)10YR7/21-5灰・青褐色	研磨	研磨	削減
130 49	-	弦生土器・甕	SD18	1/8	中・青 (内)10YR5/28E青褐色	研頭傾	研頭傾	削減・焼き?
131 49	-	土師器・甕	SD18	2/8	中・少 (内)10YR7/21-5灰・青褐色	研頭傾・研毛目	研毛目	
132 49	29	土師器・甕	SD18	4/8	中・青 底8/8	ナダ・研減・研毛目 2.5Y7/25E青色 2.5Y7/3灰黄色	ナダ・研減・研毛目	外面下半に縦
133 49	-	弦生土器・甕	SD18	1/8	中・青 底8/8	ナダ・研毛目・ナダ	研ナダ	
134 49	-	弦生土器・甕	SD18	1/8	中・青 底8/8	ナダ・研頭傾	研頭傾	
135 49	-	弦生土器・甕	SD18	1/8	中・多 2.5Y7/25E青褐色	研毛目・研毛目	研毛目	削減・研毛目
136 49	-	弦生土器・盃	SD18	1/8	中・青 底8/8	ナダ・研毛目 2.5Y7/25E青色 2.5Y7/3灰黄色	ナダ・研毛目	
137 49	-	弦生土器・甕	SD18	1/8	中・青 底8/8	ナダ・研頭傾	研頭傾	底部わざか
138 49	-	弦生土器・林	SD18	1/8	中・青 底8/8	ナダ・研頭傾 研毛目・ナダ・指頭板	指頭板・ナダ・指頭板	
139 49	-	弦生土器・高杯	SD18	1/8	中・青 底8/8	ナダ・研頭傾 研毛目・ナダ	研頭傾・ナダ	
140 53	-	土師器・瓶	SR01	1/8	細・少 5YR7/41-5灰・青褐色	回版ナダ	回版ナダ	141と同一物体?
141 53	-	土師器・瓶	SR01	小片	細・少 5YR7/41-5灰・青色	回版ナダ	回版ナダ	140と同一物体?
142 53	-	土師器・陶	SR01	小片	2.5Y8/1灰白色	回版ナダ	回版ナダ	
143 53	-	瓦器・陶	SR01	底1/8	(内)N4/4灰色(外)N7/灰白色	ナダ・指頭傾	ナダ・指頭傾	
144 53	-	土師質・盃	SR01	-	中・青 10YR6/31-5灰・青褐色	指頭傾・ナダ	指頭傾・ナダ	
145 53	30	須恵質・平丸	SR01	-	中・青 N5/灰色	板ナダ	板ナダ	
146 53	30	木器・板	SR01	-	-	-	-	
147 53	30	木器・板	SR01	-	-	-	-	
148 53	30	木器・板	SR01	-	-	-	-	
149 53	30	木器・板	SR01	-	-	-	-	
150 53	30	木器・板	SR01	-	-	-	-	
151 54	-	須恵器・杯蓋	1区包含物H7	小片	N5/灰色 N7/灰白色	回版ナダ・ヘラ削り	回版ナダ	口縁内面に金槌き痕
152 54	-	須恵器・杯蓋	1区包含物H7	2/8	中・多 5YR6/6灰色	回版ナダ	回版ナダ	回版ナダ
153 54	-	須恵器・高台付杯	1区包含物H8	底1/8	鐵・少 サスカ	-	-	鉄は切り払っていない
154 54	-	石鏡	1区包含物H8	-	サスカ イット	-	-	鉄皮一部残す。柱は全部私う
155 54	-	須恵器・杯	1区包含物H8	小片	N6/灰色	回版ナダ	回版ナダ	重畠20g
156 54	-	須恵器・高台付杯	1区包含物H8	底3/8	N6/灰色	回版ナダ・ナダ	回版ナダ	
157 54	-	須恵器・高台付杯	1区包含物H8	小片	N6/灰色	回版ナダ・ヘラ削り	回版ナダ	
158 54	-	須恵器・盃	1区包含物H9	底4/8	精良 N7/灰白色	回版ナダ	回版ナダ	外側上半と内側底に自然

第12表 川北遺跡遺物類別表(6)

遺物 種類 番号	団版	種類・器種	遺物名	経年量	施土	色調	外觀調整	内面調整	整形・調整の特徴
159 54	-	弦生土器・甕	I区包含層H8	小片	埋・多 細・少	(94)10YR7/34;5N15A;黃褐色 (95)10YR6/41;5N15A;黃褐色	削減	削減	
160 54	-	須恵器・杯透	I区包含層H8	小片	細・少 N6灰赤		回転ナメ	回転ナメ	
161 54	-	須恵器・杯透	I区包含層H8	輪片	細・少	N6灰赤	回転ナメ	回転ナメ・ナメ	
162 54	-	須恵器・杯透	I区包含層H8	輪片	細・少	N6灰赤	回転ナメ	回転ナメ	
163 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層H8	輪片	細・少	N6灰赤	回転ナメ	回転ナメ	
164 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層H8	輪片	細・少	25G5YS/14T9;灰色	回転ナメ	回転ナメ	
165 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層H8	輪片	細・普	N7灰白色	回転ナメ	回転ナメ	
166 54	-	須恵器・盃	I区包含層H8	小片	細・普	N6灰赤	回転ナメ	回転ナメ	
167 54	30	須恵器・円筒鏡	I区包含層H8	輪片	多	N5灰赤	回転ナメ	回転ナメ	外面自然施
168 54	-	土陶器・杯	I区包含層H8	輪片	中・少	(94)10YR6/41;5N15A;黃色 (95)5YR6/41;5N15A;黃色	削減	削減	
169 54	-	黑色土器A柄・柄	I区包含層H8	輪片	細・普	(94)10YR7/42;5N15A;黃褐色 (95)10YR7/42;5N15A;黃褐色	削減	削減	
170 54	-	弦生土器・透	I区包含層G8	輪片	中・多	(94)10YR6/6橙色 (95)10YR7/41;5N15A;黃褐色	削減・輪ナメ?	削減	回転ナメ
171 54	-	須恵器・杯	I区包含層G8	輪片	細・少	N6灰赤	回転ナメ	削減	
172 54	-	土陶器・杯	I区包含層J9	輪片	細・少	5YR7/41;5N15A;黃褐色	削減・輪ナメ?	削減	
173 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	小片	細・少	N6灰赤	回転ナメ・ヘラ切り	回転ナメ	杯?
174 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	小片	細・少	N6灰赤	回転ナメ・ヘラ切り	回転ナメ・ヘラ切り	回転ナメ
175 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	少	N6灰赤	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ
176 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	細・多	(94)5YR6/10明青灰色	回転ナメ	回転ナメ	上面天然かぶり
177 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	細・普	5YR6/14朱色	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ
178 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	細・多	N8灰白色	回転ナメ・回転ヘラ削り	回転ナメ・削減	
179 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	細・普	N8灰白色	削減・回転ヘラ削り	削減	
180 54	-	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	中・普	N7灰白色	回転ナメ・ヘラ削り	回転ナメ・ヘラ削り	回転ナメ・ナメ
181 54	31	須恵器・杯透	I区包含層J9	輪片	中・普	N7灰白色	回転ナメ・ヘラ削り	回転ナメ・ヘラ削り	回転ナメ
182 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層J9	輪片	粗良	N7灰白色	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ
183 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層J9	輪片	細・少	(94)N7灰白色 (95)5YR6/10明青灰色	回転ナメ	回転ナメ	
184 54	31	須恵器・高台付杯	I区包含層J9	輪片	細・普	5YR6/14朱色	回転ナメ・ヘラ切り	回転ナメ	
185 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層J9	輪片	細・多	N6灰赤	回転ナメ・ヘラ削り	回転ナメ・ヘラ削り	内面自然施
186 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層J9	輪片	細・多	N6灰赤	回転ナメ・ヘラ削り	回転ナメ	回転ナメ
187 54	-	須恵器・ハリカ	I区包含層J9	輪片	普	N7灰白色	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ
188 54	-	須恵器・高台付杯	I区包含層J9	輪片	中・普	N6灰赤	回転ナメ	回転ナメ	

第13表 川北道跡遺物觀察表(7)

遺物 番号	種因 因版	種属・若種	遺物名	保存品	胎土	色調	外面調整	内面調整	整形・調整の特徴
189 54	-	須恵器・高杯	1区包含留9	2/8	中・普 細・普	N7/灰白色 N6/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
190 54	-	須恵器・高杯	1区包含留9	小片	-	-	回板ナダ	回板ナダ	
191 54	-	須恵器・高杯	1区包含留9	1/8	粗・普	N6/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
192 54	-	須恵器・高杯	1区包含留9	1/8	中・多 粗・普	N6/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
193 54 31	須恵器・高	1区包含留9/10	-	中・普	N6/灰白色	底灰・深灰・回板ナダ ナダ	指頭側・回板ナダ	内底自然輪	
194 54	-	須恵器・高	1区包含留9	小片	粗・多	N7灰白色	回板ナダ	回板ナダ	内面灰かぶり
195 54	-	須恵器・高	1区包含留9	小片	粗・少	N8灰白色	底灰・当具柄	底灰・当具柄	
196 54	-	土師器・瓶	1区包含留9	底3/8	粗・普	5Y7S/6灰本削色	磨減	磨減	
197 54	-	黑色土器A刷・楕	1区包含留9	底2/8	粗・少	(内)2.5/4/1灰灰色 (内)7.5/8R8/3浅黄褐色	磨減	磨減	
198 54	-	土師器・杯	1区包含留9	3/8	中・普	5Y16S/6棕色	磨減	磨減	
199 54 31	須恵器・平瓦	1区包含留9	-	粗・普	N6/灰白色	ヘク削り・板ナダ	右目直	右目直	
200 54 31	土師質・平瓦	1区包含留9	-	中・普	10YR8/3浅黄褐色	ナダ・ヘク削り	右目直	右目直	斜削輪廻2.5cm。 斜めに斜切削
201 55	-	須恵器・杯蓋	1区包含留9	2/8	精良	N6/灰白色	ヘク削り・回板ナダ	回板ナダ	
202 55	-	須恵器・杯蓋	1区包含留9	1/8	精良	N6/灰白色	回板ナダ削り・回板ナダ	回板ナダ	
203 55	-	須恵器・杯蓋	1区包含留9	小片	粗・普	N6/灰白色	回板ナダ・ヘク削り	回板ナダ	
204 55	-	須恵器・杯蓋	1区包含留9	1/8	粗・普	N7灰白色	回板ナダ削り・回板ナダ	回板ナダ	
205 55	-	須恵器・高台杯	1区包含留9	底2/8	精良	N6/灰白色	回板ナダ・ヘク削り	回板ナダ	
206 55	-	須恵器・高台杯	1区包含留9	小片	粗・少	N5/灰白色	回板ナダ・ヘク削り	回板ナダ	
207 55	-	須恵器・高	1区包含留9	2/8	粗・普	N6/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
208 55	-	須恵器・杯	1区包含留9	底1/8	粗・普	(内)N4/灰白色(外)N7/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
209 55	-	須恵器・豆	1区包含留9	3/8	粗・少	N6/灰白色	回板ナダ・叩き・ナダ	回板ナダ	火ぶくれが多いある
210 55	-	須恵器・豆	1区包含留9	小片	精良	(内)N7/灰白色(外)N6/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	注不確定
211 55	-	須恵器・豆	1区包含留9	小片	粗・少	5Y16/6棕色	磨減	磨減	外面赤色端斜?
212 55	-	土師器・豆	1区包含留9	底1/8	中・少	7.5YR7/6棕色	磨減	磨減	
213 55	-	土師器・豆	1区包含留9	小片	中・少	(内)7.5YR6/12-15-6棕色	ナダ	ナダ	
214 55 32	土師器・杯	1区包含留9	小片	中・少	(94)7.5YR7/41-45-6棕色	ナダ	ナダ	重削17.3kg	
215 55	-	土師質・特殊土器	1区包含留9	小片	粗・多	5Y18S/2灰白色	-	-	
216 55	13	負器・剪刀?	1区包含留9	-	鉢	-	回板ナダ	回板ナダ	
217 55	-	須恵器・杯蓋	1区包含留9	4/8	精良	N6/灰白色	回板ナダ	回板ナダ	外画灰かぶり
218 55	-	須恵器・杯蓋	1区包含留9	小片	精良	(内)D86/4灰白色 (内)D86/4灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
219 55	-	須恵器・杯	1区包含留9	2/8	微・少	5Y7/1灰白色	回板ナダ	回板ナダ	
220 55	-	須恵器・杯	1区包含留9	底1/8	粗・少	N8/灰白色	磨減・ヘク切り	磨減	

第14表 川北道路遺物觀察表(8)

遺物 番号	神社 固版	種類・差連	遺物名	残存量	施土	色調	外觀調整	内面調整	整形・調整の特徴
221	55	- 須忠器・杵	I区合金器G9	小片	繩・普	N7灰白色	回版ナデ	回版ナデ	
222	55	- 須忠器・萬古竹杯	I区合金器G9	瓶・灰	繩・良	N5灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	回版ナデ
223	55	- 須忠器・萬古竹杯	I区合金器G9	瓶・灰	繩・良	N5灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り・ナダ	回版ナデ	回版ナデ
224	55	- 須忠器・萬古竹杯	I区合金器G9	瓶・灰	繩・良	N5灰灰色	磨減	磨減	
225	55	32 須忠器・杵	I区合金器F9	瓶・多	7.5灰白色	N8灰白色	回版ナデ	回版ナデ	348と同一個体?
226	55	- 須忠器・劍	I区合金器F9	瓶・多	7.5灰白色	N8灰白色	回版ナデ	回版ナデ	内面灰かぶり
227	55	32 十輪器・劍	I区合金器G9	小片	繩・普	N7灰白色	磨減	磨減	内面赤色顔料?
228	55	- 土師器・壺	I区合金器G9	小片	繩・少	(内)7.5灰白色	磨減	磨減	228=230は同一個体?
229	55	- 土師器・壺	I区合金器G9	小片	繩・少	(内)7.5灰白色	磨減	磨減	
230	55	- 土師器・壺・管状土器	I区合金器G9	小片	繩・少	7.5灰白色	磨減	磨減	
231	55	- 土師質・管状土器	I区合金器G9	小片	繩・少	7.5灰白色	磨減	磨減	重價17.2K
232	55	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	瓶・少	繩・普	N6灰灰色	回版ナデ・回版ナデ削り	回版ナデ	
233	55	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	小片	繩・普	N6灰灰色	回版ナデ	回版ナデ	
234	55	- 須忠器・杵	I区合金器J10	小片	繩・普	N6灰灰色	回版ナデ	回版ナデ	
235	55	- 須忠器・杵	I区合金器J10	小片	繩・普	N8灰白色	回版ナデ	回版ナデ	
236	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	6/8	繩・少	N7灰白色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ・ナダ	ろくろうは右切り
237	56	31 須忠器・杵壺	I区合金器J10	4/8	繩・普	N7灰白色	回版ナデ・ナダ・ヘタ削り	回版ナデ	外面部自然輪
238	56	31 須忠器・杵壺	I区合金器J10	6/8	繩・少	N6灰灰色	回版ナデ	回版ナデ	
239	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	1/8	繩・少	N7灰白色	回版ナデ	回版ナデ	
240	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	2/8	中・少	N7灰白色	回版ナデ	回版ナデ	上面灰かぶり
241	56	31 須忠器・杵壺	I区合金器J10	3/8	中・普	N6灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り・ナダ	回版ナデ	上面灰かぶり
242	56	31 須忠器・杵壺	I区合金器J10	4/8	中・少	N6灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	
243	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	1/8	中・普	(内)N6灰灰色(外)N5灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	
244	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	1/8	繩・普	N7灰白色	回版ナデ・ヘタ削り・回版ナデ	回版ナデ	
245	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	小片	中・少	N5灰灰色	回版ナデ	回版ナデ	
246	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	1/8	中・普	N6灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	
247	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	4/8	繩・普	N6灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り・ナダ	回版ナデ・ナダ	
248	56	- 須忠器・杵壺	I区合金器J10	2/8	中・少	N6灰灰色	回版ナデ	回版ナデ	
249	56	32 須忠器・杵壺	I区合金器J10	7/8	繩・普	N8灰白色	回版ナデ	回版ナデ	回版ナデ・削減
250	56	32 須忠器・杵壺	I区合金器J10	6/8	中・普	N6灰灰色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ・ナダ	
251	56	- 須忠器・杵	I区合金器J10	1/8	繩・少	N7灰白色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	
252	56	- 須忠器・杵	I区合金器J10	高・少	繩・少	N7灰白色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	茎毛
253	56	- 須忠器・杵	I区合金器J10	2/8	繩・少	N7灰白色	回版ナデ・ヘタ削り	回版ナデ	内面自然輪

第15表 川北道路遺物観察表(9)

遺物 番号	仲田 回版	種類・器種	遺構名	残存量	土	色調	外面跡證	内面調整	形状・調整の特徴
254	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	1/8	精良	N7/灰白色	到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ	
255	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	1/8	粗・普	N5/灰白色	到板ナデ・板ナデ	到板ナデ	底板を丁寧に調整
256	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	2/8	粗・多	(内)DyR7/3に古い青紫色 (外)N7/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
257	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	3/8	中・普	5YR8/1灰白色	磨滅	磨滅	
258	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	2/8	中・普	N8/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
259	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	小片	粗・普	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
260	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	1/8	精良	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
261	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	小片	粗・普	N7/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
262	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	3/8	中・普	N6/灰白色	到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ	
263	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	底1/8	中・普	N8/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
264	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	小片	粗・普	(内)N7/灰白色(外)N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	外面自然輪
265	56	- 須忠器・高台付杯	1区包含物10	小片	粗・普	N8/灰白色	到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ・ナデ	
266	56	- 須忠器・皿	1区包含物10	1/8	精良	N7/灰白色	到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ	
267	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	2/8	粗・少	N7/灰白色	到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ	
268	56	31 須忠器・高杯	1区包含物10	1/8	粗・普	N7/灰白色	到板ナデ	到板ナデ・ナデ	
269	56	- 須忠器・高杯	1区包含物10	2/8	粗・普	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
270	56	- 須忠器・高杯	1区包含物10	1/8	粗・普	N6/灰白色	到板ナデ・ナデ	到板ナデ	
271	6	- 須忠器・高杯	1区包含物10	2/8	粗・普	N7/灰白色	到板ナデ・磨滅	到板ナデ	
272	56	- 須忠器・高杯	1区包含物10	底4/8	粗・普	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	集合場の點上にはみ出る
273	56	- 須忠器・高杯	1区包含物10	粗3/8	粗・少	N8/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
274	56	- 須忠器・高杯	1区包含物10	底2/8	粗・少	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
275	56	- 須忠器・杯	1区包含物10	2/8	粗・少	N6/灰白色	到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ	
276	56	- 須忠器・高杯	1区包含物10	-	粗・多	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
277	56	- 須忠器・平皿	1区包含物10	2/8	中・普	N6/灰白色	到板ナデ・ナデ	到板ナデ	
278	56	- 須忠器・平皿	1区包含物10	-	中・普	N7/灰白色	ナデ・到板ナデ・ヘタ切り	到板ナデ	
279	56	- 須忠器・盃	1区包含物10	1/8	粗・普	N5/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
280	56	31 須忠器・盃	1区包含物10	1/8	粗・普	N6/灰白色	到板ナデ・到板ヘタ切り	到板ナデ	
281	56	- 須忠器・盃	1区包含物10	-	粗・少	N6/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
282	56	- 土師質・切妻車	1区包含物10	2/8	中・普	10YR2/灰白色	ナデ	ナデ	穴径が不定、平面もむら
283	56	- 土師質・管状土錐	1区包含物10	-	精良	5Y7/灰白色	筋ナデ	筋ナデ	重ね22.0g
284	56	- 石錐	1区包含物10	-	砂岩	-	-	-	左面上端の抉り以外は 人為か不明
285	57	- 須忠器・盤	1区包含物10	8/8	中・普	(内)N6/灰白色(外)N5/灰白色	到板ナデ	到板ナデ	
286	57	- 須忠器・甕	1区包含物10	小片	改・普	到板ナデ・磨滅・叩き・ カキ目	到板ナデ	到板ナデ	
287	57	- 須忠器・甕	1区包含物10	2/8	粗・普	N8/灰白色	到板ナデ・当ナ具組	到板ナデ	

第16表 川北邊境植物觀察表[10]

植物 番号	種 名	種 類	種 名	花 被	葉 被	根 被	地 土	色 調	外 來 物	内 面 調 査	整形・調査の特徴
288	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	1/8	細・少	(内)N8灰白色 (外)2.5Y7.2R8黄色	ナデ・叩き・カキ目	ナデ・当チ具役		
289	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	小片	細・青	N7灰白色	圓柱ナデ	自伝ナデ		
290	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	1/8	細・多	N7灰白色	圓柱ナデ	当チ具役ナデ消し	外面灰かぶり	
291	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	1/8	細・少	N5灰白色	叩きナデ	圓柱ナデ		
292	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	底2/8	細・普	N5灰白色	叩き・板ナデ・ナデ	圓柱ナデ・板ナデ		
293	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	小片	中・普	N5灰白色	圓柱ナデ・沈鑿	圓柱ナデ		
294	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	1/8	精良	N7灰白色	圓柱ナデ・液状文	圓柱ナデ		
295	57	-	須恵器・甕	1区包含層110	小片	細・少	N6灰白色	圓柱ナデ・精液状文・液狀文	圓柱ナデ	精液状文	
296	57	-	土陶器・杆茎	1区包含層110	中・少	5/8	N7灰白色	圓柱ヘアリ?	圓柱	精液	
297	57	-	土陶器・杆	1区包含層110	小片	精良	7.5Y7R8灰黃褐色	圓柱	圓柱ナデ	圓柱ナデ	
298	57	-	土陶器・杆	1区包含層110	小片	細・少	7.5Y7R6/4灰・黃褐色	圓柱ナデ	圓柱ナデ	圓柱ナデ	
299	57	32	土陶器・杆	1区包含層110	底7/8	精良	2.5Y8/2R6灰色	精良・ヘア削り・磨き	圓柱ナデ・磨文	圓柱ナデ	外面部色彩料質分布
300	57	-	土陶器・杆	1区包含層110	小片	中・普	(内)5Y9R6/6R6色 (外)7.5Y7R7/6R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
301	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	2/8	中・多 多根	7.5Y7R5/3R-5R・褐色	圓柱	圓柱	圓柱	内面部粘土が地土顔面と 異なる
302	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	2/8	中・普	(内)5Y9R6/8R6色 (外)5Y9R7/8R6色	圓柱ナデ・磨滅	圓柱ナデ・磨滅	圓柱	
303	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	小片	細・少	(内)2.5Y7R8/2K白色 (外)10Y7R8/2K白色	圓柱ナデ・磨滅	圓柱ナデ・磨滅	圓柱	
304	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	1/8	細・少	5Y7R6/8R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
305	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	小片	細・少	2.5Y7R5/3R-5R・黃褐色	圓柱ナデ・ヘア削り	圓柱ナデ	圓柱	
306	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	2/8	細・少	10Y7R7/3R-5R・黃褐色	圓柱	圓柱	圓柱	
307	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	小片	細・少	7.5Y7R8/2R6褐色	圓柱	圓柱	圓柱	
308	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	底7/8	精良	5Y7R7/6R6色	圓柱七日	圓柱ナデ・磨滅	圓柱	
309	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	2/8	中・多	7.5Y7R6/8R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
310	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	小片	中・少	2.5Y7R6/8R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
311	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	小片	中・普	5Y7R6/8R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
312	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	小片	中・普	5Y7R6/6R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
313	57	-	土陶器・瓶	1区包含層110	底1/8	細・普	5Y7R6/6R6色	圓柱	圓柱	圓柱	
314	57	-	土陶器・杆	1区包含層110	底・普	5Y7R6/6R6色	圓・普	圓柱	圓柱	圓柱	圓柱
315	57	-	黑色土器・瓶	1区包含層110	1/8	細・少	(内)2.5Y7R4/4R4深褐色 (外)5Y7R7/6R6褐色	圓柱・ヘア削り?	圓柱	圓柱	
316	58	-	土陶器・甕	1区包含層110	1/8	中・多	(内)10Y7R7/3R-4R・深褐色 (外)10Y7R8/3R-4R・深褐色	圓柱	圓柱	圓柱	

第17表 川北遺跡遺物觀察表(1)

遺物 番号	構図・回版	種類・属性	遺構名	候存量	出土	色調	外傷調整	内部調整	整形・測量の特徴
317 58	-	土陶器・甕	1区包含H10	小片	中・普	(内)10YR4/1灰褐色 (外)25YR6/6褐色	磨滅	磨滅・指摘痕	
318 58	-	土陶器・甕	1区包含H10	1/8	細・普	10YR8/1K白色	ナデ・研毛目・指摘痕	ナデ・研毛目・指摘痕	
319 58	-	土陶器・甕	1区包含H10	2/8	中・多	10YR8/2K白色	研毛目・ナデ	研毛目・ナデ	
320 58	32	土陶器・甕	1区包含H10	7/8	中・多	10YR8/3K黃褐色	指摘痕・磨滅	指摘痕・磨滅	器壁が薄い
321 58	-	土陶器・甕	1区包含H10	1/8	中・多	5YR5/8明赤褐色			
322 58	-	土陶器・甕	1区包含H10	小片	細・多	(9)7.5YR8/4灰黃褐色 (外)7.5YR8/4灰褐色	研滅	研滅	
323 58	-	灰土器・壺	1区包含H10	小片	中・多	(9)7.5YR4/1灰褐色 (外)7.5YR6/6褐色	研滅	研滅	
324 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	2/8	精良	N7灰白色	回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	
325 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	小片	微・少	N5灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	回転ナデ	
326 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	2/8	細・普	N6灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	回転ナデ・ナデ	
327 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	3/8	細・少	N7灰白色	ヘラ削り・回転ヘラ削り	回転ナデ	
328 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	3/8	中・多	N6灰褐色	ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	
329 58	32	須恵器・杆壺	1区包含H10	2/8	粗・普	(9)N5灰褐色(外)N5灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ・ナデ	
330 58	32	須恵器・杆壺	1区包含H10	6/8	中・普	N5灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	
331 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	小片	少	(9)N6灰褐色(外)N5灰褐色	ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	
332 58	-	須恵器・杆壺	1区包含H10	1/8	微・少	N6灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	回転ナデ	
333 58	33	須恵器・杯	1区包含H10	5/8	細・多	N7灰白色	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	回転ナデ	繋まりがやや悪い、
334 58	-	須恵器・杯	1区包含H10	底3/6	精良	N6灰褐色	回転ヘラ削り	回転ナデ	
335 58	-	須恵器・杯	1区包含H10	3/8	精良	N6灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	
336 58	-	須恵器・杯	1区包含H10	1/8	細・少	N6灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	内面磨か・仄かぶり
337 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	底4/8	精良	10YR5/6灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	外面自然釉
338 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	1/8	微・少	N7灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
339 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	底4/8	粗・普	N7灰白色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ記号「11」
340 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	1/8	微・少	N6灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	
341 58	33	須恵器・高台付杯	1区包含H10	4/8	粗・少	N7灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
342 58	-	須恵器・杯	1区包含H10	2/8	細・少	N5灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	
343 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	1/8	細・少	N5灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	
344 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	1/8	粗・普	N5灰褐色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ・ナデ	
345 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	底7/8	中・少	N7灰白色	回転ナデ・ヘラ削り?	回転ナデ	
346 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	1/8	精良	N7灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
347 58	-	須恵器・高台付杯	1区包含H10	底2/8	粗・普	N7灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
348 58	-	須恵器・杯	1区包含H10	2/8	微・普	2.5Y7/1灰白色	回転ナデ	回転ナデ	225と同一個体?
349 58	-	須恵器・圓	1区包含H10	2/8	中・多	N8灰白色	研滅	研滅	外面底からぶり

第18表 川北遺跡遺物観察表(2)

遺物・出土場	種類・器種	遺物名	残存量	施土	色調	外觀調整	整形・調整の特徴
350 58 -	須恵器・瓶	I区包含層H10	小片	中・普	N7灰白色	回転ナヂ	
351 58 33	須恵器・ハソウ	I区包含層H10	新8/6	精良	N6灰黑色	回転ナヂ・ヘラ切り	
352 58 33	須恵器・壺蓋	I区包含層H10	6/8	中・普	N6灰黑色	回転ナヂ・回転ナヂ	
353 58 -	須恵器・壺	I区包含層H10	6/8	精・普	21YR7/8灰白色	ヘラ削り・回転ナヂ	
354 58 33	須恵器・杯	I区包含層H10	新7/8	細・少	N6灰黑色	回転ナヂ・ヘラ削り・ナヂ	
355 58 -	須恵器・円筒瓶	I区包含層H10	小片	細・普	N6灰黑色	回転ナヂ	内底に塗付着?
356 59 34	須恵器・壺	I区包含層H10	小片	細・普	N6灰黑色	回転ナヂ	適し16個
357 59 -	須恵器・壺	I区包含層H10	2/8	精良	23Y7/1灰白色	回転ナヂ	内外面自然施
358 59 -	須恵器・壺	I区包含層H10	1/8	中・普	N7灰白色	回転ナヂ	外側に早い自然施
359 59 -	須恵器・壺	I区包含層H10	2/8	細・普	N7灰白色	回転ナヂ・格子目刺	小さな火がくれば多い
360 59 -	須恵器・壺	I区包含層H10	1/8	細・普	N6灰黑色	回転ナヂ・当チ貝殻	回転ナヂ・当チ貝殻
361 59 -	須恵器・壺	I区包含層H10	1/8	細・普	N6灰黑色	回転ナヂ	把手が候合面で剥離
362 59 -	須恵器・壺	I区包含層H10	1/8	精良	N7灰白色	回転ナヂ・櫛端波状文・立脚	
363 59 -	須恵器・平H.	I区包含層H10	-	精良	N7灰白色	磨き	施土・調整と立脚
364 59 -	土師器・杯	I区包含層H10	1/8	細・少	51Y6/6灰色	不明	内面墨付着?
365 59 -	土師器・杯	I区包含層H10	小片	細・少	(94)73YR7/6灰褐色	磨滅	
366 59 -	土師器・杯	I区包含層H10	1/8	微・少	10YR8/2灰褐色	磨滅	
367 59 -	土師器・杯	I区包含層H10	小片	中・少	73YR8/2灰白色	磨滅	
368 59 -	土師器・杯	I区包含層H10	1/8	中・普	(94)73YR7/4:5灰褐色	磨滅	磨滅
369 59 -	土師器・瓶	I区包含層H10	小片	細・少	10YR8/2灰白色	回転ナヂ・磨滅	回転ナヂ
370 59 -	土師器・瓶	I区包含層H10	小片	細・少	51YR5/6灰褐色	磨滅	磨滅
371 59 -	土師器・瓶	I区包含層H10	小片	中・少	73YR8/2灰褐色	磨滅	磨滅
372 59 -	土師器・瓶	I区包含層H10	1/8	細・普	51YR6/8灰色	磨滅	磨滅
373 59 34	土師器・瓶	I区包含層H10	新3/8	細・普	10YY56/4:5灰褐色	ナヂ・削れ・ヘラ削り	内外面赤色墨付
374 59 -	土師器・瓶	I区包含層H10	1/8	中・多	73YR8/2灰褐色	磨滅・墨付?	内外面赤色墨付?
375 59 -	土師器・高台付	I区包含層H10	瓶:8	中・普	10YR7/21:5灰褐色	磨滅	内外面赤色新鮮?
376 59 -	土師器・高台付	I区包含層H10	小片	中・少	73YR6/6褐色	磨滅	磨滅
377 59 -	土師器・高台付	I区包含層H10	瓶2/8	中・普	(94)10YR7/1灰白色	剥離	
378 59 -	土師器・高台付	I区包含層H10	小片	中・少	23YR6/8褐色	磨滅	
379 59 -	土師器・壺	I区包含層H10	1/8	粗・多	10YR8/3灰褐色	磨滅・原毛目	口縁外面部施灰?
380 59 -	土師質・蓋	I区包含層H10	1/8	細・普	(94)73YR6/6褐色	磨滅	ナヂ
381 59 33	土師質・輪羽口	I区包含層H10	-	細・普	(94)25GY4/1暗オリ一灰褐色	?	外側に浴付着

第19表 川北遺跡遺物目録表(1)

遺物 番号	種別 部品	種類・特徴	遺物名	埋蔵層	出土	色調	外面調整	内面調整	整形・調整の結果
382	59	33 土師質・輪羽口	1区包含物H10	-	中・青 (9)15YS/6明赤褐色	?		ナデ	外面に沿津付着
383	59	33 土師質・輪羽口	1区包含物H10	-	粗・多 (9)125YS/6明赤褐色	ナデ	指高角・ナデ	外面に沿津付着	
384	59	- 土師質・管状土器	1区包含物H10	7/8	粗・青 7.5YR4/2暗褐色	指ナデ		重量13.8g	
385	59	- 土師質・管状土器	1区包含物H10	-	細・少 (6)10R4/4よい黄褐色	ナデ		重量10.4g	
386	59	- 土師質・管状土器	1区包含物H10	7/8	微・少 2.5Y8/2灰白色	解説		重量10.2g	
387	59	- 土師質・管状土器	1区包含物H10	7/8	粗・少 2.5Y8/1灰白色	ナデ		重量7.1g	
388	59	- 土師質・管状土器	1区包含物H10	-	微・青 (9)125YS/6明赤褐色	ナデ		重量5.8g	
389	59	- 土師質・管	1区包含物H10	小片	中・多 (9)10YR7/6明黃褐色	刷毛毛・指高角・ナデ	ナデ	縫の突口左側觸	
390	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ		
391	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	粗・青 N5/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
392	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	中・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
393	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
394	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
395	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	-	微・青 N5/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
396	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	精良 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
397	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	微・青 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
398	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	粗・多 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
399	60	34 領忠器・杆茎	1区包含物G10	3/8	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
400	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	粗・少 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
401	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	精良 N8/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
402	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	精良 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
403	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
404	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	小片	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
405	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	中・少 N8/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
406	60	- 領忠器・杆茎	1区包含物G10	1/8	微・青 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
407	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	微・青 (内)N7灰白色(外)N6灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
408	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	粗・中 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
409	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	粗・青 N8/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
410	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	小片	微・少 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
411	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	微・少 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
412	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	粗・青 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
413	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	粗・少 N6/灰赤色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
414	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	2/8	精良 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	
415	60	- 領忠器・杆	1区包含物G10	1/8	粗・青 N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	外周所からり	

第20表 川北遺跡遺物観察表[4]

遺物 番号	種類 固版	種類・器種	遺構名	残存量	胎土	色調	外面調整	内面調整	整形・調整の特徴
416	60	-	須恵器・杯	I区包含層G10	2/8	粘質	N6/灰白色	回転ナデ・ヘラ切り・ナデ	外削全体に自然地
417	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	1/8	粘質	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
418	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	1/8	粘質	N7/灰白色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ
419	60	34	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	7/8	繊維・少	N7/灰白色	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ
420	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	-	粘質	N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
421	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	1/8	粘質	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
422	60	-	須恵器・杯	I区包含層G10	1/8	粘・少	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
423	60	-	須恵器・杯	I区包含層G10	2/8	繊・普	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
424	60	-	須恵器・杯	I区包含層G10	1/8	中・普	N5/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
425	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	3/8	繊・少	N7/灰白色	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ
426	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	小片	繊・普	N5/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
427	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	残2/8	繊・少	(N)23YRS/3R ² A ¹ 青褐色	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ
428	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	1/8	繊・少	N5/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
429	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	残2/8	繊・少	N7/灰白色	回転ナデ・回転ヘラ削り	ヘラ削りは妙位左回り
430	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	残8/8	繊・少	N6/灰白色	回転ナデ・ヘラ削り	ヘラ削りは妙位左回り
431	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	残8/8	中・普	N6/灰白色	削減	削減
432	60	-	須恵器・高台付杯	I区包含層G10	残2/8	繊・良	N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
433	60	-	須恵器・杯	I区包含層G10	小片	繊・少	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
434	60	-	須恵器・皿	I区包含層G10	小片	繊・普	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
435	60	-	須恵器・皿	I区包含層G10	1/8	繊・多	N7/灰白色	削減	削減
436	60	-	陶器・円柱?	I区包含層G10	-	繊密	(N)23Y/2B ² 白色	?	妙位。近世から古が よく残る
437	60	-	須恵器・甕	I区包含層G10	小片	繊・少	N6/灰白色	回転ナデ・流状文	回転ナデ
438	60	-	須恵器・甕	I区包含層G10	小片	繊・普	N6/灰白色	流状文・面削ナデ	回転ナデ
439	60	-	須恵器・甕	I区包含層G10	1/8	繊・少	N5/灰白色	回転ナデ	回転ナデ
440	60	34	須恵器・甕	I区包含層G10	1/8	繊・普	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ・当て具削
441	60	-	須恵器・甕	I区包含層G10	小片	中・普	N6/灰白色	回転ナデ	回転ナデ・流状文
442	60	-	須恵器・甕	I区包含層G10	小片	繊・普	N7/灰白色	削減	削減
443	61	-	土師器・升壺	I区包含層G10	1/8	中・普	5YR7/4B ² 白色	(P)10YR8/3灰黄色	削減
444	61	34	土師器・杯蓋	I区包含層G10	1/8	中・少	(P)10YR7/6明黄白色	(P)10YR7/6明黄白色	回転ナデ
445	61	-	土師器・杯	I区包含層G10	小片	繊・少	(N)23YR6/6橙色	(N)23YR6/6橙色	回転ナデ
446	61	34	土師器・高台付杯	I区包含層G10	残2/8	繊・少	(P)17YR8/6暗黄色	(P)17YR8/6暗黄色	削減
447	61	34	土師器・高台付杯	I区包含層G10	残2/8	繊・良	7SYR8/6乳白色	7SYR8/6乳白色	ナデ・削減

第21表 川北邊防遺物觀察表(1)

遺物番号	種別	種類・属性	遺物名	保存量	粘土	色調	外觀調整	内面調整	整形・調整の特徴
448	61	- 土器類・瓶	I区包含物G10	2/8	繩・少	SVYR6/6褐色	削減・研磨	削減	
449	61	- 土器類・瓶	I区包含物G10	小片	中・普	7.5YR7/4R・6YR6褐色	削減	削減	
450	61	- 土器類・瓶	I区包含物G10	小片	中・多	7.5YR8/3褐色	削減・ナダ・板ナダ	削減	削減・ナダ
451	61	- 土器類・甕	I区包含物G10	1/8	中・多	(4)7.5YR6/6褐色	削減・板ナダ・ナダ	削減	削減・板ナダ・ナダ
452	61	- 土器類・甕	I区包含物G10	小片	繩・普	7.5YR8/3褐色	削減・板ナダ・ナダ・刷毛目	削減	削減・板ナダ・ナダ
453	61	- 土器類・甕	I区包含物G10	小片	中・多	(4)7.5YR6/6褐色	削減・ナダ	削減	
454	61	- 土器類・甕	I区包含物G10	小片	繩・普	7.5YR8/4褐色	削減	削減	
455	61	- 土器類・甕	I区包含物G10	-	繩・普	(4)10YR6/2R褐色	削減・板ナダ	削減	削減・板ナダ
456	61	- 土器類・甕or壺	I区包含物G10	-	繩・普	10YR8/4褐色	削減・板ナダ	削減	削減・板ナダ
457	61	- 土器類・壺或口	I区包含物G10	2/8	中・普	7.5YR6/8褐色	削減・ナダ	削減	削減・ナダ
458	61	- 土器類・杯状土器	I区包含物G10	-	繩・多	10YR8/2R白色	削減・板ナダ	削減	削減・板ナダ
459	61	- 破石	I区包含物G10	-	泥状岩	10YR8/4白色	-	-	重量10.3g
460	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩・普	N7/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
461	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	小片	繩・少	N6/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
462	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	小片	繩・少	N6/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
463	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	2/8	繩・少	N7/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
464	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩	N7/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
465	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	-	繩・少	N5/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
466	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	-	繩・普	N6/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
467	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	-	繩・少	N5/灰白色	削減・板ナダ	削減・板ナダ	
468	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	小片	繩	N7/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り・ナダ	削減ナダ	
469	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	-	繩	N7/灰白色	削減ナダ・削除・削除・ナダ	削減ナダ	
470	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩・普	N5/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
471	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩・少	N7/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
472	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11/11	1/8	繩・普	N5/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
473	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩・普	N5/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り・自転ナダ	削減ナダ	
474	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩・普	N5/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
475	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	小片	繩・少	N5/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
476	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩	N7/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	
477	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	1/8	繩・少	N6/灰白色	削減ナダ・ヘラ削り	削減ナダ	
478	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11	小片	繩	N5/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	上面灰かぶり
479	62	- 領帶器・杆頭	I区包含物H11/11	1/8	繩・普	N5/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	外側重ね焼痕?
480	62	- 領帶器・杆	I区包含物H11/11	1/8	繩・普	N5/灰白色	削減ナダ	削減ナダ	

第22表 川北遺跡遺物觀察表[16]

遺物 番号	種類 ・因版	種類・基種	遺物名	残存量	胎土	色調	外表面	内面調整	整形・調査の特徴
481 62	-	須磨器・杯	1区包含物111 1区包含物111	泥1/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ	外面自然輪
482 62	-	須磨器・杯	1区包含物111 1区包含物111/111	小片	精良	N6/灰黑色	回版ナデ・回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
483 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底3/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ・輪軸ヘラ削り	回版ナデ・ナデ	外面自然輪
484 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	小片	精良	N5/灰白色	回版ナデ・回版ナデ	回版ナデ・ナデ	外面自然輪
485 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底6/8	精良	N5/灰黑色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ・ナデ	外面自然輪
486 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	小片	精・少	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
487 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	小片	精良	(N)125/7/2灰黄色(外)N6/深灰色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
488 62 34	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	2/8	精・普	(N)N7/灰白色(外)N6/深灰色	回版ナデ	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
489 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111	底2/8	精良	N6/灰黑色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ	外面自然輪
490 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111	底1/8	精・普	N6/灰黑色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ・指ナデ	外面自然輪
491 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111	底1/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
492 62 34	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底2/8	精良	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
493 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	1/8	中・普	N7/灰白色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ	外面自然輪
494 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底2/8	精良	N6/灰黑色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ	外面自然輪
495 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底1/8	精・普	N8/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
496 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底3/8	精・少	N7/灰白色	精減	精減	外面自然輪
497 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111/111	底2/8	精良	25/7/1灰白色	精減	精減	外面自然輪
498 62	-	須磨器・杯	1区包含物111/111	小片	精良	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
499 62	-	須磨器・杯	1区包含物111/111	小片	精良	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
500 62	-	須磨器・杯	1区包含物111	2/8	精・少	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
501 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111	底1/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
502 62	-	須磨器・高台付杯	1区包含物111	底1/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ・ナデ	ナデ	外面自然輪
503 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	底2/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
504 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	小片	精・少	N7/灰白色	精減	精減	外面自然輪
505 62	-	須磨器・高杯	1区包含物111	薄6/5	精・少	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
506 62	-	須磨器・高杯	1区包含物111	底1/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
507 62	-	須磨器・ハソウ	1区包含物111	-	精・少	N6/灰黑色	回版ナデ・透状文	回版ナデ	外面自然輪
508 62	-	須磨器・瓶?	1区包含物111	小片	精・少	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
509 62 34	須磨器・瓶	1区包含物111	底8/8	精良	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
510 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	底2/8	精・少	N4/灰黑色	回版ナデ・ヘラ切り	回版ナデ・ナデ	外面自然輪
511 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	底1/8	精良	N6/灰黑色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
512 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	-	精・少	N7/灰白色	回版ナデ・回版ヘラ削り	回版ナデ	外面自然輪
513 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	底2/8	精良	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪
514 62	-	須磨器・瓶?	1区包含物111	底8/8	精良	N6/灰黑色	回版ナデ・平行叩き	回版ナデ	外面自然輪
515 62	-	須磨器・瓶	1区包含物111	-	精・少	N7/灰白色	回版ナデ	回版ナデ	外面自然輪

第23表 川北遺物調査表(II)

遺物 番号	種類 分類	種類・品種	遺物名	残存量	施工	色調	外面焼接	内面調整	整形・調整の特徴
516 62 34	須恵器・壺		I区包含層11/11	1/8	中・普	N6灰褐色	圓柱ナメ・叩き・カギ目、円形浮文、	圓柱ナメ・叩き・カギ目、	
517 62 34	須恵器・壺		I区包含層11/11	-	微・普	N6灰褐色	圓柱ナメ・叩き・カギ目、円形浮文、	圓柱ナメ・叩き・カギ目、	当て點径4cm
518 62 -	須恵器・壺		I区包含層11/11	1/8	中・少	N6灰褐色	圓柱ナメ・叩き・カギ目	圓柱ナメ・叩き・カギ目	當子與氣
519 62 -	須恵器・壺		I区包含層11/11	小片	微・少	N6灰褐色	圓柱ナメ・叩き・カギ目	圓柱ナメ・叩き・カギ目	當子與氣
520 62 -	須恵器・壺		I区包含層11/11	小片	精良	N6灰褐色	平行引き	平行引き	無き不確定
521 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	小片	細・少	7.5YR8/4浅黃褐色	ナメ	ナメ	ナメ
522 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	小片	細・少	(N)7.5YR6/6灰色	(N)7.5YR7/4L5灰褐色	平行引き	無き不確定
523 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	小片	中・普	10YR7/2L5灰褐色	10YR7/2L5灰褐色	10YR7/2L5灰褐色	當子與氣
524 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	小片	細・普	7.5YR7/4L5灰褐色	(N)25YR7/6灰色	7.5YR7/6灰色	當子與氣
525 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	小片	微・普	(N)25YR7/6灰色	5YR7/6灰色	5YR7/6灰色	當子與氣
526 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	1/8	微・普	5YR7/6灰色	5YR7/6灰色	5YR7/6灰色	當子與氣
527 63 -	土師器・瓶		I区包含層11/11	小片	中・少	10YR7/4L5灰褐色	10YR7/4L5灰褐色	10YR7/4L5灰褐色	當子與氣
528 63 -	土師器・瓶		I区包含層11/11	底・3/8	細・少	(N)7.5YR8/3浅黃褐色	(N)7.5YR8/3浅黃褐色	(N)7.5YR8/3浅黃褐色	當子與氣
529 63 -	土師器・瓶		I区包含層11/11	小片	細・少	7.5YR8/3浅黃褐色	(N)7.5YR8/2灰白色	7.5YR8/3浅黃褐色	當子與氣
530 63 -	土師器・杯		I区包含層11/11	1/8	微・普	2.5YR6/8灰色	2.5YR6/8灰色	2.5YR6/8灰色	當子與氣
531 63 -	土師器・爲台付杯		I区包含層11/11	底・1/8	微・少	10YR8/4浅黃褐色	10YR8/4浅黃褐色	10YR8/4浅黃褐色	當子與氣
532 63 -	土師器・高台付瓶		I区包含層11/11	小片	中・普	10YR8/3浅黃褐色	10YR8/3浅黃褐色	10YR8/3浅黃褐色	當子與氣
533 63 -	土師器・高台付瓶		I区包含層11/11	小片	中・普	7.5YR7/6灰色	7.5YR7/6灰色	7.5YR7/6灰色	當子與氣
534 63 -	土師器・高台付瓶		I区包含層11/11	底・3/8	微・少	5YR8/2K白色	5YR8/2K白色	5YR8/2K白色	當子與氣
535 63 -	土師器・高台付瓶		I区包含層11/11	底・2/8	中・普	5YR7/1K白色	5YR7/1K白色	5YR7/1K白色	當子與氣
536 63 -	土師器・高台付瓶		I区包含層11/11	高台・1/8	粗・少	10YR8/3浅黃褐色	10YR8/3浅黃褐色	10YR8/3浅黃褐色	當子與氣
537 63 -	土師器・椀		I区包含層11/11	底4/8	中・少	(N)5YR6/6灰色	(N)5YR6/6灰色	(N)5YR6/6灰色	當子與氣
538 63 -	土師器・小皿		I区包含層11/11	3/8	微・少	10YR6/5明赤褐色	10YR6/5明赤褐色	10YR6/5明赤褐色	當子與氣
539 63 35	土師器・管状土錐		I区包含層11/11	-	粗・普	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	中空
540 63 35	土師器・棒状土錐		I区包含層11/11	-	粗・普	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	中空
541 63 35	土師器・管状土錐		I区包含層11/11	-	微・少	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	中空
542 63 35	土師器・管状土錐		I区包含層11/11	-	中・普	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	2.5Y7/1灰黑色	中空
543 63 35	土師器・管状土錐		I区包含層11/11	-	粗・多	5YR6/6灰色	5YR6/6灰色	5YR6/6灰色	中空
544 63 -	土師器・甕		I区包含層11/11	1/8	粗・少	(N)10YR6/2灰白色	(N)10YR6/2灰白色	(N)10YR6/2灰白色	當子與氣
545 63 -	土師器・甕		I区包含層11/11	小片	中・普	(N)5YR5/4L5灰褐色	(N)5YR5/4L5灰褐色	(N)5YR5/4L5灰褐色	當子與氣
546 63 -	土師器・甕		I区包含層11/11	小片	中・普	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	當子與氣

第24表 川北道跡物観察表(8)

遺物 番号	種類 区分	種類・差異	遺物名	埋没量	出土	色調	外表面要 素	内面調査	整形・調整の特徴
547	63	- 土器質・頭	I区包含層H11	小片	粗・多	10YR8/25E白色 7.5YR5/41-E5-E褐色	磨滅	磨滅	外面(陶土下)層
548	63	- 土器質・釜	I区包含層H11	小片	粗・多	10YR7/21-E5-E褐色	磨滅	磨滅	外面(陶土下)層
549	63	- 土器質・釜	I区包含層H11	小片	中・多	7.5YR5/41-E5-E褐色	ナメ	ナメ	外延(陶土下)層
550	63	- 土器質・釜	I区包含層H11	1/8	中・多	7.5YR5/41-E5-E褐色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
551	63	- 土器質・釜	I区包含層H11	小片	中・多	7.5YR6/41-E5-E褐色	指揮痕	ナメ	内面施灰層。幅2.7cm
552	63	- 土器質・平丸	I区包含層H11	-	粗・多	25Y7/1E白色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
553	63	- 須恵器・杯	I区包含層H11	小片	中・普	N5/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
554	63	- 須恵器・杯	I区包含層H11	2/8	細・普	N6/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
555	63	- 須恵器・杯	I区包含層H11	小片	精良	N7/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
556	63	- 須恵器・杯	I区包含層H11	小片	中・少	(9)10YR7/1E白色 (9)5YR5/31-E5-E褐色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
557	63	- 須恵器・杯	I区包含層H11	小片	微・少	N5/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
558	63	- 須恵器・高台付杯	I区包含層H11	板2/8	細・少	N8/灰白色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
559	63	- 須恵器・高台付杯	I区包含層H11	1/8	細・普	N6/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
560	63	- 須恵器・高台付杯	I区包含層H11	小片	細・少	N6/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
561	63	- 須恵器・高台付杯	I区包含層H11	底2/8	粗・少	(9)N6/灰白色 (9)N5/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
562	63	- 須恵器・高台付杯	I区包含層H11	底1/8	中・普	2.5Y8/6E白色	剥離	剥離	外延(陶土下)層
563	63	- 須恵器・皿	I区包含層H11	小片	粗・少	N7/灰白色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
564	63	- 須恵器・平瓶	I区包含層H11	1/8	精良	N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
565	63	- 須恵器・瓶	I区包含層H11	5/8	粗・少	N5/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
566	63	- 須恵器・壺	I区包含層H11	1/8	粗・少	N7/灰白色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
567	63	- 土師器・高台付圓	I区包含層H11	底1/8	中・少	(9)2.5YR6/3E褐色 (9)10YR7/3E-E5-E褐色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
568	63	- 土師器・高台付圓	I区包含層H11	底2/8	細・普	5YR6/8E褐色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
569	63	- 土師器・高台付圓	I区包含層H11	小片	中・多	10YR8/4E褐色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
570	63	- 土師器・甕	I区包含層H11	小片	粗・多	5YR5/6E褐色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
571	64	- 売生土器・高杯	I区包含層	小片	中・多	(9)7.5YR5/6E褐色 角四石	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
572	64	- 須恵器・平蓋	I区包含層	-	粗・少	N7/9E白色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
573	64	- 須恵器・杯	I区包含層	8/8	粗・多	N7/9E白色	磨滅	磨滅	外延(陶土下)層
574	64	- 須恵器・高台付杯	I区包含層	1/8	粗・少	N5/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
575	64	- 須恵器・高台付杯	I区包含層	2/8	粗・少	N5/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
576	64	- 須恵器・壺	I区包含層	底4/8	粗・少	N8/灰白色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層
577	64	角頭・輪輪・壺	I区包含層	-	極密	(9)N8/灰白色 輪10CY7/1E明褐色	?	?	外延(陶土下)層
578	64	- 須恵器・杯	I区包含層	底1/8	精良	N6/灰色	回転ナメ	回転ナメ	外延(陶土下)層

第25表 川北遺跡遺物観察表(9)

遺物 番号	種類 固版	種類・基層	遺物名	保存量	胎土	色調	外觀特徴	内面調整	整形・調整の特徴
579	64	-	土器器・皿	I区包含層	小片	細・昔 數多	5YR7/6褐色 (胎土) NS8灰白色(物) 10CY6/1褐色	圓形ナデ・斜切り	圓形ナデ
580	64	-	骨器・碗	I区包含層	小片	中・昔 少	? (外) NS6灰褐色 (外) 10YR5/1褐色	?	?
581	64	-	鐵削尖・劍	I区包含層	小片	中・昔 少	10YR7/31-5灰褐色 (外) 10YR7/25-5灰褐色	板ナデ・ナデ 筋減	房毛1?・板ナデ 重慶10.4g
582	64	-	土陶質・管状工具	I区包含層	8/8	細・少	(外) 10YR7/25-5灰褐色 (外) N7灰白色	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ
583	64	-	土陶質・平瓦	I区包含層	-	中・昔	(外) 10YR8/1灰白色	-	-
584	64	-	砾石	I区包含層	-	淡灰褐色 - 10YR8/1灰白色	-	-	小穴・深溝・浅い擦痕等 研ぎ跡多数
585	64	-	砾石	I区包含層	-	淡灰褐色 - 10YR8/1灰白色	-	-	研ぎ面14著しく凹む
586	64	-	須恵器・牙鑿	II区包含層	小片	細・昔 少	N7灰白色	圓形ナデ・へラ削り	圓形ナデ
587	64	-	須恵器・杵	II区包含層	小片	微・少	N8灰白色	圓形ナデ	圓形ナデ
588	64	35	須恵器・丸瓦	III区包含層	小片	粗・昔 少	N8灰白色 N7灰白色	ナデ 右目	内面に粘土の巻き目 内外面状態の輪付壺
589	64	35	須恵器・丸瓦	III区包含層	-	粗・少	N7灰白色	ナデ	右目
590	64	35	休生土器・瓶	IV区包含層	瓶8/8	中・昔 少	25YR8/2灰白色 7.5YR8/4灰青褐色	板ナデ・叩き 指擦痕・ナデ	指擦痕・ナデ・へラ削り
591	64	-	土器器・甕	IV区包含層	-	中・多 少	(外) 10YR7/31-5灰褐色 (外) 10YR8/4灰青褐色	板減・板ナデ	二重口縁 蓋か底か不明
592	64	35	土器器・壺	V区包含層	1/8	細・昔 少	(外) 10YR8/4灰青褐色	板減・板ナデ	二重口縁 蓋か底か不明
593	64	36	木器・曲物	子備調査CD	-	-	-	-	-

第26表 三段出口遺跡遺物観察表(1)

遺物番号	種類	断面・断性	遺物名	残存量	土	色調	外面測定	内面測定	型形・模型の特徴
594 76	- 木器・柄?	SP03	-	-	-	-	-	-	-
595 75	- 砧石	SP04	-	-	-	-	-	-	-
596 79	- 弦生土器・甕	SK05	1/8	中・少 (9)YR6/4i-5i・褐色	ナデ	ナデ 塗滅	598と同一原体か	-	-
597 79	- 弦生土器・高杯	SK05	1/8	中・普 (9)YR7/4i-5i・褐色	ナデ	ナデ 塗滅	接合部で剥離	-	-
598 80	- 弦生土器・甕	SK06	1/8	中・多 (9)YR6/4i-5i・褐色	ナデ	ナデ 塗滅	596と同一原体か	-	-
599 80	- 弦生土器・杯	SK06	4/8	中・多 (9)10YR5/4i-5i・褐色	刷毛目・板ナデ	刷毛目・板ナデ	口縁不整	-	-
600 80	- 弦生土器・杯	SK06	底6/8	粗・多 (9)25Y4/4i黄褐色	粗頭鏡・ナデ	粗頭鏡・ナデ	ナデ?	-	-
601 80	- 弦生土器・杯	SK06	底8/8	中・多 (9)10YR4/4i灰褐色	明き・拵頭鏡・ナデ	明き・拵頭鏡・ナデ	板ナデ	-	-
602 82	- 弦生土器・甕	SE01	1/8	中・普 (9)15YR5/6明黄褐色	機ナデ・ナデ	機ナデ・ナデ	刷毛目・板ナデ・ヘラ削り	-	-
603 82	- 弦生土器・高杯	SE01	小片	微・普 負四石覆	7.5YR5/4i-5i褐色	刮伝ナデ・擦滅	擦滅	擦不善矣	-
604 82 35	肥前系器・碗	SE01	底4/8	極密	(9)9.5YR4/8暗褐色	-	-	擦模コニニヤク印判	-
605 82 35	肥前系器・瓶	SE01	1/8	極密	(9)15YR8/1灰白色	-	-	見込み・外底蛇ノ目輪剥ぎ	-
606 82 36	瓶戸・美濃系陶器・ 灰施片口	SE01	5/8	細・少 (9)15Y7/7/2灰褐色	刮伝ナデ	刮伝ナデ	刮伝ナデ	見込みの目輪剥み	-
607 82 35	鉢石	SE01	8/8	材不明	25Y8/3浅黄色	-	-	白石	-
608 82	- 鉢石	SE01	-	泥文若?	-	-	-	研ぎ面は1面	-
609 82	- 石臼	SE01	-	妙若?	-	-	-	-	-
610 83 36	土陶器・杯	ST01	7/8	中・普 10YR7/6明黄褐色	刮伝ナデ・ヘラ切り	刮伝ナデ	分厚く、ちぬな作り	-	-
611 84 37	土陶器・杯	ST02	7/8	底8/8 中・少 (9)7.5YR8/6灰褐色	刮伝ナデ・ヘラ切り・板ナデ	刮伝ナデ	-	-	-
612 84 36/37	土陶器・杯	ST02	8/8	中・少 (9)7.5YR8/6灰褐色	刮伝ナデ・ヘラ切り・板ナデ	刮伝ナデ	-	-	-
613 84 37	土陶器・杯	ST02	底8/8	細・普 (9)7.5YR8/6灰褐色	刮伝ナデ・ヘラ切り	刮伝ナデ	-	-	-
614 84 37	土陶器・杯	ST02	底8/8	細・普 (9)7.5YR8/6灰褐色	刮伝ナデ・ヘラ切り	刮伝ナデ	-	-	-
615 84 37	土陶器・杯	ST02	底8/8	中・少 10YR8/6灰褐色	刮伝ナデ・ヘラ切り	刮伝ナデ	-	-	-
616 84 37	土陶器・杯	ST02	8/8	細・少 10YR8/4灰褐色	刮伝ナデ	刮伝ナデ	-	-	-

第27表 三段出口遺跡遺物観察表(2)

遺物 番号	構造 図版	構製・特徴	遺構名	残存量	出土	色調	外觀特徴	内面焼痕	整形・調整の特徴
617 88	-	電扇系扇器・皿	SD01	5/8	鐵鑄 (底上)23Y6/4灰黑色 (底)7.5Y5/3底オリーブ色	高台削り出し	重ね焼痕	佐賀県朝倉町内野窯産か、 見込み地の自転はぎ	
618 90 36	電扇系扇器・柄	SD02	底1/8	鐵鑄 (底上)R7/灰白色 (底)5Y6/3底青褐色	-	-	-	施釉・内面青花文	
619 90 36	電扇系扇器・猪口	SD02	底7/8	鐵鑄 (底上)9/白 (底)暗青色	-	-	-	外底蛇の目軸はぎ	
620 90 36	漆器・柄	SD02	-	-	-	-	-	外底黒地 内面赤地	
621 90 -	漆器・柄	SD02	-	-	-	-	-	内面赤茶	
622 90 36	土師器・小皿	SD02	2/8	織・少 73Y8E/6褐色	底板ナダ	底板ナダ	底板赤切り	底板・口縁に螺付竈	
623 90 -	京信象焼脚器・灯明皿	SD02	1/8	織・少 (底上)23Y6/4灰黑色 (底)73Y7/3底青褐色	底板ナダ	底板ナダ	底板ナダ	螺と片面に螺付竈	
624 90 36	木器・育器?	SD02	-	-	-	-	-	三ツ巴文	
625 90	36 鋼平瓦	SD02	小片	中・普 5/4灰黑色	ナダ	ナダ	ナダ	瓦面面にキャラコ使用	
626 90 -	鉢瓦	SD02	小片	織・普 5/4灰黑色	ナダ	ナダ	ナダ	瓦面面にキャラコ使用	
627 90 -	鉢瓦瓦	SD02	-	織・少 流文岩?	-	-	-	-	
628 90 36	砾石	SD02	-	-	-	-	-	-	
629 89 -	木器・板	SD02	-	-	-	-	-	-	
630 91 -	九瓦	SD03	-	織・多 (底)5Y5/1灰黑色 (底)N5/灰黑色	板ナダ	板ナダ・コビキ	板ナダ	板ナダ・コビキ	
631 92 -	土師器・甕	SR01	小片	中・普 (底)10Y8E/3灰褐色	板ナダ・板ナダ	板ナダ・ヘラ削り	板ナダ・ヘラ削り	板ナダ・ヘラ削り	
632 92 -	土師器・甕	SR01	3/8	織・普 5/7E6/6褐色	ナダ・指頭板・刷毛目	刷毛目・指頭板・刷毛目	刷毛目・指頭板・指ナダ	刷毛目・指頭板・指ナダ	
633 92 35	弦生土器・甕	SR01	小片	織・少 (内)7.5Y8E/3L-5L-5L褐色 (内)5.5Y8E/4L-5L-5L褐色	ナダ・沈縫	ナダ・沈縫	ナダ	ナダ	
634 92 35	弦生土器・甕	SR01	底2/8	織・普 (内)2.5Y8E/8褐色	ナダ	指頭板	指頭板	指頭板	
635 92 -	弦生土器・甕	SR01	小片	織・普 (内)N7/灰白色	板ナダ	板ナダ	板ナダ	板ナダ	
636 92 -	須恵器・高台付甕	SR01	小片	織・普 (内)N5/灰黑色	目板ナダ	目板ナダ	目板ナダ	目板ナダ	
637 92 -	土師器・甕	SR01	2/8	中・少 (内)10Y8E/2灰褐色	回伝ナダ・ヘラ削り	回伝ナダ・ヘラ削り	回伝ナダ・ヘラ削り	回伝ナダ・ヘラ削り	
638 92 -	土師器・甕	SR01	底7/8	中・少 (内)10Y8E/4L-5L-5L褐色	回伝ナダ・ヘラ削り	回伝ナダ・ヘラ削り	回伝ナダ・ヘラ削り	回伝ナダ・ヘラ削り	
639 92 36	土師器・甕	SR01	底1/8	織・少 (内)10Y8E/3灰褐色	回伝ナダ・磨滅	回伝ナダ・磨滅	回伝ナダ・磨滅	回伝ナダ・磨滅	
640 92 -	土師質・蓋	SR01	小片	織・普 10Y8E/3灰褐色	指頭板・ナダ	指頭板・ナダ	指頭板・ナダ	指頭板・ナダ	

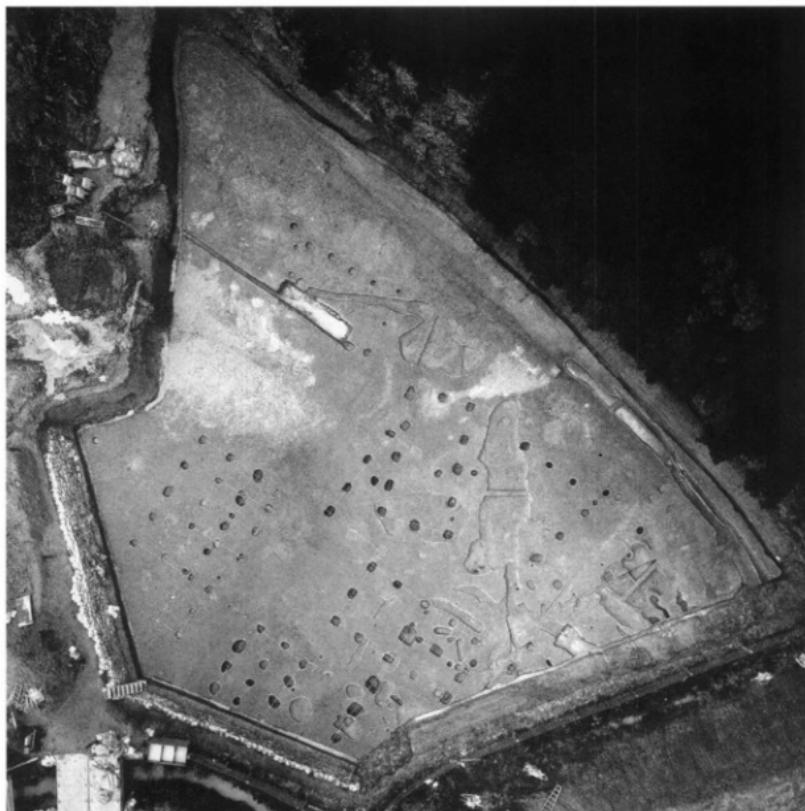
第28表 三跡出口遺跡遺物觀察表(3)

遺物 番号	神社 図版	種類・器種	遺物名	残存量	出土 角閃石混	色調	外面調整	内面調整	整形・調整の特徴
641	93	-	弦生土器・甕	包含層	1/8	中・少 75YR5/6明褐色			
642	93	-	弦生土器・甕	包含層	無1/8	中・多 (外)75YR5/6暗褐色	板ナデ・ナデ	磨滅	磨滅
643	93	-	弦生土器・甕	包含層	1/8	中・普 75YR6/6褐色	ナデ	磨滅	ナデ・磨滅
644	93	-	弦生土器・高杯	SK05	-	細・多 10YR7/4i-5i-黄褐色	板滅・泡き?	板滅	板滅・泡き?
645	93	-	弦生土器・高杯	包含層	-	中・普 10YR7/4i-5i-黄褐色	板ナデ・ヘラ磨き	板滅	板滅・ヘラ磨き
646	93	-	弦生土器・高杯	包含層	底1/8	中・普 5YR7/4i-5i-黄褐色	板滅	板滅	穿孔方向
647	93	-	弦生土器・盆	包含層	4/8	中・多 (外)10YR5/4i-5iv-青褐色	ヘラ磨き・叩き	ナデ・指頭研・指ナデ	
648	93	-	土師器・碗	包含層	底8/8	細・多 10YR4/4i-5iv-青褐色	ナデ	高台接合面にヘラで削み	
649	93	35	土師器・碗	包含層	底5/8	細・少 (外)10YR8/6黃褐色	面削ナデ・ヘラ切り・ナデ	圆板ナデ	圆板ナデ
650	93	35	土師器・杯	包含層	1/8	中・少 10YR6/3浅褐色	面削ナデ	圆板ナデ	圆板ナデ
651	93	37	土師器・杯	包含層	4/8	細・普 25YR6/3浅褐色	面削ナデ・ヘラ切り	目板ナデ	目板ナデ
652	93	37	須恵器・碗	包含層	底8/8	細・少 5YR1/8灰褐色	面削ナデ・ナデ	目板ナデ	目板ナデ
653	93	-	須恵器焼陶器・灯明皿	包含層	8/8	細・少 (輪)25YR7/2灰褐色	面削ナデ	口縁に張付骨	
654	93	-	京窯窯系陶器・碗	包含層	底6/8	精良 (輪)10YR8/3i-3iv-青褐色	回板ナデ	置付釉剥ぎ	
655	93	-	陶器・盃	包含層	8/8	精良 5YR1/8灰褐色	指頭研・ナデ	施釉・667とセフト	
656	93	37	土器・纺錘車	包含層	-	中・普 (外)10YR6/4i-5iv-青褐色	ナデ		
657	93	37	土師質・瓶	包含層	1/8	中・普 (外)10YR4/3i-5iv-青褐色	指頭研・刷毛目	板ナデ・ナデ・指頭研	
658	93	37	土師質・火鉢	包含層	-	中・少 (外)10YR3/1墨褐色	ヘラ磨き・印花文	ヘラ磨き・刷毛目・指面研	外面ミガキ底印花文
659	93	-	火石器・ナリ鉢	包含層	底2/8	細・少 (外)5YR2/4i-5iv-赤褐色	ヘラ削り・回板ナデ	ナデ	
660	93	37	瓦質土器・茶釜	包含層	洞1/8	細・少 (外)NA/灰色	板ナデ	外面部成形、キラコ繪布	
661	93	-	瓦質瓦器・蜜罐	包含層	2/8	細密 (輪)75YR5/1墨褐色	-	把手欠け妙目前み	
662	93	37	土師質・たんころ	包含層	8/8	簡・少 5YR6/6褐色	指頭研	芯差し先端に蓋付着	
663	93	37	石鏡	包含層	小片	材不明 5Rd1/8暗青灰色	-	海部に墨痕?	
664	93	-	製陶品・瓶?	包含層	8/8	-	-	下臼。目148分鋸	
665	93	-	石臼	包含層	-	砂岩	-	施土に粗粒他、セミ級	
666	93	-	土師質・輪羽口?	子椎調查	3/8	粗・普 10YR7/3i-5iv-青褐色	削面	指頭研・板ナデ	

第29表 三層出口・遺跡遺物観察表(4)

遺物 番号	種別 図版	性質	遺物名	性状	施土	色調	外面調整	内面調整	整形・調整の特徴
667 93	- 魔器・茎	包含層	8/8	精良	(14)25YR6/8等色 (外)25YR5/6明赤褐色	回転ナメ	回転ナメ	655とセフト	

図版

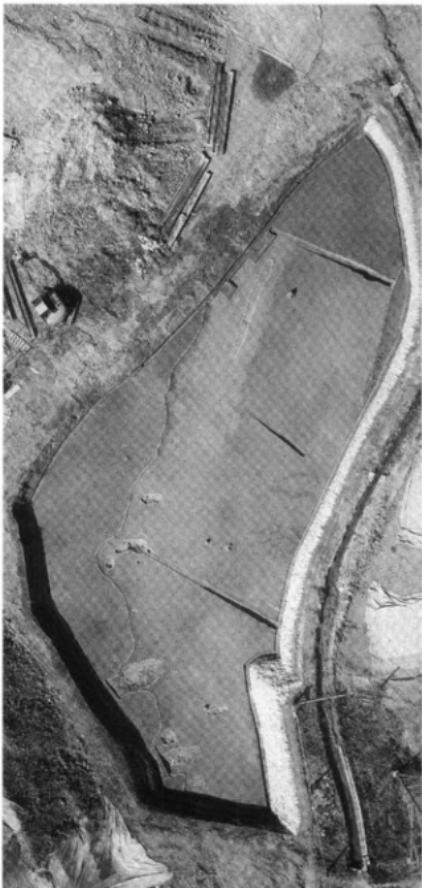


川北遺跡 I 区調査終了（俯瞰）

図版2



川北遺跡Ⅱ区調査終了（俯瞰）



川北遺跡Ⅲ区調査終了（俯瞰）

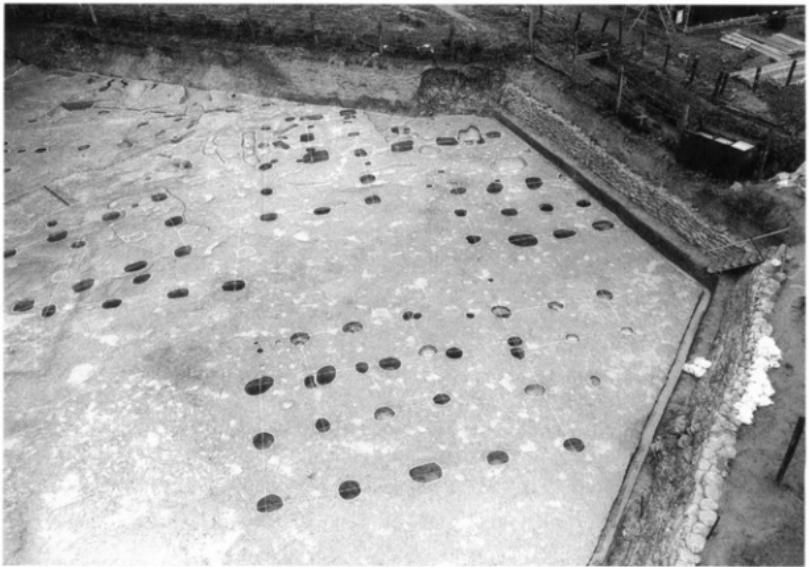


川北遺跡 IV 区調査終了（俯瞰）

図版 4



川北遺跡遠景（南より、中央）



川北遺跡 I 区調査終了（南西より）



川北遺跡Ⅰ区調査終了（南より）



川北遺跡Ⅱ区調査終了（南東より）

図版 6



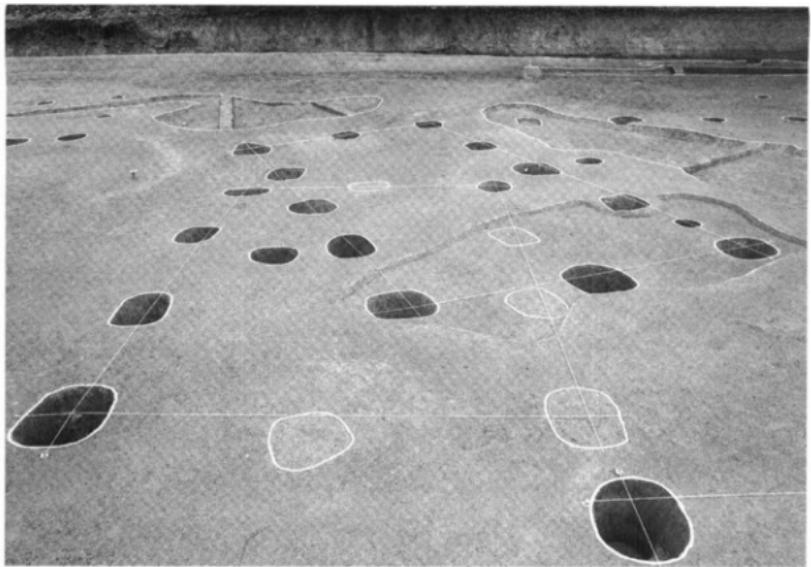
川北遺跡 SB01・02、SD01～03調査終了（西より）



川北遺跡 SB01・02・09、SD01～03調査終了（東より）

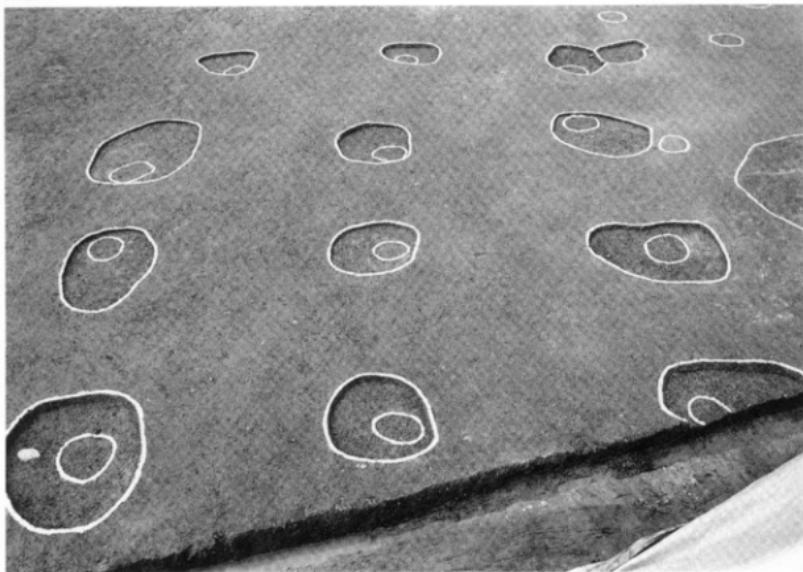


川北遺跡 SB01・02・04、SD01～03調査終了（北より）

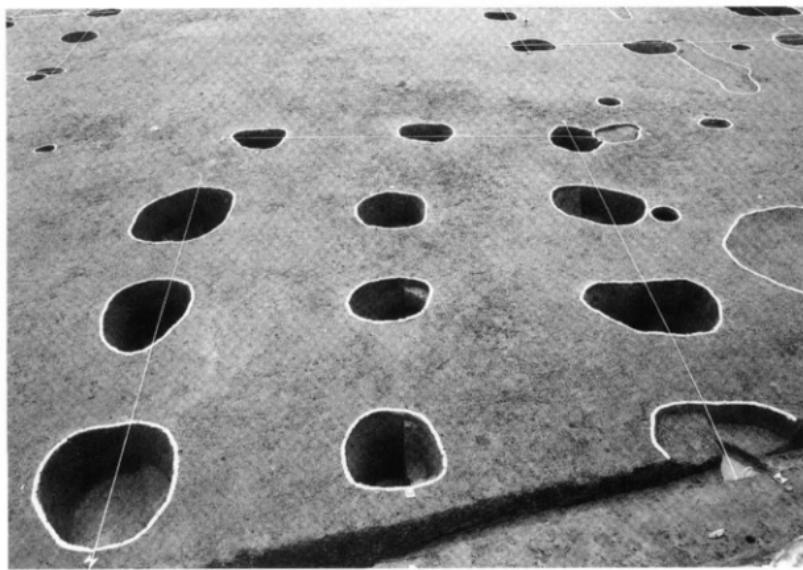


川北遺跡 SB03・09調査終了（南より）

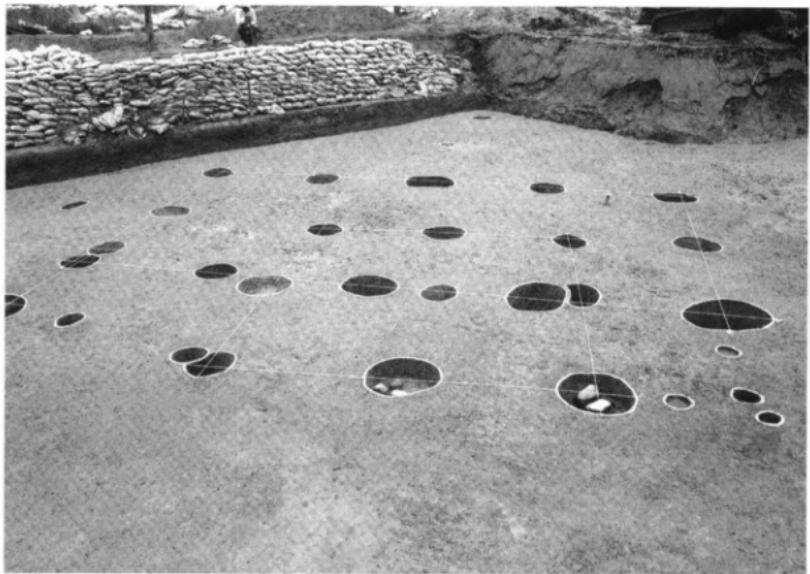
図版 8



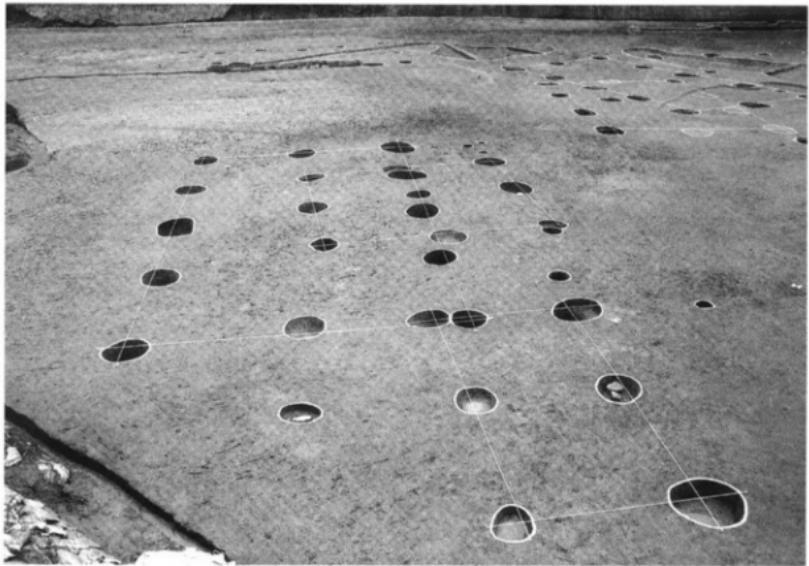
川北遺跡 SB02 柱痕検出状況（南より）



川北遺跡 SB02 調査終了（南より）

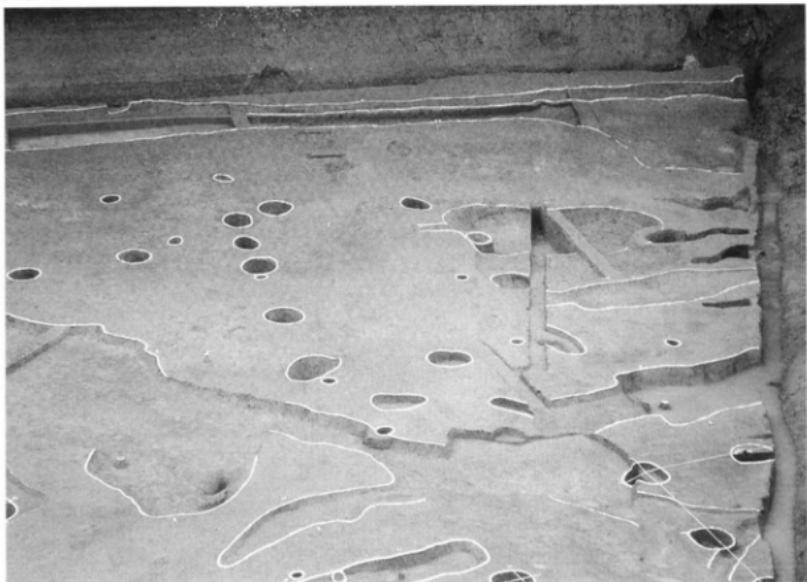


川北遺跡 SB05・06 調査終了（東より）

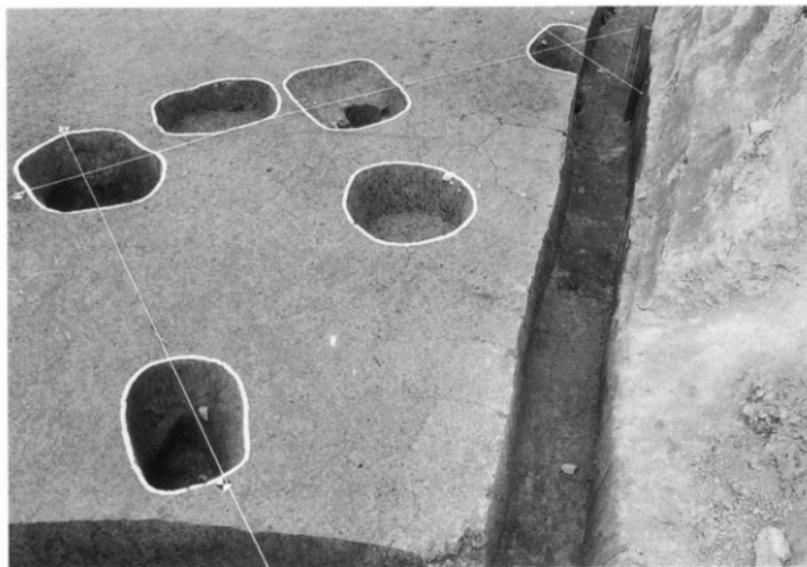


川北遺跡 SB05～07・09 調査終了（南より）

図版10



川北遺跡 SB10、SD05～09調査終了（南より）



川北遺跡 SB12調査終了（南より）



川北遺跡 SB01—SP8断面（西より）



川北遺跡 SB01—SP11断面（北より）

図版12



川北遺跡 SB04 - SP06断面（西より）



川北遺跡 SD08・09調査終了（東より）



川北遺跡 SD18調査終了（北西より）



川北遺跡Ⅲ区噴砂痕（シミ状のもの）検出状況（南より）

図版14



川北遺跡 SR01 杭列②打ち込み断面（南より）

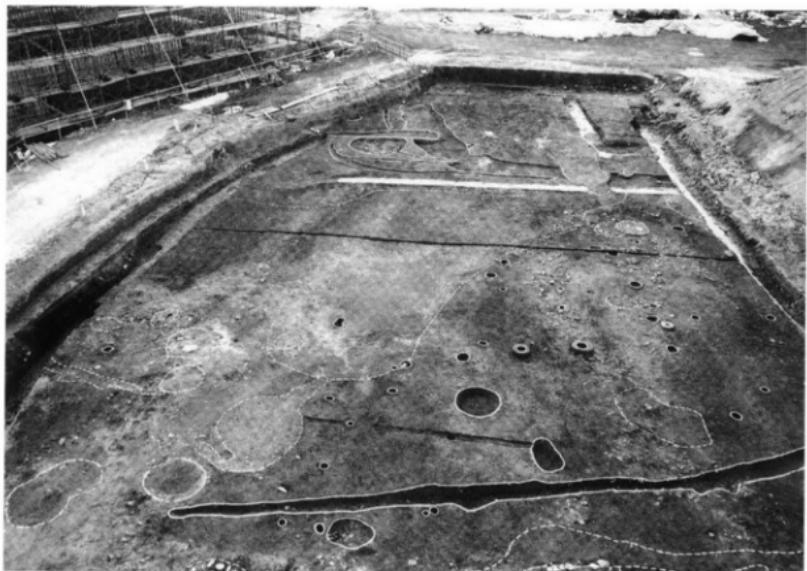


川北遺跡 SR01 杭列②打ち込み状況（南東より）



三殿出口遺跡Ⅱ-②区、Ⅲ-②区調査終了（俯瞰）

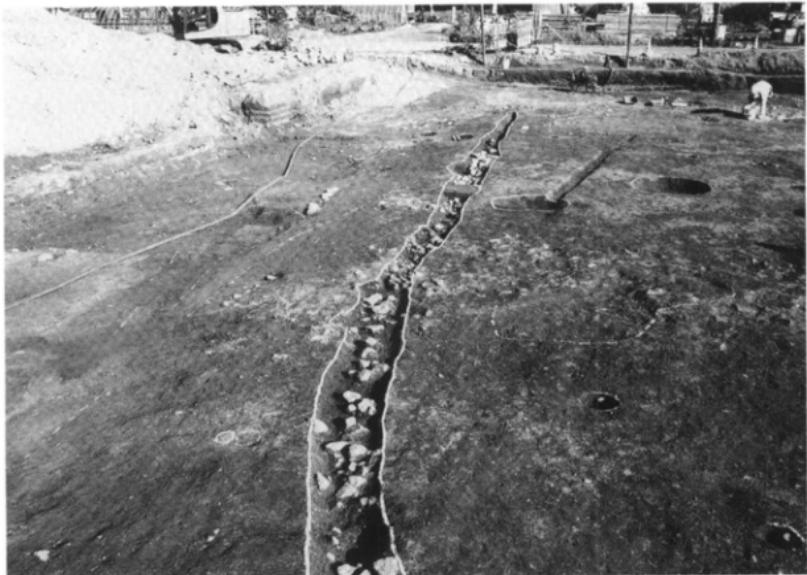
図版16



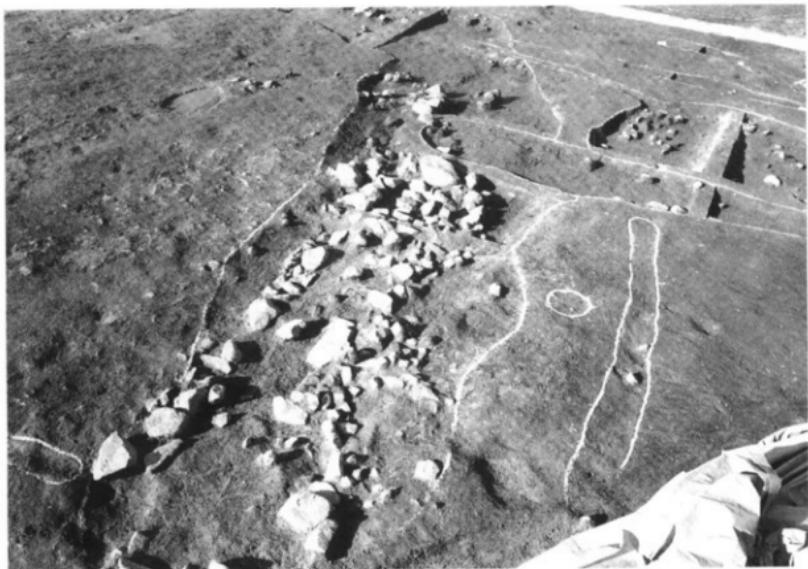
三殿出口遺跡 I-②・③区調査終了（北より）



三殿出口遺跡 I-②・③区調査終了（南西より）



三殿出口遺跡 SD01 内礫群検出状況（西より）



三殿出口遺跡 SD02 内礫群検出状況（南より）